独立行政法人福祉医療機構
「長寿・子育て・障害者基金」助成事業

児童館における中高生のボランティア活動活性化事業

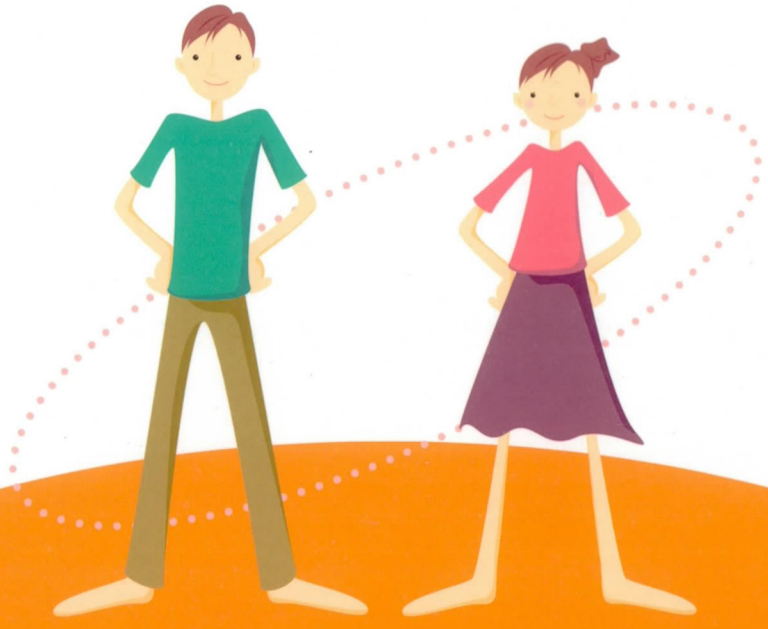
地域に発進!!
ボランティア 1・2・3

VOLUNTEER

ワン　ツー　スリー

全国の自治体・児童館における中高生活動の実態調査

［資料編］



こどもの城

もくじ

目次 CONTENTS

資料編

目次 …… 1

アンケート概要 …… 2

児童館・自治体への
アンケートの総括 …… 3

児童館への
アンケートの結果と考察 …… 8

自治体への
アンケートの結果と考察 …… 14

中高生への
アンケートの総括 …… 20

中高生への
アンケートの結果と考察 …… 22

資料 …… 28

［本編目次］

事業の概要 …… 4

事例紹介① NPO法人市川子ども文化ステーション 6

事例紹介② 塔南の園児童館 …… 7

提言① 増山　均 …… 8

提言② 勝部　久美子 …… 10

事例紹介③ ティーンズボランティアグループ「ポケット」 …… 12

事例紹介④ 徳島県ＴＩＣ運動 …… 13

事例紹介⑤ 松山市中央児童センター …… 14

事例紹介⑥ 中高生の居場所「バコハ」 …… 15

提言③ 原　京子 …… 16

事例紹介⑦ 宝塚市立大型児童センター フレミラ宝塚 …… 18

事例紹介⑧ 足立区西保木間児童館 …… 19

事例紹介⑨ 佐世保市ボランティアセンター …… 20

アルバム …… 21

対談① フレミラ宝塚 …… 22

対談② じぇねぷろ …… 26

アルバム …… 31

聞き取り① NPO法人市川子ども文化ステーション 32

聞き取り② じぇねぷろ …… 33

聞き取り③ 塔南の園児童館 …… 34

聞き取り④ バコハ …… 35

提言④ 水野　篤夫 …… 36

提言⑤ 田中　豊 …… 38

聞き取り⑤ ティーンズボランティアグループ「ポケット」 …… 40

聞き取り⑥ 松山市中央児童センター …… 41

提言⑥ 森田　洋喜 …… 42

提言⑦ 久田　邦明 …… 44

提言⑧ 佐野　真一 …… 46

アルバム …… 48

地域や児童館における中高生活動の実態について

アンケート概要

■本アンケート調査の目的

本事業は「児童館の中高生を対象にした活動が、中高生の居場所、生きがい機能として効果を発揮すると共に、メンバーの自律性を高め、より豊かな市民性と道徳性を養う機会となるための事業のあり方を模索し、今後の児童館活動の一つのあり方を提案すること」を目的にしている。この調査研究は2か年計画とし、第1年次は中高生事業の行政・施設での取り組み状況と活動に参加している中高生の実態調査を実施した。

■アンケート調査の実施について

本事業の一環として、現在の中高生活動の実態を把握するために、全国の行政と児童館・子ども会等の青少年団体を対象にして、中高生活動に関するアンケート調査を実施した。

この調査は、全国の児童館（約4,912か所）、自治体の児童福祉主管課（2,033か所）教育委員会青少年教育担当（1,870か所）へ行うアンケート調査の実施と、先駆的な事例を持つ諸機関への聞き取り調査（全国10箇所）及び、これらの団体・施設などで実際に中高生対象の活動へ参加している中高生の意識調査とする。

■アンケートの調査方法

①行政（児童福祉主管課および教育委員会青少年教育担当）・児童館に対するアンケート調査

調査方法は調査用紙を作成し直接発送、調査対象である各機関・団体に記入・返送をお願いした。なお、調査項目については運営委員会で検討をした。（P28～P32を参照）返送は平成19年12月20日までとし、その後集計をし、分析・まとめを行った。

調査対象としては、全都道府県と全区市町村の中高生の事業主幹課を網羅するため、調査漏れが生じないよう児童福祉分野と教育分野の両方を調査した。原則、各自治体へ2か所ずつの調査となるが、政令指定都市（特別区を除く）の各区については児童福祉主管課のみの調査となったため、調査件数としては若干福祉系の発送件数が多い。

②実際に中高生活動へ参加している中高生メンバーへのアンケート調査

①と同様に調査項目を検討、調査用紙を作成し、運営委員会の紹介や、以前の調査などで中高生の活動を実施していることが明確な団体・児童館などに依頼をし、承諾を得られた団体・施設へお願いした。

調査への回答件数は全部で53団体（施設を含む）、合計384名の協力を得ることができた。地域的には首都圏、続いて関西方面が多く、北から南までを分布している。主な活動目的としては、子ども会のジュニアリーダーや児童館等の施設で活動するグループ、居場所グループ、子どもNPOなど多岐にわたる。活動内容としてはリーダー活動、ボランティア活動、音楽などの同好のクラブ活動、地域活動、居場所活動などがみられる。

中高生を対象とした事業の考察

1 中高生事業の実施状況

地域の中高生を見守る ミクロとマクロの目

今回のアンケート調査で児童館、行政それぞれの中高生を対象とした事業実施状況を調査したところ、児童館では約80%が実施、行政では15%程度の結果となった。約80%の児童館が中高生を受け入れてはいるが、その約半数が、「施設貸出し・利用のみ」という実施の形態である。この点を考えると、地域の中で、積極的に中高生たちに働きかけ、その豊かな育ちを保障するための専門的なケアの機会が、まだ十分とは言えないのではないだろうか。また、児童館と行政の事業実施状況の差が大きいことも課題であろう。子どもの育ちは地域全体で保障していくことが必要になってくる。そのためには、地域社会という共同体をミクロとマクロの目で見ることが必要になってくるだろう。住民同士や、地域団体、児童館といったミクロ的なケアと、それを統括するいわばマクロ的な行政機関の連携が重要だ。今回のアンケートからは、児童館と行政機関の連携への課題が感じられた。児童館という現場と教育、福祉をあずかる行政機関の連携が、今後一層、密になることが望まれる。

2 児童館の中高生事業の特性

居場所から地域の担い手へ

■子どもとしての中高生

児童館事業としては、調査結果の中で「目的」「意義」の項目で多く見出せた「居場所」「異年齢交流」「利用拡大」などのキーワードが挙げられる。これらの言葉は、地域に密着した子どもたちの活動場所として存在する児童館の特性をよく表している。多くの児童館では中高生が施設利用の対象者であり、子どもたちの身近な自由来館施設であることを重視しているからこそ、こうした言葉があげられてくるのであろう。中高生が「ふらり」と訪れる施設の特性こそ、地域における児童館の担っている役割と言えるのではないか。

■居場所としての児童館

児童館には具体的に「ボランティア」活動などの明確な目的意識を持っての来館を期待する前に、まずは中高生自身の居場所となったり、楽しんだりすることを大切にして、活動を提供している傾向がある。そして、こうした活動に続くのが「小学生のモデル」「活躍の場」「ボランティア」という他者との関わりを示すキーワードになる。さまざまな世代が来館する児童館ならではの傾向である。

児童館の役割として、利用対象である中高生自身の興味・関心についての要求を満たすことがまずは大切であり、たくさんの中高生に児童館を知ってもらい、利用促進するためのきっかけが必要と考えているのではないか。その上で、次のステップとして「ボランティア」などの活動を考えている姿を感じることができる。

■児童館の活動の広がり

少数ではあったが児童館の中には「悩み相談」「要保護児童対策」「心の成長」など思春期の中高生を支える日常的な地域の力となることをねらいとして活動をしている回答もあった。これも児童館としては大切な観点であると考える。この世代の子どもたちを、地域の日常生活に密

着した空間で把握できる施設として、児童館の役割は大きい。地域に根差す施設としての特性を活かして、ひとりひとりの子どもたちに寄り添う視点が、特に思春期を迎える子どもたちにとって必要であろう。

■地域の担い手として

行動が多様化し行動範囲が広がる中高生に対し、地域が連携しさまざまな協力体制がとれることは、有効かつ有意義である。しかし、児童館の実態としては館の中で完結する活動が多く、地域の子どもたちが来館しているにもかかわらず、地域とのかかわりが薄い傾向があり、社会資源である自治会やNPOなど「地域の大人」との協力が十分でないことが多い。また中高生へのアプローチとしても、館の中の活動だけでは、小さな子どもたちの「モデル」としての期待だけに終わってしまい、大きな広がりは期待できない。「目的・意義」の中に出てくる「地域交流」「地域活性化」などのキーワードは、地域の中で求められている児童館の役割を端的に表している。先に述べた「ボランティア」などのキーワードと合わせて、身近で自治的な活動、市民的な活動について考える機会を中高生と共につくっていく必要を感じる。

3 行政の中高生事業の特性

子どもから、大人までを対象にした人材育成システム

■地域へつながるシステム

行政のねらいについて、今回の調査の「目的」「意義」から回答として多かったものについて考えてみる。行政の目的の中で、回答が多かったキーワードとしては、「リーダー育成」「ボランティア」「子ども会活性化」「社会参加の機会」「親の意識の醸成」「人材育成」などと続いている。ここから読み取れることは、行政として、「子どもがその年代に応じた関わりを地域と持つこと」を期待するとともに、次の世代を支える若い人たちを地域へ取り込み、その仕組みを自治的に支えていかれるように。次世代を育てるシステムを構築しようと努力している姿を感じることができる。

■人とのつながり

「リーダー育成」「ボランティア」「社会参加」「人材育成」については、地域との関係が学童期からだんだん薄くなり、最も希薄になる中高生のこの時期こそ積極的にアプローチをし、その世代の役割をつくりだそうとしている様子がうかがわれる。これは、地域のアクションに中高生が役割を持って参加する機会をつくろうとしていることで、子どもから大人へ連綿と続く地域の担い手の人材育成システムとも言える。

■地域での活動支援

アンケートで述べられている「リーダー育成」という言葉は、上記の他のキーワードと同じように、地域での活動を支援する者、自治的な活動を支える者、または指導者の候補として長く育てていくことを意味しているのだろう。「子ども会の活性化」については、中高生が関わることで、子ども会活動そのものの活性化を狙うと同時に、中高生が次の世代である学童期の子どもたちのモデルになることも期待するものと考えられる。

行政アンケートの「意義」については、上位を占めるキーワードとして、「地域の活性化」「社会性」「ボランティア」「リーダー育成」「異年齢

交流」「地域交流」などが挙げられる。中高生の成長を見つめ、地域を支える将来への期待が感じられる。

4 「児童館」と「行政」の中高生事業の違い

児童館は施設をこえて地域へ広がろう

■違いの実態

児童館のねらいは「居場所」「児童福祉の制度上の対象」など、中高生を子どもの対象の一部分として理解し、児童館の利用対象者である個々の中高生への対応を中心に考えている。行政は地域の中での活動を重視し、大人から子どもまでの大きな縦割りの中で中高生の活動について考える傾向にある。その中で役割を持ち、活動することを想定して、活動の場を提供しているようである。

■地域を総合的に捉える行政

行政の目的であるすべての住民を対象にした生活の維持・向上を目指す考え方を反映し、住民の自治的活動を促進する一つの方法として、青少年育成は行われている。青少年育成活動の歴史は長く、当然そこには、人材、手法等、中高生事業活性化ための優れたノウハウが存在しているだろうと考えられる。しかし、行政の事業自体は縮小傾向にあり、アンケートの回答からもそれは伺える。

活動の形態について言えば、児童館のように施設での日常的な活動というよりも、公民館などを必要な時に活用した講座・クラブ的な活動が多い。そのだけに、活動に対する目的などを明確に打ち出していかなくてはならないのではないか。

■館主義からの脱却

～子ども対応から地域に広がる児童館～

児童館は乳幼児から中高生まで幅広い層の子どもたちを対象とする地域施設である。ここでのねらいの一つは対象者としての中高生を受け入れる「遊び」の提供であり、更に異年齢交流の中でどう互いが関わり、影響し合いながら成長できるかを考えることがねらいとなる。近年、児童館で展開する「乳幼児と中高生のふれあい事業」は、近い将来に親となる子どもたちが普段ふれることのない乳幼児や親と交流する中で、互いに成長し合うことを狙いとしている。このように専門である「子ども」というキーワードを軸にして、互いに交流しながら成長し合うことは、大変有意義な活動であり、今後も更なる展開が期待できる。ただし、こうした活動も広がりが大切である。館の中だけで完結し来館者同士をつなぐだけでなく、館をベースとした日常的活動のよさを活かして、行政の活動の利点も取り入れ、地域の中でのさまざまな人をつなげることを考えていけば、活動は更なる広がりを持ったものになっていくのではないだろうか。

5 中高生事業の課題の現状

地域全体の力を活用した中高生プログラム

児童館、行政共に、半数近い職員が中高生事業に関して不満や悩みを持っていることがわかった。その理由として、児童館は「参加人数」「内容」「メンバーの質」、行政は「参加人数」「学校との連携」「指導者不足」をあげている。「参加人数の減少」はどちらにとっても共通の悩みである。しかし、2番、3番目の理由は児童館と行

政では異なる。児童館は来館する中高生に直接対応しているところから生まれてくる課題、行政は地域社会全体をとらえた課題とその色分けができるだろう。ここで考えなければいけないのは、それぞれの課題を共通なものとして受け止め、中高生にとって魅力的なプログラムや対応が、地域全体の力で実施される必要があるということだ。特に児童館にとって行政での事業展開例を参考にすることは意味のあることである。行政の中高生への取り組みは長い歴史もあり、地域とのつながりや大人から子どもまでの幅広い年齢の交流の考え方に立って行われることが多い。そのため、活動をすることによって、地域の子どもや大人とのふれあいへと自然につながっていく。本事業で取り組む活動についても、地域での児童館活動ということを念頭におき、活動の展開を考えていく必要があるのではないだろうか。

6 地域における中高生活動の今後の展望

■自主的な活動を推進するために

今回のアンケートで大人の関わり方を事業ごとに調査したが、児童館、行政共に「指導者」としての関わりが一番多かった。ではどんな活動に期待があるかと言えば、児童館では「自ら創り出していく活動」「自主性を大切にして、充実感や達成感を味わえるよう支援していく」、「自ら企画する自主的な児童センターへの関わりを期待する」等、行政では「毎年同じ内容ではなく高校生自身で新しい企画を期待する」、「大人の指導を極力少なくし、中高生が学びたい事を体験する」、「参加者と共に企画・振興し、地域との関わりを多くもてるようにしたい」等、中高生の自主的、主体的な活動に期待する声が多くあがっていた。自主的な活動を期待しながらも、現場では「指導者」としての関わりが多いという矛盾した結果になっている。もちろん「指導」という言葉の意味の中に、「助言者」や「サポート」という意味も含んでいるとも考えられるが、おそらく多くの場合は、指導的な側面が強いためにこうした言葉がでてきたのだと考えられる。

この調査でもわかるように、中高生への様々なアプローチの中で、「指導」という側面が強いほど、中高生の自主的な活動は育ちにくい。中高生の自主的な活動の機会を児童館や地域で増やしていくためには、児童館スタッフ、行政職員、地域のボランティアと中高生との関係づくりが、今後の大きな課題となってくるだろう。

■参加者を増やすために

児童館、行政の共通する最大の悩みは、「参加者の減少」である。この数の減少には様々な要因が考えられる。最大の要因は、アンケートからも読み取れるように、「学校やクラブが忙しい」という多忙な中高生が多いことと、児童館の開館時間が中高生の生活実態と合っていない点だと考えられる。中高生の生活実態に合わせた事業の実施を児童館のサイドから考えると、夜間開館も一つの方法だが、実施していない児童館にとってそれを実現するためには、多くの障害がある。その前に考えなければいけないのは事業の実施頻度かもしれない。アンケート調査で事業の実施頻度を聞いたところ、児童館、行政共に一番多かったのが、「年１～２回」だった。この頻度では、忙しい中高生がその活動に参加する機会は極めて少ないと言わざるを得ない。中高生の継続的な活動を行うために、積極的なアプローチを考えていく必要があるだろう。

■事業内容の充実を図るために

プログラム内容のアンケート調査によると、

児童館では「プログラムへの参加」「自由利用」「行事の企画運営」が多く、行政では「ジュニアリーダー」「ボランティア活動」「キャンプ・講座」が多かった。事業内容の充実を図るには、まず中高生のニーズをとらえるといことが欠かせない。

中高生メンバーへのアンケート調査の結果で後述するように、中高生自身が活動に充実感を感じるのは「目標を達成したとき」という結果がでた。彼らを引き付けるのは、プログラム内容ではなく、そのプロセスである。そのプログラムに自分がどれだけ必死に取り組み、全力を出し切って、目標を達成したかということが重要だと理解できる。彼らが求めているのは、プログラムの表面的な面白さよりも、もっと深い部分で心を揺り動かす体験なのだろう。大人が考えるプログラムの在り方についてもう一度考える必要がある。

また、児童館、行政共にキーワードとして挙げられている「行事の企画運営」「ジュニアリーダー」「ボランティア活動」というアンケート結果のとらえ方も考えていきたい。すなわち「自分の欲求を我慢して、人のために行う活動」というよりも、これを「自分の地域を自分たちで支える自治的・市民的な活動」ということで理解し、自分の好きなこと、やりたいことが、気軽にできるところから始まり、その喜びを地域や児童館でもっと多くの人の喜びにつなげていけるような活動展開が必要だと考えている。例えばバンド活動をしているグループは、それを自分たちだが楽しむ活動として展開するだけでなく、地域の皆さんにも聞いてもらおうという取り組みに広げる。そんなきっかけづくりを児童館がキーとなり展開できればと考える。

自分達の興味・関心が活動のスタートでも、それが社会的、市民的な役割を持ち、地域の中で認められる活動へと広がっていくことが大切だと考えられる。

児童館の現状と中高生の来館状況

1 公設民営の児童館が増えている

こどもの城で把握している全国の児童館 4,912 館に対して直接アンケートを発送し、回答をお願いした。併せて事前に、各都道府県主幹課に対し、児童館に対してアンケートを実施することへの協力の依頼を行った。

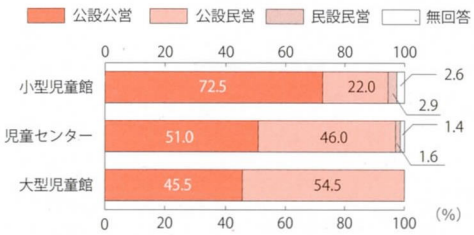


図 1. 児童館の種別と運営形態

2,404 館から回答があり、アンケートの回収率は 48.9％だった。回答のあった児童館の設置・運営者についてみると、小型児童館は公設公営の児童館が多いが、児童センターと大型児童館では公設公営と公設民営がほぼ半分ずつとなっている。これは指定管理者制度の導入による影響もあり、今後全体的に公設民営が増えてくると予測できる。

2 小型児童館では3～4人で対応

児童館のスタッフを見てみると、小型児童館で専任スタッフは平均で 2.9 人、非常勤スタッフが 2.0 人であり、仮に専任スタッフが週 5 日、非常勤が週 3 日とすると、1 日あたりのスタッフ数は 3 ～ 4 人と考えられる。

表 1. 児童館の種別とスタッフ数

	スタッフ数		専任スタッフ数	
	平均	SD	平均	SD
小型児童館	4.9	2.9	2.9	1.8
児童センター	5.8	5.9	3.3	3.6
大型児童館	24.3	15.1	14.3	12.7

3 児童センターが中高生活動の中心

児童館の利用者数について見てみると、下図の通りである。小型児童館・児童センターでは、土日よりも、平日に多く来館者がある。

表 2. 児童館の種別と平均来館者数

	平日		土日・祝日	
	平均	SD	平均	SD
小型児童館	57.8	43.0	40.9	49.7
児童センター	82.5	67.0	72.9	168.9
大型児童館	509.8	397.4	1,219.8	1,027.4

その入館者における中高生の割合を見たものが、図 2 である。中高生の来館者がない、もしくは受け入れていない館は、大型児童館が割合としては最も多く 40%、児童センターが最も少なく 18.4%となっている。児童センターでは来館者に占める中高生の割合が 20%以上の館が約 15%あり、中高生の受け入れが最も進んでいると考えられる。

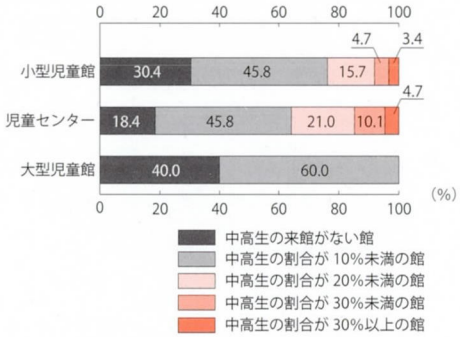


図 2. 入館者数に占める中高生の割合

2 児童館での中高生の受け入れ状況

1 受け入れ方法は自由利用が中心

回答のあった児童館のうち、「（中高生を）受け入れている」と答えた児童館は83.4%だった。施設形態別にみると、小型児童館で81.9%、児童センターで87.7%、大型児童館で91.3%が「受け入れている」と回答している。施設の規模が大型になるほど、受け入れの率が上昇している傾向にある。

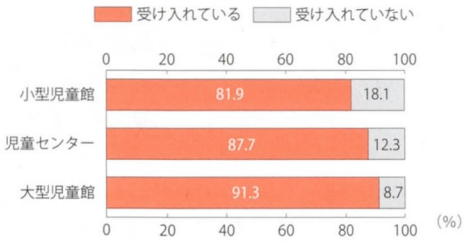


図3. 児童館の種別と中高生の受け入れ状態

また、受け入れ形態について「施設貸出・利用のみ（自由利用）」「施設側が実施する事業として」「その両方」と3つの選択肢を設け選んでもらった。全体で「施設貸出・利用のみ」が44.7%と一番多かった。施設形態別に比較すると、小型児童館・児童センターは、「施設貸出・利用のみ」が最も多く、大型児童館では、「施設貸出・利用」と「事業実施」の両方を実施するケースが多かった。

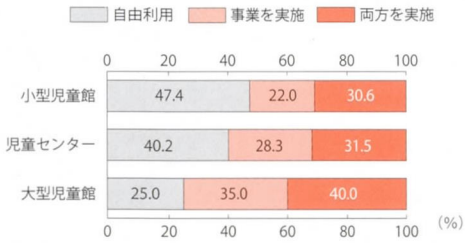


図4. 児童館の種別と中高生の受け入れ方法

今回の選択肢である「施設貸出・利用のみ（自由利用）」に、児童館スタッフの意図的なアプローチがあるかどうかはわからないが、中高生受け入れの約半数が「施設貸出・利用のみ」という結果になったのは課題ではないだろうか。

2 児童館では中高生は支援の対象外

一方、中高生を受け入れていない理由を見てみると、「保育型児童館のため」「学童保育中心のため」「市の条例のため」など、自治体の児童館に対する考え方により、中高生を「支援の対象外」としており、4割を越す結果となった。

小型児童館では、次に続く理由としては、「中学生の利用がない」「要望がない」「へき地で利用がない」など、「利用者なし」という理由が多く、3割弱あった。

児童センターでは、「施設設備が中高生に対応していない」「児童センターが狭いため」などという施設設備上の理由、「受け入れ体制ができていない」「スタッフが足りない」など運営上の理由と続いた。

表3. 中高生を受け入れていない理由（%）

小型児童館		児童センター・大型児童館	
支援の対象外	41.6	支援の対象外	47.3
利用者がない	27.1	運営上の理由	16.2
施設設備上の理由	15.4	施設設備上の理由	14.9
運営上の理由	10.7	利用者がない	13.5

地域における子どもの育ちを連続的な視野でとらえていくためには、幅広い対象者を受け入れる施設が必要である。中高生を受け入れていない理由として、「支援の対象外」「利用者がない」となっているが、この点についてはそれぞれの自治体で改めて検証してほしい。

3 中高生対象の事業の内容

1 児童館主催のプログラムを中心に

事業内容についての詳細を見ると、「中高生を対象にした様々なスポーツ大会」「中高生向けの映画会の実施」などの「児童館が主催するプログラム」と、「毎月第3水曜日夜間まで解放」「ダンス、楽器の練習」などの「自由利用」の2項目が最も多かった。次いで「お化け屋敷づくり」「地域の方々とまつりを企画運営」などの「中高生が主体となった企画運営活動」、「ボランティアとして受け入れている」「乳幼児とのふれあい交流事業」と続いている。

表4. 中高生を対象とした事業内容（%）

1	児童館を主催プログラム	16.9
1	自由利用	16.9
3	自主的な企画運営活動	12.1
4	ボランティア活動	11.4
5	乳幼児とのふれあい交流事業	10.6

「乳幼児とのふれあい交流事業」は、「主催プログラム」と「ボランティア活動」のどちらとも解釈できる。この点を加味すると、現状では「児童館の主催事業」と「ボランティア活動」が中高生を対象とした事業の中心となっている。

2 男子は居場所を求めている

事業に参加した男女比を見てみると、表5のように男子の割合が多い傾向にある。

表5. 事業に参加した中高生の男女比（%）

	男子	女子
中学生	69.8	30.2
高校生	61.1	38.9

更に詳しく見てみると、表6・7ように、「中高生タイム」「中高生しゃべり場」「夜間開放」などの居場所づくりの事業については圧倒的に男子が多い傾向にある。

男子ほど、居場所を欲していると考えられ、居場所の延長上にさまざまな事業への参加があるのではないだろうか。

表6.「居場所」に参加した中高生の男女比（%）

	男子	女子
中学生	80.2	19.8
高校生	70.7	29.3

表7.「居場所」以外の事業に参加した中高生の男女比（%）

	男子	女子
中学生	64.9	35.1
高校生	57.5	42.5

3 学校との連携がポイント

実施している事業について、「他団体との協力がある」と答えた児童館が過半数という結果になった。協力団体の種別としては、「学校」が最も多く、次に「地域の様々なボランティアグループ」との連携が続いた。

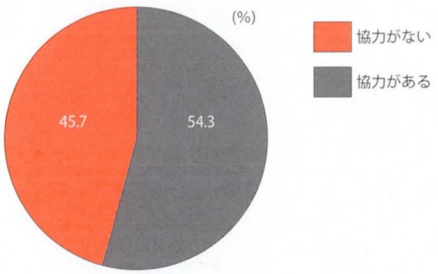


図5. 外部団体との協力

4 中高生対象の事業の頻度と大人（スタッフ）の役割

1 中高生対象の事業は年に1～2回

中高生を対象とした事業の頻度を見てみると、全体の5割強が「年1～2回」となっていた。

中高生の居場所と考えた場合、毎日は無理であっても週に2～3回程度は参加できることが望ましい。ところが現状としては、「毎日」および「週に2～3回」と回答したのは1割弱に過ぎなかった。

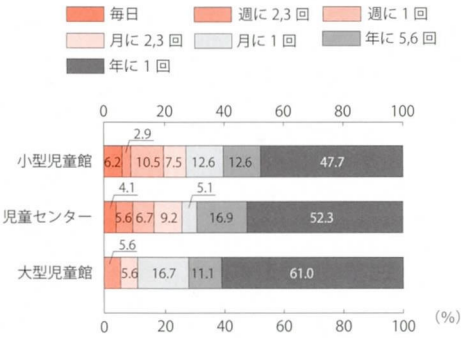


図6. 中高生対象の事業の頻度

施設形態別に見てみると、全体的な傾向と同様であったが、大型児童館では「毎日」実施している館はなかった。多くの大型児童館は、比較的郊外に位置しており、日常的に中高生が通うことが難しいことと関連していると考えられる。

2 中高生と相談して内容を決定

誰が事業内容を決定しているかの問いに、「中高生自身が決定」「大人（スタッフ）が決定」「中高生と大人（スタッフ）が相談して決定」の3つの選択肢を設けて答えてもらった。結果は下図のとおりで、「中高生と大人が相談して決定」「大人（スタッフ）が決定」「中高生自身が決定」の順になった。この結果から、児童館が中高生との協同的な関係を大切にしている実態が伺える。しかし、「中高生自身が決定」という率が非常に低い。事業の内容が児童館主催の事業やボランティア活動が多いことの影響だと考えられる。

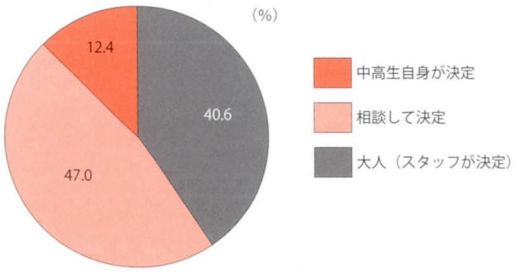


図7. 中高生対象事業の内容の決定

中高生の主体的な活動を促していくためには、企画段階から運営まですべての段階で中高生が参画できる事業も必要であり、この点が、今後の課題だと考えられる。

3 スタッフの関わり方は指導的要素が多い

中高生事業に約9割の大人（スタッフ）が関わっていると回答した。内容としては、「赤ちゃんと接する上での注意点を指示」「演奏指導」「内容指導・技の指導」「講座指導」など、「指導者」的関わりが一番多かった。次いで「自主的活動支援、助言」「アドバイス、提案、条件整備」「話し合いの際や困った際の相談役、取りまとめ役」など、「助言者」としての関わりとなった。

この結果から、中高生の事業に関わるスタッフの役割が明確になってくる。しかし、最も多く挙げられたのが指導的な関わりということについては、今後考えていかなくてはならない。もちろん、「指導」という言葉の中に、さまざまな意味が込められていることも考えられるが、スタッフが指導者的な立場で関わることによって、中高生の自発性を妨げる要因になっているのではないだろうか。

表8. 大人の関わり方の要素（件）

1	指導的な関わり	80
2	活動への助言	49
3	活動の補助	33
4	さまざまな調整	28
5	見守り	27

中高生対象の事業への工夫と課題

5

1 ポスター・チラシを中心に広報活動

児童館が中高生を対象とした事業を実施する際の募集方法について見てみると、児童館内に貼る「ポスター・チラシ」が最も多く、次に「学校と連携して」、そして『児童館便り』などの「会報（情報誌）」と続いた。

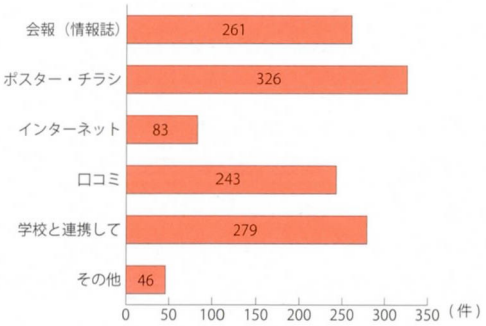


図 8. 募集方法（複数回答）

その他の項目では、「社会福祉協議会を通じて」「子ども会を通じて」など地域の団体に依頼してという記述が多かった。

「ポスター・チラシ」「会報」などは、児童館に来た人にしか届きにくく、地域全体に広報をするのであれば、学校や地域団体との連携は欠かすことができなない。特に地域団体との連携は今後の課題だと考えられる。

2 最大の悩みは参加人数

中高生対象の事業を行うにあたり悩みがあると回答したのは、約 5 割だった。その理由としては、「参加人数が少ない」「募集してもなかなか集まらない」などの参加人数に関する記述が最も多かった。次に多かったのは、「積極的に参加してもらうための方法」「中高生の興味関心の発掘」など活動の内容についてで、特に活動への動機付けには悩んでいる様子が伺える。また、中高生が活動できる時間と児童館の開館時間のずれの問題、学校行事やクラブ活動などで中高生は多忙であり、みんなが揃って活動することが難しいなどの記述も多く見られた。

表 9. 中高生事業をする上での悩み（件）

1	参加人数が少ない	139
2	事業内容について	49
3	中高生の関わり方・問題行動	42
4	時間の調整が困難	35
5	施設の環境	34

3 中高生の主体的な活動をめざして

中高生事業を運営する上で行っている工夫についての設問では、「中高生が関心を持てるプログラム作成」「季節に応じるように工夫」「できるだけ多くの児童が参加できるイベントを企画」など、「プログラム内容の工夫」が一番多かった。次いで「こども自身による運営」「中高生の意思を尊重」「自主企画の開催によって活動の動機付けを持たせる」など、中高生の「自主性を高める工夫が」が多かった。

中高生事業がメンバーのより主体的な参加で支えられるよう様々な努力をしている児童館の姿は浮かびあがるが、まだ児童館の中高生事業が、メンバーにとって受動的なプログラムに陥っている様子がわかる。

表 10. 中高生事業への工夫（件）

1	プログラムの内容	80
2	中高生の自主性	49
3	スタッフの対応	33
4	時間の調整	28
5	中高生を迎える雰囲気づくり	27

6 中高生対象の事業の意義と満足度

1 居場所づくりに意義を感じている

「あなたの施設で、中高生が活動することに対して、どんな意義を感じますか」という設問に対しては、「家庭や学校以外の居場所づくり」「中高生が気軽におしゃべりしてくれる場」「安心して過ごせる居場所」など、「居場所」というキーワードで結べる回答が最も多かった。次いで「異年齢交流を通した体験活動」「幼児、中高生の縦のつながりが密になること」「異年齢の関わりを通して、相手に対する思いやりの心を育てる」などの、「異年齢・異世代交流」、そして「小学生の良い手本」「小学生のあこがれ」「小学生の活動意欲が増すこと」など、「小学生の目標」というキーワードと続いた。

表 11. 中高生事業を実施する意義（件）

1	中高生の居場所づくり	54
2	異年齢交流	49
3	小学生の目標・モデル像	25
4	地域交流・活性化	20
5	ボランティア	18

2 現状への満足度は半分半分

次に、中高生に対する事業全体の満足度についての設問では、最も多かったのが「やや満足している」の46.0％で、「やや不満である」の39.3％が続き、満足している館と不満に感じている館の割合はおよそ半々であった。

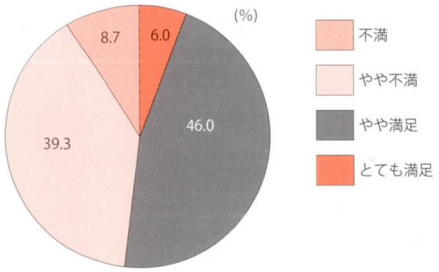


図 9. 活動に対する満足度

理由としては、「不満」と感じている館では、参加人数や内容のほかに、「自主性や行動力が不足している」「一部に乱暴な行動がみられたり、自分本位の所がみられたりする」中高生の態度や行為について言及しているものも多かった。

確かに、中高生の活動に取り組むにあたって、信頼関係が築けるまでの間に、問題的な行動があったり、コミュニケーションが図れなかったりすることがある。しかし、この壁を乗り越えなくてはならないのも事実である。

児童館の場合は、学童期からの継続性があるため、一人ひとりの子どもたちを長い目で見ることができる。中高生の中にも、学童期から遊びに来ていた子どももいるはずで、こうした中高生を核として、活動を広げていくことも大切である。

また、「満足」と回答した館では、「忙しい中高生が、居場所として自己実現の場として、とても充実した利用をしてくれている」「中学生がいることで、児童へ目が行き届き、小学生への声かけがたくさんできる」「中学生が積極的に、自分達も楽しみながら活動し、役割を果たしてくれている」など、中高生が児童館を居場所にしながら、主体的に活動をして、小学生などのよいモデルになっている様子が伺える。

しかし、「満足」と回答しながらも、「反抗したい時期と重なる中高生はわざと注意を促す行動をとり小学生よりも対応に手がかかることもある」「成長過程にある青少年なのでいろいろな問題も抱えている。彼らとつきあい、受け入れるのは大変なことでもあるが、彼らからも力をもらっている」など、中高生への対応の難しさと、それを乗り越えた際の喜びを記述している館もあった。

自治体による中高生対象の施設や事業

1 児童福祉主管課と教育委員会へアンケート

全国の都道府県・市区町村の児童福祉主管課（以下、［福祉］）2,033 件および、教育委員会青少年教育担当（以下、［教育］）1,870 件に対して直接アンケートを発送し、回答をお願いした。

［福祉］からは 849 件、［教育］からは 991 件の回答をいただいた。回収率は、それぞれ 41.8%、53.0%である。［福祉］については、児童館に対するアンケートも実施したために、回収率が低くなったのではないかと考えている。

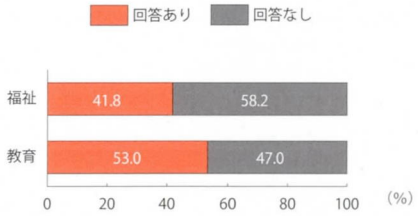


図 10. アンケートの回収率

2 中高生向けの施設は福祉施設が多い

それぞれの部門が担当する中高生を対象とした施設の有無に対する設問には、［福祉］で 8.9%、［教育］で 6.2%が「ある」と回答し、やや［福祉］が多い傾向にあった。［福祉］の場合、児童館を持つ自治体も多いので、もう少し高い値になると予測していたが、設問を中高生に特化した施設と解釈したために回答しなかった自治体もあるのではないだろうか。

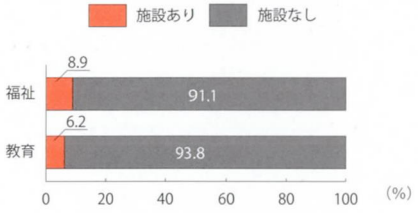


図 11. 中高生を対象とした施設の有無

3 中高生事業の充実を

一方、それぞれの部門が直接担当する中高生を対象とした事業の有無に対する設問には、［福祉］は 4.0%、［教育］は 16.4%と回答し、［教育］が多かった。

この値は、児童館や社会教育施設などで実施している事業を除いたものなので、実際には自治体全体の施策としてはもう少し充実していると考えられる。

いずれにしても中高生を対象とした施設や事業については、乳幼児や小学生の時期と比較すると、少ないことが明確になった。子どもの成長は、長い視野で見る必要があり、中高生に対する事業の充実は必要だと考えられ、特に居場所づくりは緊急の課題でもある。

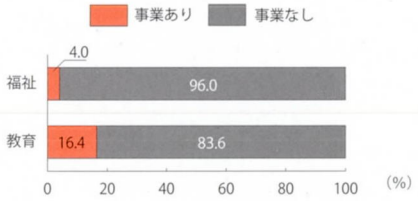


図 12. 中高生を対象とした事業の有無

2 自治体が直接行う事業の内容

1 「他者とかかわる」事業が中心

自治体の［福祉］［教育］が直接実施している事業について、詳細に答えてもらった。事業の数としては、圧倒的に［教育］の数が多く全体の83.0%を占める。事業の内容を見てみると、「イベント・お祭り」「サークル・通学合宿」「キャンプ・野外関係の講座」などの『中高生自身の関心・興味に関わる事業』と、「ボランティア」「乳幼児とのふれあい事業」「ジュニアリーダー」などの『他者とかかわる事業』に大きく分けることができた。そこで、［福祉］［教育］を比較してみたものが、図13である。［福祉］では『自己の関心』と『他者とのかかわり』がほぼ半々だが、［教育］では『他者』が著しく多かった。

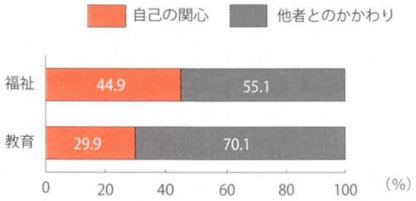


図 13. 中高生を対象とした事業の種類

『自己の関心』の事業については、［福祉］では「イベント・お祭り」、「教育］では、「キャンプ・講座」が多い。

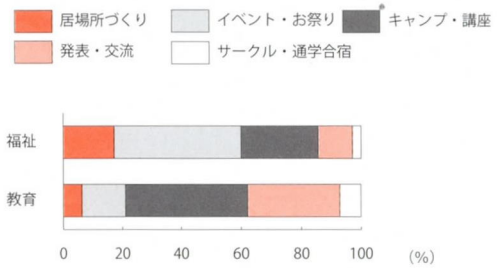


図 14.「自己の関心」の事業の内訳

2 ジュニアリーダーが大きな柱

『他者とのかかわり』の事業では、［福祉］では「乳幼児とのふれあい事業」が最も多く、［教育］では「ジュニアリーダー」に関する事業が多い。子ども会の衰退が危惧されているが、事業シェアとしては大きい。［福祉］［教育］ともに、次に多いのがボランティアに関連する事業である。

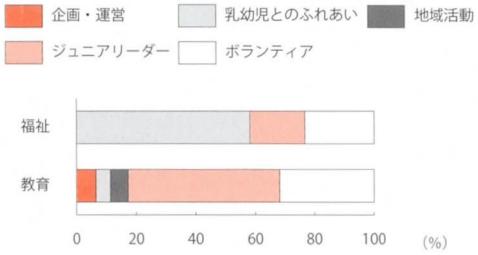


図 15.「他者とのかかわり」の事業の内訳

3 自治体による事業の活動人数と指導者

1 中学・高校ともに女子の参加が多い

行政が直接主催する事業の活動人数については、1事業あたり年間のべ人数で69.0人だった。後述する活動頻度との関係があるが、イベントのような一過性の強い事業が多いことを考えると、参加人数の規模の大きな事業が実施されている傾向が伺える。

表12. 1事業あたりの中高生の参加者数（人）

		男子	女子
中学生	［福祉］	18.3	24.2
	［教育］	21.0	28.3
高校生	［福祉］	8.3	15.4
	［教育］	9.7	13.7

男女比では、［福祉］と［教育］、中学生・高校生ともに男子より女子が多い。

［福祉］と［教育］とで参加者数を比較すると、高校女子を除いて、若干［福祉］の人数が少ない傾向にある。

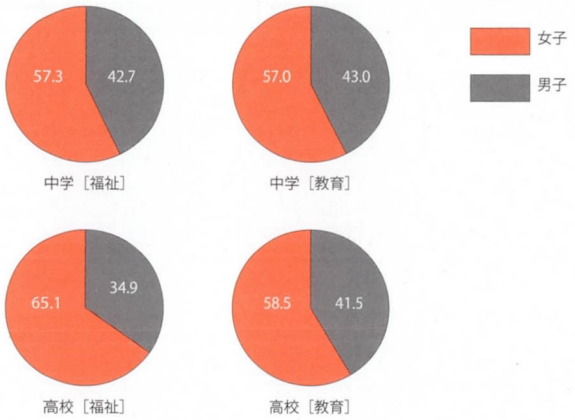


図16. 行政の事業に参加している中高生の男女比

2 行政担当者を中心に外部と協力して実施

中高生活動の運営に関わる指導者について回答のあった中で、外部の指導者の関わりについてまとめてみると、全体で74%の事業が外部の指導者と一緒に行っている。これは講師を招いて行う事業も含まれることが考えられるが、学生の割合を含めて考えると、運営補助などに多くの有志指導者が関わっていることが推察される。また、外部の指導者の参加率は［教育］の方が高い傾向があり、地域との連携や継続している事業へのOB・OGの活用など関係の広さが伺われる。

なお、行政の事業に関する報告であるが、行政の担当者が指導者として関わっている人数が1.0をきっているのは、直接運営に関わらない関連団体の事業などを一緒に報告しているためだと考えられる。

表13. 中高生事業の指導者の種別と1事業あたりの平均人数

	学生	社会人	行政担当者
［福祉］	0.4	0.6	0.8
［教育］	0.4	0.6	0.9

外部団体との連携と活動頻度

4

1 外部団体との連携

外部団体との協力・連携についての回答は、事業全体の割合に対して67.9%が「協力関係がある」と答えている。協力団体の種別としては「地元の自治会・町会」、民生委員・子ども会などの「育成関係団体」である。行政が地域に対してのネットワークを持っていることも大きな要因だが、実施のために協同するケースと、講師などの専門的な協力をしてもらうケースがある。公的機関や公共施設との関係も報告があり、学校や大学、保育所や、行政の他の部局との連携や、更には上部自治体（区市町村における都道府県）との連携などもみられた。

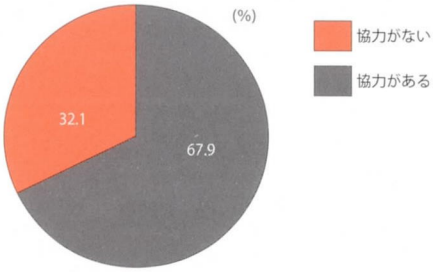


図 17. 外部団体との協力

他団体との協力の有無については、[教育]が[福祉]を若干上回っている。これは、[教育]は「ジュニアリーダー」「地域活動」などの活動が多く、地域との協力関係が高いことを伺わせる。

2 実施頻度は年に1回や不定期が多い

中高生事業の実施頻度については、「その他」の回答に含まれる、年に1度のイベントや学校の長期休みに集中して実施するリーダー・ボランティア講習会などの単発的な事業実施が多く、[福祉]では75%、[教育]45%を超えている。居場所づくり的な「毎日」「週に2～3回」は1割にも満たなく、児童館（P11図6参照）と比較して少ない傾向にあった。行政は、日常的な活動場所を持たないため、頻度の高い活動については定期的な場所の確保などの課題が見込まれる。[教育]では、公民館や社会教育施設との連携で実施している様子がアンケートの記述からうかがわれた。日常的な活動の内容としては、「居場所」「学習・講座・クラブ」「ジュニアリーダー・ボランティア活動」などの記載であった。

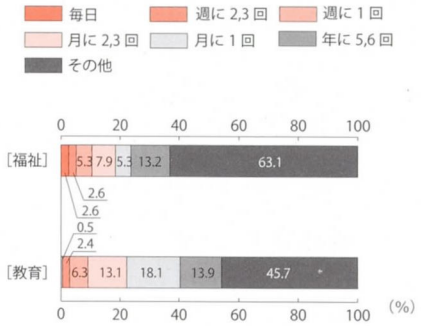


図 18. 中高生対象の事業の頻度

3 募集方法は学校とチラシ・ポスター

募集方法については、「学校との連携による周知」につづき、「チラシ・ポスター」などによる、地域への告知が多い。受け取る側の中高生メンバーの調査結果では「口コミ」が有効な手段であったが、行政から中高生に対して直接的にアピールすることは難しいようである。

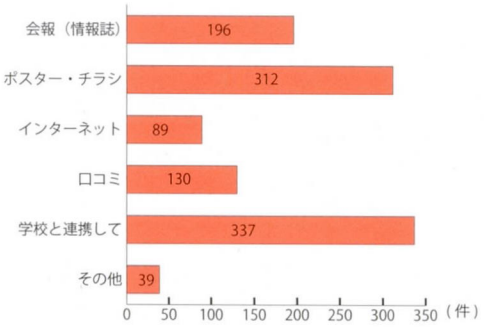


図 19. 募集方法（複数回答）

中高生対象事業への大人のかかわり

5

1 事業内容の決定

事業の内容を決めるにあたり、「中高生自身で」という率は10%程度であり、児童館とほぼ同様であった。しかし、「相談して決定」は、［福祉］で30%強、［教育］で40%強と、児童館よりは少ない傾向にあった。中高生の意見を取り入れているが、行政は、中高生と日常的な情報交換が難しいこと、講座のように、カリキュラムを組んで学習する形態の事業も多く、中高生が参加する余地のないものもあるため、このような結果になったと考えられる。

また、［福祉］と［教育］を比較すると、［福祉］の方が「大人が決定」の傾向が多い。

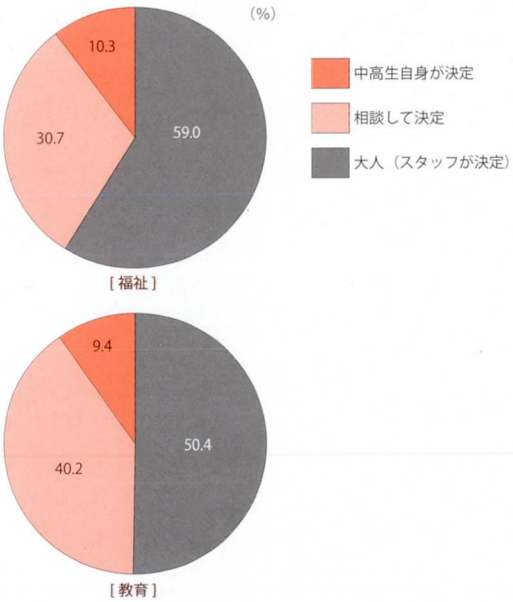


図 20. 中高生対象事業の内容の決定

2 大人のかかわり方

中高生事業に携わる大人のかかわり方として一番多いのは「指導・助言」である。次に多い「運営・管理」などを含めたキーワードから考えると、大人側が事業のイニシアティブを握っていると感じる。実施事業は多岐にわたるため、一概には言えないが「ジュニアリーダー・ボランティア」などの事業や「居場所」「地域活動」などへの関わり方として、「助言」「援助・サポート」を増やして、中高生の事業参画についてもっと積極的に取り組む必要があるのではないだろうか。

表 14. 大人の関わり方の要素（件）

1	指導・助言	160
2	運営・管理	52
3	援助・サポート	50
4	さまざまな調整	31
5	協同	8

3 地域交流を中心とした中高生事業の意義

行政が事業実施についてどんな意義を感じているか、という問いに対して多かった回答は「地域活動」「自己の成長」「ボランティア・ジュニアリーダーの育成」である。実際に行っている事業は、「ボランティア・ジュニアリーダー」「地域活動・社会体験」というキーワードが多くみられ、その体験を通して社会に貢献すると同時に、自分を成長させていく自己研鑽の場として活用されることに意義を感じている。また、「交流」「居場所」「仲間づくり」「文化伝承」「職業体験」「乳幼児ふれ合い」など、多様な意義を感じていることが伺われる。

表 15. 中高生事業を実施する意義（件）

1	地域交流・活性化	54
2	中高生の成長の場	49
3	ボランティア	25
4	異年齢交流	20
5	自己理解・他者理解	18

6 中高生事業への満足度と課題

1 事業の工夫と課題

事業への取り組みへの工夫と課題についての回答は別表のとおりである。工夫としては「内容」についての記述が多く、課題としては参加人数の確保に関する問題が多い。

全体的に見ると、「工夫」と「課題」についてのキーワードは共通するものが多く、「課題」をしっかりと把握して「工夫」をしているが、まだ十分に成果が出ていない様子が伺われる。

表 16. 中高生事業への工夫（件）

1	内容の工夫	75
2	主体性・自主性の重視	71
3	地域・学校などとの連携	23
4	事業内容の PR など	22
5	大人の関わり	19

表 17. 中高生事業の課題（件）

1	参加人数の確保	179
2	学校との連携	67
3	指導者の質の確保	37
4	内容（マンネリ化）	31
5	メンバーの質	21

2 事業への満足度と行政の意識

事業の満足度は、「とても満足」「やや満足」を合わせると 62.4%あり、児童館と比較して満足度が高い。これは、「ボランティア」「地域参加」「リーダー育成」など社会的意義のある活動が、事業の中心であり、やりがいを感じ、担当者も共感しているためだと考えられる。「アンケート・参加者の感想」「指導者から見た参加者の変容」「地域などからの評価」「中高生の成長の姿」「地域・社会に貢献している」などを満足度の理由の回答としてにあげている。

「不満」「やや不満」は 40% 弱で、その主な原因は「参加が少ない」「多忙」などで、半数近くを占める。

活動を活性化するためには、「活動の自主性」「地域・他人に認められる」など、中高生が達成感と自己肯定感が持てる活動に注目する必要があると考えられる。担当者の不安材料として「担当者の技量」を挙げる声もあり、中高生へ専門的に関わる準備性については重要な要素となることが伺われる。また、少数だが中高生活動について疑問視する声もあり、健全育成活動としての重要性を、更に訴えていかねばならないことを感じた。

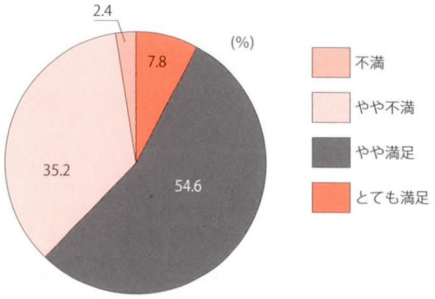


図 21. 活動に対する満足度

さまざまな人と出会える喜び

今回の調査の目的は児童館における中高生のボランティア活動の活性化である。そこで重要になってくるのは、中高生自身がより主体的に児童館事業に参画してくる姿勢であろうと考える。中高生の主体性を高めるために、私たち現場のスタッフは様々なアプローチを行う。しかし、思春期後期の多感な中高生の気持ちが読み取りにくいというのが、正直な感想だろう。このアンケートでは、できるだけ素直な中高生の声を聞くことによって、彼らが主体的に活動に取り組めるための要素を探りたい。

【中高生メンバーへのアンケート調査の概要】

この調査は地域・施設等で団体活動に参加している中高生を対象にしている。調査依頼をした団体は全国で中高生活動を実施している児童館と各種調査で把握した先駆的な取り組みをしている団体、首都圏のネットワークの中で承諾を得られた団体・施設へ調査をお願いした。

調査への参加結果の件数は全部で 53 団体（施設を含む）、合計 384 名の協力を得ることができた。地域的には首都圏を中心にしているが、続いて関西方面が多く、北から南までを網羅している。団体の主な活動目的としては、子ども会のジュニアリーダーや児童館、居場所グループ、施設を中心に活動するグループ、子どもに関する NPO など多岐にわたっている。中高生の活動は特にボランティア活動にこだわらず調査した。各中高生グループの活動目的としては子ども会などのリーダー活動、施設などでのボランティア活動、音楽などの同好の者が集まるクラブ活動、地域活動、居場所活動などがみられる。特に児童館などについては内容をジャンル分けすることが難しく、「興味・関心に基づく自らが楽しむ活動」と「他との関わりを持つボランティアなどの活動」が混在し、時に年下の子の面倒をみたりスタッフの手伝いをすることもあれば、自らの興味を楽しむこともあり、自然にどちらも楽しんでいる中間的な活動となっている現状がある。

1 活動と自身をつなぐのは「人間関係」

【活動のきっかけづくり】

彼らが活動を始めるきっかけで一番大きな要素は「友達の紹介」となっている。活動の始まる時から人間関係がきっかけになっている。児童館と行政関係のアンケートの結果で、事業の募集方法のトップは、ポスターや学校での呼びかけになっており、口コミは下位グループに属している。事業の責任者として、児童館のスタッフがポスターや機関紙で呼びかけをすることはとても大切なことだろう。しかし、中高生にとってより主体的な活動になるためには、彼ら自身も責任を持つことが大切なのではないだろうか。「この活動を成功させるために、みんなも友達を誘って？」と呼びかけることは、彼らの主体性を喚起することであり、同時に彼らのネットワークを活用した効果的な募集方法となるのではないだろうか。

【やっぱりグループワークの活用が大切】

「活動を通して何を得るか」という問いに対して、「友情」や「人間関係」を挙げているものが非常に多い。中高生の活動はまさに人と人とのつながりによって成り立っているといっても過言ではないだろう。彼らが区別しているように、「友情」という同じメンバー同士の関係、「人間関係」というプログラムを通して触れ合う、子どもや地域の大人たちとの関係、この２つの要素があることを考えたい。

まず中高生事業を立案のポイントとして「人との交流」をその要素に加えることが重要になっ

てくるだろう。赤ちゃん、小学生、地域の様々な年齢の人たちとの交流から生まれる暖かい関係が、中高生の活力ある活動を生み出すのだろう。同時にそれは、彼らの自己肯定感を醸成し、人生を豊かに生きる力ともなっていくだろう。

「友情」のキーワードは、メンバー同士との関係が中心になってくるのだろう。活動上の悩みを聞いたところ1番多い理由として「メンバーとの関係」が挙げられている。悩みがあるということは、それが上っ面の関係ではなく、深まりある人間関係に移行する出発点であると考えられる。このプロセスがあるからこそ彼らは、活動から得るものの一番に「友情」というキーワードを挙げているのだろう。そしてこのプロセスに意図的に関わり、メンバー同士の相互作用を活用しながら、より豊かな関係に昇華させていくことが、スタッフのグループワーカーとしての役割が重要になってくる。

2 活動のキーワードは「達成感」

アンケートで活動に充実感を持つ時はどんな時かという問いに対して、「目標を達成したとき」という回答が1番多かった。ここで考えなければいけないのは、その目標を「誰が、どうやって決めたか」ということだろう。当然自己決定のプロセスがあればあるほど、途中の困難な状況にも主体的に取り組めるだろうし、困難な状況を乗り越えるからこそ、目標を達成したときの喜びは大きい。活動内容は誰が決めているかという問いに対して、1番多かったのが「大人（スタッフ）が決めている」という回答だ。これでは、彼らが、本当の意味で全力を出し切ったと感じる活動が生まれないのではないか。スタッフが中高生と共に活動内容を決定するプロセスを設け、その中で彼らの意見とスタッフの活動目標を上手にリンクさせることが、中高生にとって自分の実力を出し切り、自己成長へとつながる活動になるのだと考える。

3 スタッフはいざという時の助け舟…

「スタッフにどんな関わり方をしてほしいか」で1番多かった要素が「困った時に助けてほしい」だった。中高生はやはり自分達の力で出来るだけ活動したいと考えていることがわかる。

しかし、2番目、3番目の要素が「親しみやすく接してほしい」、「いけないことは、いけないと言ってほしい」だった。中高生はスタッフに、何も言わずに見ていてほしいとは思っていないのだろう。プログラムを運営するチームのメンバーとして、共に悩み、意見を戦わし、喜びを共にしたいと考えているのだと思う。そして、時には年長者としてアドバイスもほしいし、自分達が安心してのびのびと活動するための精神的な支えになってほしいのだろう。

だからこそ、中高生に関わるスタッフには、彼らにとって本当に必要な援助を感じ取る、豊かな感性と鋭い観察力が必要になってくる。中高生と付き合うことは、私たち専門スタッフが持つ対人援助技術の質を直接問われていると考えなければいけない。

メンバーの構成と活動歴・頻度

1 小学生時代からの継続メンバーも

学年ごとの参加人数をみると、中2が最多である。また、受験期に当たる中3・高3の人数が少ない傾向にある。比較的、継続するメンバーが多いが、途中から加入する人数が、それほど多くないことが伺われる。年齢ではなく、学年で質問した場合、無回答が多くあるのは、高校へ通っていないメンバーがいることが考えられる。この年齢層へアプローチする時にはそうした配慮が必要である。

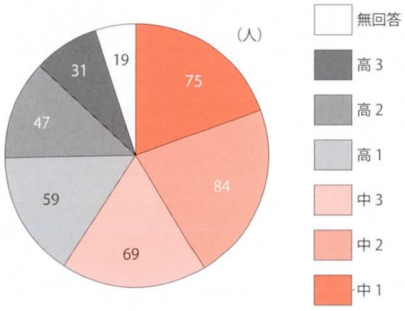


図 22. メンバーの学年分布

男女比については女子の活動人数が優勢であるが、これは地域の団体活動等に共通してみられる傾向である。男子はスポーツの部活動などで選択肢が多く、学校外の活動へ参加できる環境にある人数が限定される。

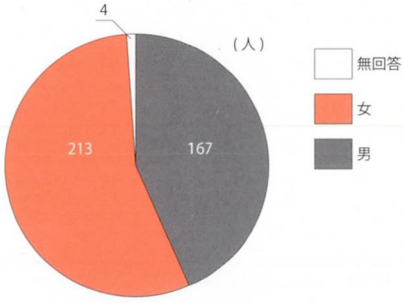


図 23. メンバーの男女比

メンバーの活動歴については1年が最も多い。中には、7年以上と、明らかに小学生の時期から継続しいるメンバーもいる。

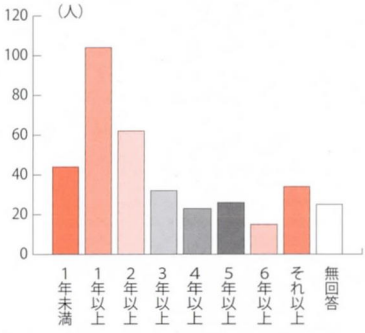


図 24. メンバーの活動歴

2 週末を中心に定期的に活動

参加している活動の頻度は図24のとおり。月に2～3回をピークに、幅広く分布している。活動日としては、学校外の活動のため、自由時間が長くとれる週末に活動が集中している。これは活動に参加するメンバーが比較的広域から参加していたり、それぞれの学校などの都合が異なり、時間を合わせることも、なかなか難しい様子がうかがわれる。

表 18. 活動している曜日

月曜日	30	土曜日	94
火曜日	27	日曜日	195
水曜日	42	不明	2
木曜日	37	不定期	11
金曜日	31	無回答	67

また、週に1～数回の活動している中高生が全体の約3分の1を占める。これについては実施する側の団体・施設に恒常的な占有できる場所があり、指導者が対応できる状況があり、中高生の生活範囲である地域の中で日常的な活動が展開できている様子が想像できる。

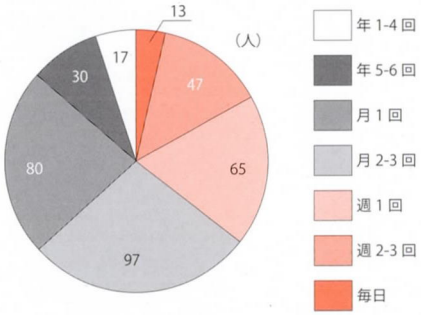


図 24. メンバーの活動頻度

活動を始めたきっかけ

2

1 きっかけは口コミ

メンバーが現在の活動を知り、始めるきっかけについての結果が表 19 である。知るきっかけとなったのは、圧倒的に他の人からの紹介が多い。更に、紹介者の内訳として最も多かったのは、友人などの身近な仲間からの誘いで、いわゆる「口コミ」である。仲間を重んじるこの世代においては、仲間とのつながりは最も重要な要素である。次いで、家族など周囲の大人からの紹介も多く、両親へ活動を理解してもらうことも大切である。同様に、中高生の身近な存在である学校に理解をしてもらい連携することや、普段から関係のある施設職員や団体スタッフとの関係も大切である。兄・姉の紹介については、兄・姉の活躍ぶりが、モデルとして弟・妹の憧れの対象になっていることが予想される。

表 19. 活動をどのように知ったか

1	誰かの紹介	288
2	ポスター	55
3	会報誌	37
4	インターネット	4
5	無回答	21

表 20. 誰からの紹介で活動を知ったか

友だち	97	先輩	14
学校	36	兄・姉	13
職員	35	児童館	9
子ども会	26	ボランティア	8
両親	15	自分から	4

2 活動に参加するきっかけはさまざま

参加への動機については、アンケートでは調査項目を設定し複数回答できるようにし、メンバーの率直な気持ちが表現できるように配慮した。その中で、注目すべき点は、半数を超える回答は自分の興味・関心からスタートしていることである。また、仲間を求める声や子どもや他の人との出会いなど、人とのかかわりを求める声もも多い。一方で、「なんとなく」「ひまだから」などの無気力とも取れる曖昧な動機も回答には含まれていた。そんなに肩ひじを張らず気軽に始めようとしている様子なのだろうか。しかし、始めた動機はどうあれ、実際に現時点で活動を継続しているということは、活動に興味を持ち、深めているはずである。家族・友人など周囲にいる人からの情報提供やインターネットなどこれから増えてくるであろうメディアを含めて、中高生が活動の情報にふれる機会を増やし、活動を始めるきっかけをつくることが大切である。

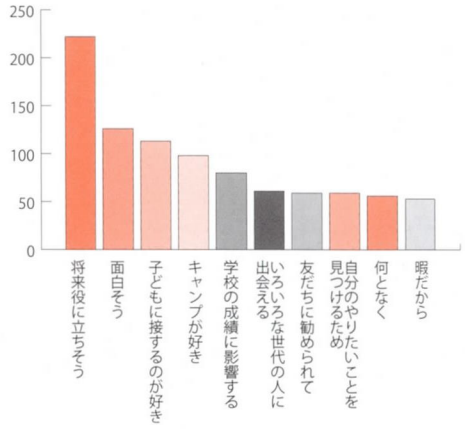


図 25. 活動への参加動機

3 活動内容へのスタッフの関与と中高生のもつスタッフ像

1 大人（スタッフ）の関わり方の現状

中高生の活動に対しては90%の大人が関わっている。関わり方を具体的に記述してもらったところ、「手伝い」「影でフォロー」「助けてくれる」等、サポート的な要素が最も多かった。次いで、「私たちを指導してくれる」「指示してくれる」「ボランティアの仕方を教えてくれる」等、指導的な要素が多かった。中高生の自発性を尊重しながらも、指導的な立場にある大人（スタッフ）の関わり方の現状が伺える。

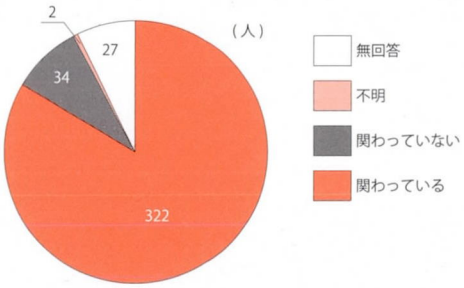


図 26. 活動への大人（スタッフ）の関与

表 21. 大人（スタッフ）の関わり方

1	サポート	51
2	指導	48
3	アドバイス	35
4	協同	20
5	調整	13

2 活動内容の決定には大人（スタッフ）が関与

中高生の活動内容は、大人の決定が約40%、次に中高生と大人の決定が約30%、最後に中高生自身の決定が約25%という結果になった。自発的な活動の出発点でもある、活動決定までのプロセスさえも、大人の手に委ねられているケースが多い。

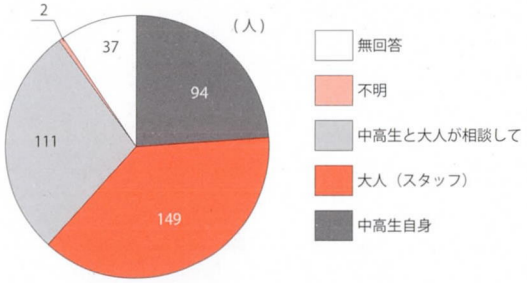


図 27. 活動内容の決定

3 困ったときに助けて欲しい

「あなたは大人（スタッフ）にどんな関わり方をして欲しいですか？」という問いに、20個の選択肢と、その他の項目を設け、複数回答で答えてもらった。最も多かった回答は「困った時に助けて欲しい」で、「親しみやすく接して欲しい」、「いけないことはいけないと言って欲しい」と続く。逆にポイントの低い項目を見ると、「甘えさせて欲しい」、「いつも一緒にいて欲しい」などである。この結果から、中高生自身が、自分の主体性を尊重して、適切な距離感を持って大人に接して欲しいと考えている様子が伺える。適切な距離感には、頼もしさと親和性、共同的関係が含まれているのではないか。「困った時に助けてほしい」は「困るまで、大人はできるだけ口出ししないでほしい」と希望する中高生が多いと読み取れる。そして、「いけないことはいけないと言って欲しい」と多くの中高生が希望している。中高生に接する大人の姿勢のあり方を考えさせられる。また、その他の自由記述の回答では、「今のままでいい」が最も多く、8人が回答していた。良好な大人との関係に十分満足している中高生も多いのだろう。

表 22. 中高生が希望する大人の関わり（複数回答）（上位3項目と下位3項目／単位は人）

1	困ったときに助けて欲しい	177
2	親しみやすく接して欲しい	125
3	いけないことはいけないと言って欲しい	112
	（途中省略）	
18	怒って欲しい	13
19	いつも一緒にいて欲しい	11
20	甘えさせて欲しい	7

メンバー同士の関係性とコミュニケーションツール

4

1 活動の話を中心に時にはプライベートも

「メンバー同士どのくらい話をするか」という問いには、約75%の中高生が「よく話をする」と答えている。

話の内容については、「話の内容はどんなことが多いですか？」という問いを設け、自由記述にした。「行事の内容など」「今後の企画について」「自分たちの役割の確認」「小さい子どもたちとのふれあいについて」など、活動に関連したが最も多く、次いで「普通のたわいない雑談」「日ごろ思ったこといろいろ」「本や芸人など流行の話」「音楽、テレビいろいろ」など、雑談・世間話、次に「自分の学校のこと」「部活のこと」「学校の成績のこと」「先生の話」など学校の話となっている。この結果から、今回アンケートに答えた中高生達の活動に対する非常に意欲的な姿勢が伺える。そして、この意欲的な活動を支える大きな基盤が、中高生同士のコミュニケーションであることも理解できる。128件と他の項目と大きく差をつけた「活動」についての話題が、彼らの相互援助作用を促進し、より主体的で活発な活動を生み出していくのだろう。同時に、中高生の関係が「活動」という公的空間を共有する関係から、「世間話」「学校」「遊び」「プライベート」という、より私的な空間を共有する関係に変化していくプロセスも伺える。

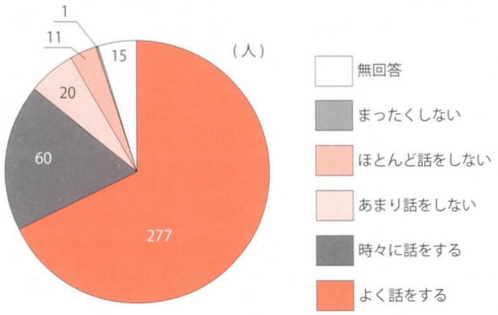


図 28. メンバー同士の話の頻度

表 23. メンバーとの話の内容

1	活動	128
2	雑談・世間話	67
3	学校	51
4	遊び	32
5	プライベート	24

2 直接話すほかにメールも活用

「あなたが活動を行う上で、メンバー同士、どんな方法で話をしていますか？」という問いに、「活動中に直接」、「活動外で直接」、「電話」、「メール」、「インターネット」、「ブログ」、「その他（自由記述）」という選択肢を設け、一番多い方法から順位をつけてもらった。最も多くつけられたのが、「活動中に直接」で、次いで「活動外で直接」、「メール」の順番になっている。「直接の会話」について、「メール」が多いのは、もちろん現代っ子のコミュニケーションツールとして大きな位置をしめているだけでなく、活動する中高生が地域、学校を超えた広範囲から集まっているために、活動以外の場所で直接会話をすることが難しいからという理由によるのかもしれない。

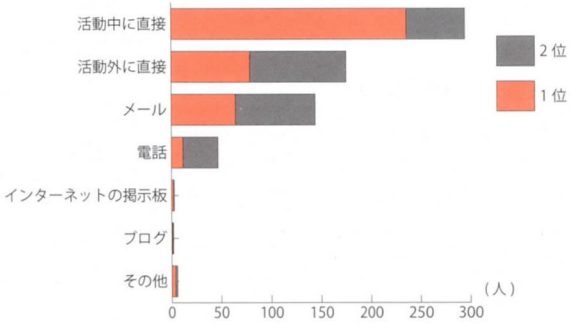


図 29. メンバー同士の会話の方法

5 活動に対する肯定的感情について

1 活動にはほとんどが満足感を持っている

活動に対しては、「満足」「やや満足」をあわせると９割を超える。理由としては、「楽しいから」が一番多く、「子どもや友達と触れ合えるから」「子どもが楽しそうだから」「普段出来ないことができるから」が次に続いている。「やや不満」、「不満」と回答した理由としては、「もっと発表の場がほしい」「あまりやることがない」などが多く、意欲を持っていてもそれを活かせる場面がないことに対する不満が多い。

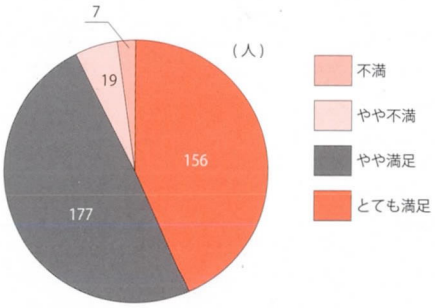


図 30. 活動に対する満足度

2 人との交流や自己の成長が魅力

「あなたが、活動に魅力を感じる理由はなんですか？」という問いに自由記述で答えてもらった。「人との接し方が学べた」「技術が身につく」など「自己成長」という理由が最も多く、次に「子どもと遊べるから」など「子どもとの触れ合い」を挙げている。そして「いろいろな人との交流」「友達」が並んでいる。「子ども、大人、同世代の友人」との相互関係を通して、中高生自身が自分の成長を実感し、それが活動に主体的に取り組む要因になっていることが理解できる。

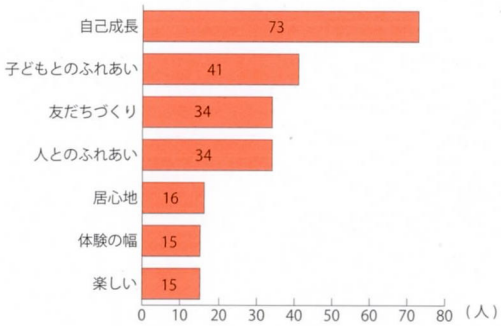


図 31. 活動の魅力

3 人との関係の中で自己肯定感を育む

「あなたが活動していて、充実感を持つのはどんな時ですか」という問いに自由記述で答えてもらった。「演奏し終わった時」「目標を達成した時」「やることをやりきった時」など、さまざまなプログラムの目標を達成した時が一番多かった。次いで「赤ちゃんとお母さんが楽しんでいるとき」「子どもの笑顔が見られたとき」「子どもが自分たちの企画を通して、楽しんだとき」「子どもと一緒に自分自身も楽しめたとき」など、子どもとの関係で充実感を持つ時が多かった。活動の魅力からも読み取れるように、人との関係の中から、自分自身を肯定する感情が芽生え、それが活動に取り組む精神的な基盤を形成しているのだろう。

また、「あなたが、活動を通して得たものはなんですか？」という問いに、自由記述で答えてもらった。「友情の大切さ」「大切な仲間」「友達との友情関係」など、「友情」というカテゴリーで括れる要素が一番多かった。次いで「人とのかかわり方」「コミュニケーション能力」「人とかかわる大切さ」など、「人間関係」をカテゴリーとする要素が多い。広い意味ではともに、「他者との相互関係」と考えられ、様々な人たちとの触れ合いから生まれる相互関係が、中高生にとって一番大きな収穫であると考えられる。

表 24. 充実感を得るとき、活動で得たもの

充実感を得るとき	
プログラム	124
子どもとの交流	63
メンバーとの交流	26
人との交流	14
スタッフとの交流	9

活動で得たもの	
友情	66
人間関係	37
技術	28
子どもとの交流	21
心の成長	18

6 活動に対する悩みや要望

ここでは、中高生が活動に対して抱いている悩みや要望を分析し、活動活性化の要素を探った。そこで、「悩み」「要望」「今後やってみたい活動」の有無と、それぞれに理由を自由記述で書いてもらった。有無については、90%近いメンバーが答えているものの、理由について記入は20%弱にとどまった。

1 悩みは メンバーとの関係づくり

「悩んでいること、困っていること」については、「ある」と答えたものが約20%だった。理由としては「みんなが無断でサボる」「新しいメンバーとの関係がうまくいかない」「考え方の違い」など、メンバー同士の関係が原因になっているのものが一番多く、次いで「子どもたちとうまく話せない」「子どもが言うことを聞いてくれない」など、子どもとの関わりが原因になっている。また、「メンバーの人数が少ない」「時間がない」などもあげられていた。

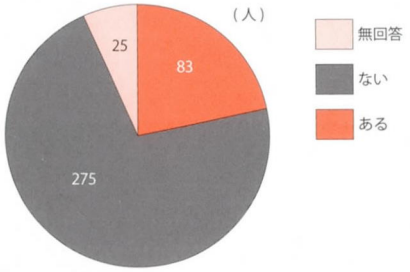


図 32. 困ったことや悩みの有無

2 施設への希望は 活動の充実が一番

「施設や団体、大人に対して要望や希望」に対して、「ある」との回答は10%強だった。具体的な要望として、「もっと多く活動がしたい」「もっと行事を増やしてほしい」「発表する場がほしい」など、活動の場所、機会を求めているケースが最も多かった。次いで「用具を新品にしてほしい」「もっと場所を広くしてほしい」など施設、設備に対する要望が続いた。「大人の指示統一」「自主性を尊重するべきだと思う。はっきりと叱るべきだ」「もっと自由にやらせて」など、大人に対する要望も多かった。

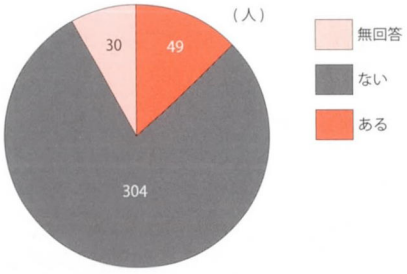


図 33. 施設や団体・大人への要望の有無

3 普段の活動の充実

「今後やってみたい活動はありますか？」という問いに対して、「ある」との答えが約30%だった。「ある」の具体的な内容としては、「おばけやしき」「コンサート」「お年寄りや子どもとの触れ合い」「スポーツ」「野外活動」「ボランティア」など、普段の活動領域とさほど大きな違いのない答えがほとんどだった。

「悩み」「要望」「今後やってみたい活動」では、多くのメンバーが「ない」と答えている。これは、今回このアンケートに答えたメンバーの、それぞれの活動に対する満足度が高いと考えられる。しかし、活動の自発性が高まれば高まるほど、その運営に心を砕くメンバーが多くなり、悩みや要望が増えるはずである。そう考えると、中高生にとって現在の活動が受け身の姿勢になっているとも考えられる。あまり多くの回答は得られなかったが、「要望」が普段の活動内容とあまり違いがないことも、この現状を表しているかもしれない。

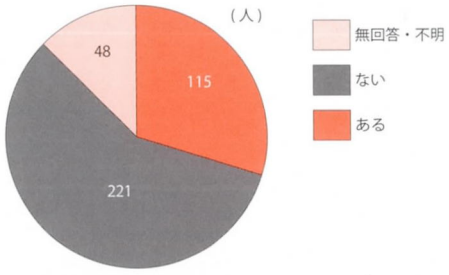


図 34. 今後やってみたい活動の有無

児童館へのアンケート質問項目

【ご注意】
◎高校生の場合、高校生年代（概ね 16 歳～ 18 歳）としてお考え下さい。
◎選択肢がある場合は、丸で囲んでください。
◎調査の対象とする中高生の活動事例の中には、学校からの依頼で受け入れる職業（職場）体験、ボランティア体験等は含まないでください。
◎ご記入後、別紙アンケートとともに同封の返信封筒にて、12 月 20 日までにご返送ください。

1 基本的情報 施設の規模・運営など

施設名称
所在地
設置者　1. 公設公営　2. 公設民営　3. 民設民営
　　4. その他（　　）
施設形態　1. 小型児童館　2. 児童センター
　　3. 大型児童館（A・B）4. その他（　　）
施設併設の有無　単独設置館・複合施設（　　）
職員数　スタッフ合計・専任
施設開館年月
来館者の内訳　平日平均／土日祝平均
乳幼児と保護者、小学生、中学生、高校生、大人等の大まかな割合

2 中高生の受入状況

中高生の受け入れ状況についてお聞きします。
Q1：あなたの施設（団体）では、中高生を受け入れていますか
　受け入れている　・　受け入れていない
Q2：その理由をお書きください
　[　　]
Q3: どのような受け入れ形態ですか？
　1）貸し出し施設の利用のみ
　2）施設（団体）側が実施する事業として
　3）その両方

注：これ以降は、直接運営している事業についてお聞きします。該当しない場合は、この時点で終了してご返送ください。ありがとうございました。

3 中高生の事業内容

記入者：役割・職種など（　　）
Q1：あなたの部署が直接担当している事業についてお聞きします。
事業の名称と内容
　名称
　内容
地域団体等との協力
　無　・　有　[　　]
指導者・育成者人数と内訳
　学生［　］人　・　社会人［　］人　・
　行政職員［　］人
中高生の人数と内訳（平成 18 年度概数）
　活動人数［　］人　＊年間延べ人数
　中学生［　］人
　（内訳　男［　］人、女［　］人）
　高校生［　］人
　（内訳　男［　］人、女［　］人）
募集形態
　1）施設（団体）の呼びかけによって
　2）中高生の要望によって
　3）その両方
募集頻度
　1）常時　2）定期的　3）不定期
　4）その他（　　）

募集方法（複数回答可）
　1）会報紙（広報誌）　2）ポスター・チラシ
　3）インターネット　4）口コミ
　5）学校と連携して　6）その他（　　）

活動の実施頻度
1）毎日　2）週２～３回　3）週１回
4）月２～３回　5）月１回　6）年５～６回
7）それ以外（　　）
内容の決定形態
1）中高生自身が決定
2）大人（スタッフ）が決定
3）中高生と大人（スタッフ）が相談して
大人の関わり
1）関わっている　2）関わっていない
関わっている場合の大人の立場
［　　］
大人の関わり方
［　　］
運営上の工夫
［　　］
運営上の悩み
1）ある　2）ない
その理由
［　　］
悩みの内容
［　　］
オリエンテーションや研修について
1）ある　2）ない
実施している場合の内容
［　　］
注：事業内容については３枚送付して、事業が複数ある場合は複数回答してもらった。

4 事業への満足度

注：これ以降は、各事業を包括してお答えください。

中高生活動に関するスタッフ（大人）、施設（団体）側の考えについてお聞きします。

Q1：あなたの施設（団体）で、中高生活動を始めた理由、目的はなんですか？
［　　］
Q2：あなたの施設（団体）で、中高生が活動することに対して、どんな意義を感じますか？
［　　］
Q3：あなたは中高生の活動内容にどのくらい満足していますか？
1）とても満足している
2）満足している
3）やや不満である
4）不満である
その理由は
［　　］
Q4：今後の活動への期待や方針をお書きください？
［　　］

ありがとうございました。

自治体へのアンケート質問項目

【ご注意】
◎高校生の場合、高校生年代（概ね 16 歳～ 18 歳）としてお考え下さい。
◎選択肢がある場合は、丸で囲んでください。
◎調査の対象とする中高生の活動事例の中には、学校からの依頼で受け入れる職業（職場）体験、ボランティア体験等は含まないでください。
◎ご記入後、別紙アンケートとともに同封の返信封筒にて、12 月 20 日までにご返送ください

1 基本的情報 施設の規模・運営など

主管課名称
所在地

2 中高生の受入状況

中高生の事業実施状況についてお聞きします。

Q1：あなたの部署が担当している、中高生を対象にした施設はありますか。
ある・ない

Q2：ある場合は内容をお書きください。

施設名	概要

Q3: あなたの部署が直接している、中高生を対象にした事業はありますか。
ある・ない

Q4: ある場合は内容をお書きください。

事業名	概要

注：これ以降は、直接運営している事業についてお聞きします。該当しない場合は、この時点で終了してご返送ください。ありがとうございました。

以下、児童館アンケートの「中高生の事業内容」以降と同様。

中高生へのアンケート質問項目

◎このアンケートで答えて頂く『活動』は、授業や部活動の一環として学校で行う活動は含みません。
◎答えたくないところは、空白のままにしてください。
◎選択肢がある場合は、丸で囲んでください

あなたの年齢（学年）、性別を教えてください
年齢［　］才（中・高［　］年生）　男・女

1 活動内容や参加動機

あなたが現在行っている活動についてお聞きします。

Q1：あなたが現在行っている活動の内容を教えてください。
［　　］

Q2：活動を始めて何年になりますか？
［　年］

Q3：どのくらいのペースで活動していますか？
1）毎日　2）週2～3回　3）週1回
4）月2～3回　5）月1回　6）年5～6回
7）それ以外（　　）

Q4：主に活動する曜日と時間帯を教えてください
［曜日：　　］［時間帯：　　］

Q5：活動の事は、どのように知りましたか？
1）会報紙（広報誌）　2）ポスター・チラシ
3）インターネット
4）紹介［誰から？　　］
5）その他［　　］

Q6：あなたが、この活動を始めた動機を教えてください（複数回答可）
1）子どもに接するのが好きだから
2）キャンプ活動が好きだから
3）友達を作りたかったから
4）将来役にたちそうだから
5）学校の成績に影響するから
6）家族に勧められて　7）友達に勧められて
8）学校の先生に勧められて
9）施設（団体）のスタッフに勧められて
10）新聞やテレビ、ホームページを見て
11）自分の技術や能力、経験を活かしたいから
12）自分のやりたいことを見つけるため
13）いろんな世代の人に出会えるから
14）社会のために役立ちたかった
15）なんとなく　16）暇だから
17）面白そうだから
18）それ以外［　　］

2 大人（スタッフ）との関係

あなたと大人（スタッフ）の人達との関係についてお聞きします。

Q1：あなたが行っている活動内容は誰が決めていますか？
1）中高生自身　2）大人（スタッフ）
3）中高生と大人が相談して

Q2：あなたが行っている活動に大人（スタッフ）は関わっていますか？
1）関わっている　2）関わっていない

Q3：どんな関わり方をしていますか？
［　　］

Q4：あなたは大人（スタッフ）にどんな関わり方をしてほしいですか？（複数回答可）
1）あまえさせてほしい
2）ほめてほしい
3）大人と対等にあつかってほしい
4）いろいろ指示してほしい
5）一緒に考えてほしい
6）自由にやらせてほしい
7）困った時に助けてほしい
8）友達みたいにつきあってほしい
9）真剣に向き合ってほしい

10）勝手にやらせてほしい
11）親しみやすく接してほしい
12）もっと話を聞いてほしい
13）見守ってほしい
14）やさしくしてほしい
15）いつも一緒にいてほしい
16）怒ってほしい
17）相談にのってほしい
18）お金を出してほしい
19）公平にあつかってほしい
20）いけないことは「いけない」と言ってほしい
21）その他［　　］

3 メンバー相互の関係

あなたと一緒に活動しているメンバーとの関係についてお聞きします。

Q1：あなたが活動を行う上で、メンバー同士でどのくらい話をしていますか？
1）よく話をする　2）時々話をする
3）あまり話をしない　4）ほとんど話をしない

Q3：あなたが活動を行う上で、メンバー同士、どんな方法で話をしていますか？1番多い方法から順位をつけてください。
［　］活動中に直接
［　］活動外で直接
［　］電話
［　］メール
［　］インターネットの掲示板
［　］ブログ
［　］その他［　　］

Q3：話の内容はどんな事が多いですか？
［　　］

4 活動に対する満足度や要望

活動について、あなたの考えをお聞きします

Q1：あなたは、活動にどの程度満足していますか？
1）とても満足している
2）満足している
3）やや不満である
4）不満である
［理由　　］

Q2：あなたが、活動に魅力を感じる理由はなんですか？
［理由　　］

：あなたが活動をしていて、充実感を持つのはどんなの時ですか？

：あなたが、活動を通して得たものはなんですか？

：あなたが活動に対して、悩んでいること、困っていることはありますか？
ある・ない
ある場合は内容をお書きください
［　　］

：あなたが活動を行う上で、施設や団体、または大人に対して要望や希望はありますか？
ある・ない
ある場合は内容をお書きください
［　　］

：今後やってみたい活動はありますか？
ある・ない
ある場合は内容をお書きください
［　　］

自己コントロールされた、自分自身の活用が大切

中高生世代と一緒にプログラムを企画する時、常に考えるのは「どこまで口を出してよいのだろう」ということです。よく「中高生の自主性が大切ですから、このプログラムには大人は一切口を出しません」という関わり方を聞きますが、これには疑問を感じてしまいます。中高生メンバーへのアンケート調査でも表しましたが、彼等が大人に望んでいる関わりかたは「対等につきあってほしい」でした。「対等」であるということは、私たちが彼等1人1人の個性や価値観、ニーズを尊重し、それを最大限プログラムに生かすという理念に基づきながら、「感じた事を率直に伝える」ことであり、よりよいプログラムにするために「遠慮しないで、意見交換する」ということだと考えます。このように、中高生に関わるスタッフが、可能な限りありのままの自分として接する事が出来れば、彼等はそこにスタッフの真実の姿を見る事ができ、その時初めて、スタッフと中高生の見せ掛けでない信頼関係を築くことができると考えます。そして中高生は、この信頼関係を通じて、それを支えにしながら、様々な問題解決にあたることも忘れてはいけません。

もう一つ考えなければいけないのは、「対等」「真実の姿」といっても、それは専門職として、暖かく、人間的であり、しかも訓練された方法で自己活用するということだということです。スタッフが中高生達の出した意見に対し、論理的に反対する、もしくはより合理的な方法を提案すれば、中高生はおそらく賛成するしかないはずです。スタッフは、中高生の力やニーズをいかに引き出すかに、最大の配慮をする必要があるでしょう。対等な関係とはいっても、大人の役割と中高生の役割には違いがあることを認識することが大切です。

また中高生とのプログラム立案に臨むとき、スタッフは、彼らにとってそれが、適切なプログラムであるかどうかを判断する必要があります。提案されたプログラムが「できるだけ多くのメンバーに共通したニーズであるかどうか」、「個々のメンバーやグループの課題を解決する糸口に結びついていくかどうか」「メンバーの能力にあっているかどうか」「そのグループが掲げた目標にあっているかどうか」を判断し、それに適合しない場合は、中高生達に理解できるよう、プログラムの変更を提案する必要があります。この時重要になるのが、前述した「スタッフとメンバーの信頼関係」であり、もう1つは、中高生達がその提案を聞いて、より意欲的になるような、アイディアをスタッフが創造できるかどうかということです。中高生に向き合う大人には、自己コントロールされた「子ども心」と「社会の規範から逃れた自由性」が重要になってくるのです。

PROFILE

佐野　真一
(*Shinichi Sano*)

こどもの城企画研修部次長。1960年、大阪に生まれ、小学校時代は兵庫県伊丹市の、田んぼの真ん中で、虫、カエル、小魚、ドジョウを追っかけて過ごす。学生時代より、地域子ども会のボランティア活動にのめりこむ。卒業後、杉並区立の児童館の非常勤職員を1年勤めた後、こどもの城に就職。こどもの城［こども活動エリア］の事業企画調整、ボランティアのコーディネーター、高校生ボランティアの育成、キャンプ事業の運営、全国の児童館職員の研修事業が主な業務。

提言 8

中高生世代へのアプローチの基盤を考える

中高生世代は子どもから大人へと、心と体が大きく変化していく時期。まるで、渓谷を流れる川のように、渦を巻きながら激しく流れ、刻々と移り変わっていきます。中高生世代と付き合う時、いつも私はこの川の流れの中に、立っている気分になります。彼らは私に激しくぶつかってくることもあれば、遠くを流れながら、近づいてこないこともあります。彼らと付き合いながら、「ここでじっと踏ん張っていていいのか」「あっちに近づいていったほうがいいのか」「それともこのまま一緒に流されたほうがいいのか」と常に悩んでいます。おそらく中高生世代の事業に関わる大人達が持っている共通の悩みではないでしょうか。このページは、私の日頃の経験と、運営委員会で意見交換された内容から、児童館や行政のスタッフが、自発的な中高生の活動を支える様々なアプローチの基盤を考えていきたいと思います。

人としての誠実さと、正直さが必要

今回聞き取り調査にお邪魔した児童センターの女性スタッフの方がこんな話をしていました。「最初はこの世代と付き合うことにとても抵抗があったんです。何を考えているかわからないし、行動も荒っぽいから、正直恐いと思っていました」。これが多くのスタッフの本音だと思います。私がある高校生達（かなり荒くれ高校生達でした）とワークショップをした時、「信用できる大人はどんな大人か？」と言う話題になりました。彼らが共通して言った言葉は「マジで向き合ってくれる」「本気でつきあってくれる」でした。彼らが求めているのは大人としての分別や、配慮ではなく、「人としての誠実さ、正直さ」であることがよくわかります。

スタッフが中高生世代のメンバーと向き合う時、そのメンバーが様々な課題を抱えていればいるほど、「なんとかしなければ！」という職業意識だけが先行し、そのメンバーの本当の姿が見えなくなってしまうことがあります。しかし彼らが求めているのは、彼らが抱えている課題に対しての「大人の分別ある答え」や「うわべだけの励まし」ではなく、彼らに対して、人間として誠実さと正直さを忘れずに付き合う大人の姿勢であると考えます。前述したスタッフがこの続きに「でも、一度彼らをつかまえて、じっくり話したことがあるんです。そしたら、一般の高校生よりずっと深く、自分の人生や家族について考えている。すごいなぁと感心したんです」と話していました。私はこのスタッフが、彼らに1歩踏み込んでいったことも感心しましたが、彼らのことを「すごいなぁ」と思う、その姿勢に心を打たれました。児童館スタッフはソーシャルワークの専門職として、人間の尊厳性を認め、個々人の価値観を重要視する立場をとることが大切だといわれています。中高生世代と向き合うことは、スタッフが専門職として資質を試されていると考えてもよいでしょう。

もう一つ考えなければいけないのは、特に児童館の場合は限られた人員の中で、こうした個別対応をするには限界があるということです。そのためには地域の人材にサポートをしてもらうことも大切です。地域の良き理解者が2～3人でもいると、受け入れの幅が大きく広がるのではないでしょうか。同時にそれは、児童館が地域に開かれていくことになり、中高生達が、居場所である児童館から、地域へ踏み出していくきっかけにもなるのだと考えます。

づくりやプログラム開発と重なり合うかたちですすめられたときに意味のあるものとなる。

職員は、同僚や地域住民と協力すること

利用者の多くが小学生だった児童館へ、まるで天井から降りてくるようなかたちで、中高生対応が求められるようになった。これに戸惑う職員も少なくないだろう。

無理をしても仕方がない。まず自分の経験や能力の限界を知るということが必要だ。中高生の相手をするのが苦手な人は、そういう自分の限界を率直に認めて、そのうえで自分にできることを考えればよいのだと思う。どうしても相手ができないという人は、それが得意な同僚を助ける役割を引き受ければよい。そのうちに慣れる。

もう一つ、地域住民の理解を求めて協力を仰ぐことも必要だ。

中高生を受け入れるのは、なかなかスリリングなことだ。その年頃にトラブルはつきものだから、大人が思ってもみないことが起こる。公共施設の職員としての限界に直面することもあるだろう。これは職員の能力の有無とは別のレベルの問題だ。そういうときに職員を助けてくれるのは、中高生のことを理解する住民なのだ。

中高生を児童館に受け入れるには、地域住民との関係を風通しのよいものにしておくほうがよい。そうでないと、中高生に無理解な住民の声や、それを気にする役所の意向によって、児童館の運営が難しくなることもある。それをおそれて、中高生の利用者を選別して、大人からみて〝聞き分けの良い〟者だけを相手にするというやり方もあるだろうが、それでは、お役所仕事になってしまって面白くないではないか。

わたしは、児童館と地域社会との連携を、こうあるべきだという理念として主張するのではない。職員の手に余るような問題が生じた場合、地域住民の理解と協力があれば上手く乗り越えることができるということをいいたいのだ。これまで児童館は役所の動向をみていれば何とかなったのかもしれないが、中高生を受け入れるとなると、地域住民の理解と協力が必要になると思うのである。

「問題が起きたら宝」ということばもある。職員が頭を抱えるようなトラブルも、それがきっかけとなって中高生とのつきあいが深まることも珍しくない。そればかりか、これまで以上に魅力的な児童館へと変わる絶好のチャンスと捉えることもできる。中高生のボランティア活動の活性化は、そういう変化する児童館において実現するものなのだ。

PROFILE

久田　邦明

(*Kuniaki Hisada*)

神奈川大学講師。大学では社会教育関連科目の講義を担当。最近、学生のレポートのなかに「今の若者は期待されていないと思う」という一節を読んで、ちょっとショックを受けた。たしかに思い当たるふしがある。この問いかけに、どう答えられるのかを考えている。東京都放課後子ども教室事業推進委員会委員、横浜市思春期問題連絡会委員。編著書に『子どもと若者の居場所』(萌文社)。

提言 7

中高生を児童館に受け入れるために

中高生（世代）は子どもではない

自分が中学生になったとき、「もう子どもではない」と思った。そのことを、なぜかはっきりとおぼえている。

また、これは大人になってからのことだが、高校の先生が自分の生徒のことを「うちの学校の子どもたちは―」と語るのを聞くと、その度に、おかしなことをいうなあと思った。高校生を子どもだと思ったことがなかったからだ。

いろいろなところでこういう話も聞いている。日ごろ周囲の大人を手こずらせるやんちゃな中学生たちに、地域の祭りや防災活動への協力を求めたところ予想外のはたらきをみせて地域の人々が感心したという話だ。元気な中学生たちの姿が目に浮かぶような気がする。彼らは子ども扱いされなかったことが嬉しかったのだ。

中高生が子ども扱いされるのを見過ごすことはできない。これが、わたしの問題関心だ。このことをまず最初に、いっておきたい。

誤解のないように付け加えると、わたしは、子どもを子ども扱いするなというのではない。それどころか、子どもを子ども扱いするのは、とても大切なことだと思っている。そういう条件がなければ、子どもは安心して育つことができないからだ。子どもを子ども扱いするには、大人は大人の役割を引き受けなければならないだろう。ところが、それができなくて、その場しのぎに世話を焼くだけの大人が多いのではないだろうか。子ども扱いしてもらえない子どもに同情する気持ちになる。

さて、そこで話しは飛躍するのだが、「中高生は子どもではない」という前提のもとで、話しをすすめることにする。

中高生を子ども扱いしないこと

児童館は小学生の利用が多い。そのせいで、中高生も小学生と同じように子ども扱いをしてしまうおそれがある。それを避けるためには、中高生を小学生とは区別して、子ども扱いしないという方針を、まず立てる必要がある。

そのうえで、一つには、中高生が児童館の運営にかかわる仕組みをつくることだ。たとえば、中高生の委員会を組織するとか、彼らの事業計画の提案を受け入れるとかいった方法が、すでにおこなわれている。これを実現させるには、中高生の声に根気よく耳を傾けなければならないだろう。彼らの相手をするのは、時間はかかるし、エネルギーもいる。なかなか面倒なことではあるけれども、そういうことをしなければ、中高生は児童館へ寄り付きもしないだろう。とすれば、やるしかない。

もう一つは、彼らが一人前になるために役立つ活動プログラムを用意することだ。行政のことばを借りれば「社会的自立支援」とか「キャリア教育」とかいわれるものだ。乳幼児の面倒を見ることや、事業の運営を任せることも、このなかに含まれるだろう。また、職業体験のような就労支援のプログラムもここに含まれる。就労支援というと大袈裟に受け取られるかもしれないが、児童館の職員はこれまでも中高生の進路相談を引き受けてきた。福祉や教育の分野の就職を志望する中高生に、細かな助言をしたおぼえのある人は少なくないだろう。それを思い起こして工夫をすることが糸口になるにちがいない。

ボランティア活動の活性化は、このような仕組み

に言われて…」「人と話すのが上手になりたい」「子どもが好きだから」「友達を作りたい」「お手伝いをしたい」「自分たちで何かをしたい」等、様々な思いを胸にボランティアへ参加しています。また、ボランティアの中には、ボランティア＝居場所として利用したり、障害のある子どもたちも実際にボランティアに入り、積極的に活動しております。

このように、児童館をはじめて利用する子どもや時々利用する子ども、毎日利用する子どもと様々な思いを胸に児童館を利用しています。そんな時に、子どもの置かれた状況をいち早く察知できるのが児童館なのではないでしょうか。いつもと「話し方が違う」「しぐさが違う」「接し方が違う」等、子どもの変化に気付き、しっかりと子どもと接したり話したりすることで、子どもたちの本当の「居場所」が出来るのではないかと思います。

現在も子どもたちと関わるときは、しっかりとコミュニケーションをとり、子どもたち自身から「これがやりたい」という意見が出るよう心がけ接しています。子どもから意見が出たときは、まず色々やってみて、その後に子どもたちとしっかりと振り返りを行い、良かったこと、悪かったことなどをしっかりと話し合い、次回につなげていくようにしています。また、子どもたちにも得意不得意や個性があります。職員はしっかりと子どもの個性を把握し、その子どもたちにあったボランティアの適材適所にも配慮をしています。しかし、すぐには結果が出せません。でも、子どもたちが社会に出て行ったときに、分からないときにはきちんと「分らない」が言える大人になってほしいと思います。そして、もし自分に少しの余裕があるときは、困っている人に手をかしてあげられる優しい大人になってほしいと願っています。

以上のように、子どもたちが利用している児童館は、福祉施設の中でも唯一「自由来館」施設です。その立場を生かして、各施設の総合窓口になり、各関係機関（学校・相談所・病院等）と連携をとる事により、子どもたちがよりいっそう安心して利用できる施設作りにしたいです。

最後に、子どもたち自身が『何かやりたい！』『また行きたい！』と思えるように支援・援助し、中学高校生が明るく生き生きと活動することで、児童館も自然に明るく楽しい居場所・ボランティア活動になると思います。そして、子どもたちが堂々と地域・社会に出て行けるようにと願っています。

PROFILE

森田　洋喜
(*Hiroki Morita*)

松山市社会福祉事業団に勤務。知的障害児通園施設に10年、その後松山市中央児童センターを経て、現在は松山市新玉児童館に勤務。子育てにも追われながら、現場でも子どもたちと日々奮闘中。

提言 6

児童館と居場所とボランティア…

児童館（センター）に、勤務するまでは中高生とじっくりと関わることが少なく、現在の中高生の実態が見えませんでした。しかし、実際に児童館で中高生と関わることで、現代の中高生の考えや思い・悩みなどを直接肌で感じることが出来ました。これは、自分が想像していた以上だったようにも思います。

近年、子どもを取り巻く環境は核家族化・夫婦共働き・一人っ子・母子家庭・情報化社会・少子高齢化等、日々変化しております。

学校から帰っても、「両親が仕事でいない」「夜の仕事をしている」「友だちがいない」や、「いじめ」「不登校」「切れる子」「虐待」「ネグレクト」など、子どもたちが相談したり、落ち着くことのできる場所が少なくなっています。

また、情報化も日々進んでおり、子どもたち一人ひとりに「携帯電話」「パソコン」等があり、どこからでも情報がまるでシャワーのように子どもたちに降りそそいでいます。まだ、物事の善悪、情報の見極めなどができない子どもたちには不安や混乱を招きます。だからこそ、子どもたちの不安や混乱を防止するために、日々子どもたちとコミュニケーションをとっています。

そして、中高生は年齢的にも一番難しい時期で「反抗期」「受験」「進学」「就職」等、様々な局面に出くわす時期でもあります。その難しい時期に、大人と子どもがしっかりと向き合うことなく成長してしまうと、ますます社会に出て行くのが不安になるのではないでしょうか。

こういった、さまざまな思いを胸に子どもたちは児童館を利用していると思います。

児童館に行く

中学・高校生になって、初めて児童館を知った子ども、幼少時期から児童館を利用していた子どもたち等、色々な子どもが児童館に「遊びに行ってみよう」「あの職員さんはいるかな?」「まだ自分たちが遊んだおもちゃはあるかな?」「ここは何ができるのか?」等、好奇心をもって児童館に遊びに来る子どもたちもいます。

居場所に行く

中学・高校生の中には、「部活もしていない」「学校にも行っていない」「友だちもいない」など、さまざまな悩みをもった子どもが沢山います。子どもたちは、「誰かに聞いてほしい」「誰かに怒ってほしい」「おせっかいをしてほしい」と思っているのです。また、「うざい!」「わかっとる!」「ほっといてくれ!」と言いながらでも、口に出していることとは反対に、子どもたちは、しっかりと関わってくれる大人を探しています。

そのような子どもたちは、児童館を利用することで、自分のことを本当に分かってくれる人、自分の存在や居場所・友達を見つけようとしています。

ボランティアに行く

ボランティアの中には、「友達に進められて…」「親

中高生聞き取り 6

学童期からのつながりで自然と始めるボランティア

●期日　平成19年12月22日（土）
●場所　松山市中央児童センター 2階ボランティア活動室

■施設概要

松山市中央児童センターは地域児童館の活動とともに、市内のセンター的機能として全域からの子どもの受け入れを実施。その一つの活動として中高生の活動支援を積極的に行っている、館内には中高生の居場所的スペースを有し、小学生からのボランティア活動「Sunらいおん's クラブ」を実施、中高生が多く参加している。

■活動内容

メンバーの属している「Sunらいおん's クラブ」は児童センターで募集をした中高生のボランティアグループとして活動している。兄弟クラブに小学生から参加できるクラブもあり、一緒に児童館の事業の手伝いや移動児童館の運営補助、高齢者施設の訪問など、幅広いボランティアの活動を行っている。活動の割合は月に2～3回程度、土日を中心に行っている。

■活動の魅力

活動している中高生は「児童館の手伝いが大好き！」というほど、児童館を身近に感じ、子どもの時から同センターを利用している子が多い。また途中加入のメンバーも友だちの誘いやたまたま遊びに来てそのまま活動を始めたり、保護者の勧めにより活動を始めたなど、自然な形で加わっている。活動は小学生から参加できる「ボランティア」活動。聞き取りでは「ありがとうと言われるとうれしい」など活動へやりがいを感じて継続している様子がうかがえた。聞き取りの日も行事が行われており、進行するスタッフを補助して一般参加者と一緒にリードしながら活動していた。準備や片付けも率先して行う姿があり意識の高さを感じた。加えて、メンバー同士の関係も強くよいグループを形成し年齢を超えた関係ができていて、とても仲のよい様子がうかがえた。みんなのモットーとしていることがあり「ここで敬語を使うな！」「笑顔で帰ろう！」の2つの合言葉を教えてくれた。これは互いに言いたいことを言い合おうということと、自ら楽しんで活動しようということを表している。「仲間がたくさんできた」「いろいろな話ができて楽しい」などの声もあり、小5から高3までの大きな縦割りの活動であるが、互いの個性を認め合い居場所としても何でも言い合える居心地がよい雰囲気を感じることができた。

■大人との関係

メンバーを支える大人は、施設スタッフの他に、この活動のOG・OBである大学生以上の青年リーダー。中高生との日頃からの関係が深く、信頼は厚い。活動の内容については主に施設の要請によって活動する。自分たちの考えた活動を行ってみたいということは、あまり考えたことはなく、今の活動で十分に楽しいということだった。小さい頃からの良好な関係が続いていて、活動も定期的にあり、内容についても慣れ親しんだことであるために発想としてあまり気にしていないようである。

中高生聞き取り 5

ティーンズボランティアグループ「ポケット」

●期日　年平成19年11月24日（土）
●場所　阿波市社会福祉協議会土成支所
土成保健センター

■活動概要

「ポケット」は「徳島県TIC運動」の一つで、土成支所を活動基盤にする中高生グループ。「いろいろな人とのふれあいを大事にしながら、自分たちの明るい街づくりをしていく」を目的に、子育て支援や障がいのある人たちへのサポートなどを主な活動としている。メイン活動の「子どもフェスタ」は、実行委員を中心に企画準備する年1回の活動で、地域住民のサポーターと共に、当日約800名の来場があるイベント。それ以外にも、社協職員からの紹介で様々なボランティア活動に主体的に関わり、学校の仲間も積極的に誘って、活動への参加を自ら呼びかけている。

■活動内容

土成地区は、阿波市合併以前より小学校～高校まで福祉・ボランティア活動が活発であること、また地区内に高校が2校あり、中高生が集まりやすい土壌がある。加えて、社協職員のTIC運動への積極的なコーディネーションが地域活動と中高生を結んでいる。「ポケット」が企画した「第2回こどもフェスタ（平成18年）」は、それ以前に中高生が「ぽこぽこ庵」での幼児と親の子育て支援活動に参加して「少子化で子ども同士が遊べなくなった」という現状を知ることで、様々な世代間交流を自分たちの視点で考え、生まれたイベントである。

■活動の魅力

「一緒に活動する、学校以外のみんなや先輩なども優しく楽しい」「活動を通していろいろな人とふれあい、世代間交流もでき、地域の人に挨拶されてうれしい」など、人とのふれあいは魅力の1つ。また、子育て支援活動で乳幼児とふれあいで「子どもに癒された」経験が、「子どもフェスタ」を生み出す原動力になったとも語り、「子どもとふれあう」ことの楽しさを魅力と語る声も多い。こうした活動を「中高生が一緒」になって企画運営することで「達成感」もあると、「一緒」「達成感」も、重要な言葉として感じた。

■大人との関係

この活動のコーディネーションは社協職員が行い、サポーターとして地域住民も、ティーンズボランティアの活動に関わる。会合等では数名のサポーターが話し合いに臨み、実際の活動（「子どもフェスタ」等）では、90名近いサポーターがTIC活動を支えている。

聞き取り時の「学校で社協の方の講演があり、活動に興味を持った」の動機からも、関わる大人との信頼関係は最初から構築されやすい状況にある。実際に「大人に期待すること」の問いには、「今のままで十分満足」という声が多い。またサポーターには、この活動を立ち上げた先輩（社会人10代）も参加しており、こうした活動を最初に築いた年齢の近い世代への尊敬の言葉も目立つ。多くの地域住民のサポートがあることで、「地域の人とも知り合いになれた」や、「様々な世代との出会いがこの活動の魅力」からも、大人との関係が良好であることが伺える。

また、「（大人に）不満があるわけではないが、サポーターもこの活動を心から楽しむ感じがあったらいい」という意見があった。大人はTIC活動の世話役というよりは、中高生と一緒に楽しんで活動をしてほしいという高校生の素直な気持ちが伺えた。

いの場を提供したいものです。

国立オリンピック記念青少年総合センターでは、平成16年度から「青少年まちづくりボランティアワークショップ」を実施し、参加者の中高生と地域の大人とのいい出会いの場を設けています。活動をとおして、参加者の意識は「まちのためにしてあげている」というものから「まちの人に助けられている」「まちの人といっしょにできる」と向上的な変容を遂げます。

台東区池之端児童館では、ドイツのミニミュンヘンを参考にした「子どもによるまちづくり」を実施し、遊びや、体験をとおしながら社会の規範や仕組みや働くことの楽しさ、難しさを学んでいます。ミニミュンヘンを参考にした「子どもによるまちづくり」は、千葉県佐倉市のミニさくらが先導的に取り組んでおり、開設当初遊びに来ていた子どもたちが、年月を経て、中高生となり、遊びを支えるリーダーを担うまでに成長しています。

いずれの取り組みにも、さまざまな「いい大人との出会い」が数多くうまれています。

中高生に模範を示すことができる大人の存在が求められています。地域で中高生に模範を示すことができる大人になるため、私たち自身も成長する必要があると、自戒しているところです。

PROFILE

田中　豊
(Yutaka Tanaka)

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立オリンピック記念青少年総合センター 企画指導専門職。青森県出身。北海道教育大学教育学部釧路校卒業。平成 3 年度から北海道公立学校で教諭。平成 12 年度から北海道教育委員会社会教育主事。穂別町教育委員会派遣社会教育主事。北海道立青年の家指導員。平成 17 年度から現職。

提言5

中高生のボランティア活動活性化を青少年教育施設との連携で

私は、青少年教育施設の職員としてこの事業に関わらせていただきました。児童館と青少年教育施設が中高生のボランティアのために、共に取り組んでみてはどうかと考えたこと3点を提言とします。

身近にある中高生のボランティア活動を伸ばす

青少年教育施設においても中高校生ボランティアの養成や活動機会の提供を行っています。国立青少年教育振興機構では、ボランティアに必要な最低限の知識と技能を身に付けるため、13時間の基本カリキュラムを定め、ボランティアセミナー等の研修機会を提供しています。公立の青少年教育施設においても地域の学校と連携し、通学合宿や地域子ども教室推進事業等の機会を活用した中高生ボランティアの養成が盛んに行われています。

また、社会教育団体、青少年団体、民間の各団体においても、各団体が有する専門的な要素を盛り込んだボランティア養成事業を実施し、意欲のある中高生ボランティアを育成しています。

学校教育では、現行の学習指導要領が施行された平成14年以降、総合的な学習の時間等を活用し、奉仕活動の推進に力を注いでいる状況にあります。

中高生のボランティア活動活性化を図る際、児童館は地域で既に動き出している中高生のボランティア活動を助長する立場に立ち、研修や活動の機会を拡充することによって、地域のボランティア活動全体がさらに活性化するのではないかと考えます。

子どもや保護者が安心して利用している児童館には、中高生のボランティア活動を活性化させる素地があると確信しています。

専門職同士の学び合いでいきいきと活動できる環境づくり

児童館に児童厚生員が配置されているのと同様に、青少年教育施設には利用者に対し指導助言を行うために社会教育主事等の専門職が配置されています。双方の専門職がお互いの専門性をいかした研修を行うことにより、地域の子ども達に関する情報共有が図られ、より多くの大人の目で子ども達を見守ることができる地域づくりを行うことができると考えます。

専門職同士の輪（和、環、話…）には、今後、学校との関わりが求められるであろうスクールソーシャルワーカーや様々な形で子どもの居場所づくりを行っている団体へも広げていくことが望ましいと考えます。

児童館や青少年教育施設等に、中高生ボランティアの活動を支援するコーディネーターの配置や、連絡体制の整備も必要であると考えます。

大人とのいい出会いを考えませんか。

中高生の年代は、地域社会との関わりや自分が将来働くことを考え始める時期です。言い換えれば、大人をよりつぶさに観ている時期と言うことができます。児童館を利用する子どもたちや、中高生ボランティアには、意図的、計画的に大人とのいい出会

ユースサービスということ

私はユースサービスという考え方に沿って仕事をしています。ユースサービスは、子ども・若者が自ら持っている力を伸ばして、子どもから大人への移行期を乗り越えていくためのサポートをする教育的な営み、ということができます。別の言い方をすると、子ども・若者の成長を丸ごととらえて関わろうとする仕事だともいえます。上に述べたように中高生年代の若者と関わるのには、とてもエネルギーがいるものです。やんちゃで手の掛かることもありますが、〝普通〟と思っていた子が抱えている課題に気づいた時、そこに関わることもやはり大変なことです。嫌な相手、手の掛かる人とは誰しもあまり関わりたくないもの。ともすれば、施設の職員でもそうした相手は積極的に関わりを避けることもあります。それと同時に、先のフリーペーパーの編集スタッフの一人を知っている高校の先生と話すことがあった時に、「あの子が学校の外でそんなことをしているなんて信じられない。びっくりした。」と言われたのですが、教師が学校にいる生徒の姿しか知らないように、私たち学校外で子ども・若者と関わる人間は、学校の中での彼／彼女らの姿を知らずに施設で目にする中高生しか見ていない。つまり、へたをすると誰も丸ごとの子ども達を見ていないかもしれないという事実をふまえる必要があるということです。

児童館で丸ごと受けとめるには？

このことを児童館に移して考えてみると、「ボランティアしたい」という〝良い子〟ばかり注目するのでなく、関わりにくさを持った子どもも「来るな」と言わずに受けとめる必要があるということ。子ども達の表面的な態度や行動にとらわれず、その背景にあるもの（思いや生きている条件）に対する想像力を持って関わる必要があるということがいえるのではないでしょうか。だから、児童館が中高生年代までを対象としている施設である以上、「設備が不十分」「遊べるものがない」といった理由だけで〝関わりやすい〟小学生だけ相手にしているのでは、十分その役割を果たしているとはいえない時代となっているのではないかと門外漢としては思うのですが、いかがでしょうか。ボランティア活動に事業として取り組むことも良いでしょうが、中高生にとっても〝居る場所〟（来る意味）ができればと思います。小学生たちに勉強を教える、いっしょに遊ぶ、部活でやっているスポーツを指導するなど、中高生に活躍してもらう素材はいくらでもあります。たぶん、中高生が児童館（地域社会）と関わっていく上での唯一の障害は、彼／彼女らを受け入れられない大人の意識なのではないかと思うのですが、言い過ぎでしょうか。

PROFILE

水野　篤夫
(Atsuo Mizuno)

1955年名古屋生まれ。高校卒業後、京都にやってきてそのまま居着く。学生時代は専攻である歴史の勉強の傍ら、子どもをキャンプに連れて行く活動（キャンプカウンセラー）にのめり込む。大学を出るときにどちらの道に行くべきか考えるが、「学校の外で教育に関わる仕事をしたい」と考え社会教育を仕事とすることに決めた。偶然、欠員があった現在の勤め先（京都ユースホステル協会）に入り、以後、財団の事務局の仕事、青少年活動施設の事業企画や若者の支援の仕事をして現在に至る。

提言 4

関わりやすい子だけ相手にしていていいの？

今、私たちの施設では

私は、京都の青少年活動施設で長く働いてきました。そこには20代の若者や、若者を支援したり育成する活動をする大人もやってきますが、多くの中高生たちも出入りしています。バンド活動やダンス練習など、目的を持って施設を利用しに来る中高生、ロビーで漫画を読んだりだべったり、卓球やテニスをやりに来る、自習しに来る、職員としゃべりに来るという利用の仕方の子たちも多くいます。その中で割合は多くないけれどボランティアとして活躍する中高生もいます。例えば若者がサンタクロースやトナカイに扮して、地域の家庭にクリスマスプレゼントを届けるという活動（サンタクロースプロジェクト）にも、高校生が多く参加していますし、小学生たちと遊ぶ活動のリーダーとなっている中高生もいます。そんな多様な利用の仕方を受けとめながら、ある種の「居場所」を中高生に提供してきているのです。

やんちゃ中高生の気持ち

そんな中には、施設にやってきていろいろな問題を起こしてくれる子もいます。中学生のグループがやってきて、ロビーでボール投げを始めたり、魚を飼っている水槽にトイレットペーパーを放り込んだり、備品を蹴飛ばして壊したり悪さをする。ある施設では近隣の「やんちゃ」「ヤンキー」と言われる中高生がやってきて、施設内でタバコを吸ったり、バイクを無免許で乗り付けてきたり、どうみても万引きをしてきたような品物を見せ合いっこしていたり、法に触れるような行動をする。しかし、いずれの施設の職員たちも、単純にそうした行為が「法律に違反するからだめだ」、「迷惑だから来るな」というのでなく、彼らと個別にコミュニケーションが取れるよう時間を掛けてアプローチし、そうした行為が自分を傷つけ、周りの人たちを傷つけるものだということを伝えていくよう関わっていきます。そうした行為自体が中高生の「構って欲しい」「甘えたい」という気持ちを背景に持っていると感じているからでもあります。忍耐力だけでなく、自分の中の「彼らが怖い」という気持ちやためらいを見つめることも求められる関わり方だといえます。

「見た目」と中高生の背景にあるもの

また以前、私の同僚が担当して、高校生が作る高校生に向けたフリーペーパーを作っていたことがあります。最初は「編集やイラストなどに興味のある勉強好きな高校生が来るのでは」と思っていたのですが、やってきた高校生たちは必ずしもそうした子だけでもなかったのです。編集会議を重ねていく内に、だんだん分かってきた高校生たちそれぞれの持っているしんどさは、ある意味で意外なものでした。一見明るく振る舞う彼／彼女たちも、それぞれ個別の悩みを持っていたのです。両親の不和、学校でのいじめ、教師との反目、転校の経験、自信の無さ等々。その（当たり前の）ことに気がついてから、自分の中で中高生を見る目が少し変わってきたように思います。進学校に行っているから、偏差値の低い学校に行っているから、服装や髪型がはでだから、言葉遣いが乱暴だから、そういった外面的な見え方の背景にある、彼／彼女たちの生活や思いを想像しながら受けとめていかないと間違えるということを意識するようになったのです。

中高生聞き取り 4

ここに来るのは習慣？仲間がいるから楽しい！

●期日　平成20年2月1日（金）
●場所　愛知県高浜市勤労青少年ホーム内「バコハ」

■活動概要

バコハ（バンド・コンピューター・ハウス）は、愛知県高浜市の中高校生の居場所づくりとして、平成17年度4月より、勤労青少年ホームに中高生が利用できる施設が整備された。

■活動内容

毎週金曜日の夜、「バコハ」でスタッフ会議を行い、行事の企画・準備活動など行う。会議には毎回、高浜市の行政職員が参加し、話し合いの見守りや相談役、大人のサポーターも参加する運営会議等の調整などを行っている。また毎月第4日曜日の午後1時から、防音室の利用説明会を行い、初めての人でも利用しやすいようにサポートする活動や利用登録の手続き事務を行っている。年間のイベントとしては、毎年バコハ祭りを9月頃に行い、これがメイン活動の1つとなっている。また、地域のお祭りへの参加や、中・高校生の居場所運営委員会への代表者の出席などがある。

■活動の魅力

放課後、または部活終了後に会議に集まってくるので、集合はバラバラ。それでも一人一人がこの仲間と集うことが楽しいようで、「学校が違うとなかなか会えないので、ここが集える場所」と語っていた。また、活動の土台を作った先輩たち（大学1・2年）は、現在もサポーターとして活躍。「様々な出会いがあること」「サポーターの人たちが、イベント時に大工仕事や照明・音響の設定や運搬など、中高生ではできないことをサポートしてくれる」など信頼関係もある。とにかく次々の仲間が来るたびに、会話も弾み、それぞれが違う作業に取り掛かっていて、ばらばらに見えるが「それでも最後にはちゃんとまとまっているんです」「堅苦しくないところがいい、とにかく来るのが楽しい」と自由な雰囲気を語る。

3月の卒業ライブの進行状況も、先輩は「遅れてるんじゃない？」と聞いても、「大丈夫です、ちゃんとやってます」と会議記録を見せながら説明。「でも、照明できる人がだめになったよ」というと、「それは最初からそのつもり、でも先輩はきてくれますよね」「もちろん」と、畳みかけるように会話が弾む。傍らで、パソコンを取り出し、「こんなチケットデザインどうかな？」と画面をみせると、パソコンが得意なメンバーが「こうしたら？」と修正が加えられる。違った作業をしながらも、全員が話し合いに入っていて、話が途切れることがない。「個性豊かだから、まとめるのは結構大変」といいつつ、「でも先輩たちが土台を作ってくれたから、僕たちは楽なほう、「ナイスキャラな仲間がいるから、居場所になる」という言葉からも、仲間の魅力が最大の要因であると伺えた

■今後の夢・希望

人数不足最近意識するようになってきた彼ら。今後の夢を聞くと「メンバーを増やしたい」という言葉があちこちにあった。

また、市が主催するフォーラム等で他市の同様な中高生の団体と交流を経験したことがあった。「こうした団体との交流をもっと行いたい」「まず県内の近くの市に活動を広めたり、全国へ活動が広がっていったらうれしい」という希望もあった。日進市にある「じぇねぷろ」との交流は、じぇねぷろメンバーからも「話が聞けてよかった」という声もあり、中高生同士が、フォーラムといった話し合いの場で、お互いの活動を紹介し、活動意義を感じる機会があることも、活動を活性化・促進する要素になると感じた。

中高生聞き取り 3

学校とは異なるさまざまな人とのふれあい

●期日　平成20年1月18日（金）
●場所　塔南の園児童館事務室

■団体概要

京都市南区にある小型児童館。平成8年12月、特別養護老人ホームなど高齢者施設との複合施設として設置された。事業内容は、乳幼児の親子の子育て支援、学童クラブ、障がいのある子どもへの支援、中高生の居場所作り事業と多岐にわたり、それぞれの事業に大学生を中心としたボランティアの参加を得ながら実践をしている。

■活動内容

本調査の対象となる中高生の活動では、「中高生の活動支援・居場所作りプラン」として、「中高生のボランティア活動」「中高生の赤ちゃんのふれあい事業」「中高生の自主活動」「ヨルのジドウカン」「ヨルの配食サービス」「中学生の赤ちゃんふれあい事業」などがある。基本的に、中高生のボランティア活動は1年間継続するように、声をかけているが、途中からの参加も可能である。

■活動の魅力

今回、調査に協力してくれた高1男子M君は、小学生の頃、学童クラブに通っていた。友人に誘われ、昨年の夏祭りの活動に参加し、その後も職員からの呼びかけに「やってといわれると断れない」と、「サンタクロース★プロジェクト」（12月）、小学生と一緒にやる壁の装飾（現在進行中）に積極的に参加している。M君は、活動の中心的な存在で、学校とは違う様々な人とのふれあいが楽しく続いているという。

イベントなどの準備の時は、本当にできるかなと思うが、実際に与えられたことを一生懸命やって、それが充実して楽しいという。「達成した時が一番楽しいが、活動のプロセスも楽しかったらいい」と話す。また一緒に遊んでいる赤ちゃんや小学生が、素直に喜んでくれるとうれしいと感じる。来年は後輩もできるので、自分はいろいろと任せられる立場になるが、プレッシャーもあるけれど、職員の人から任せてもらえることは嬉しいしやりがいを感じている。

■大人との関係

様々な世代の職員の人との関わりが、ここに来る魅力と話すM君。ボランティア活動以外にも「ヨルのジドウカン」にも来たり、職員と雑談することも魅力のようだ。活動のことや、個人的な悩み相談もできる「自分に近い存在」と感じている。M君は「対等な関係がいい」と思っているが、職員からは「それは違うよ」と言われるなど、かなり率直に議論をする場面があることが伺えた。職員から「役割を任される」ことについて、「自分からこうしてみたいという希望は？」と聞くと、「今の自分にはまだアイデアが浮かばない。だから職員の人が土台を作ってくれるほうがいい。自分から意見が出てきたらちゃんとやろうと思うが、まだあかん気がする。今は土台を作ってくれたら、なんぼでもやる」という姿勢からも、ただ与えられた事をするという受け身姿勢ではなく、職員との良好な関係性の上に成り立つ、主体的な活動意欲が感じられた。

中高生聞き取り 2

じぇねぷろ
The Next Generation Raising Project

●期日　平成20年1月19日（土）
●場所　愛知県日進市にぎわい交流館
（NPO支援センター）

■活動概要

「じぇねぷろ」は、平成16年8月「10代の居場所作りプロジェクト」としてスタートし、集まった中高生15名が「じぇねぷろ（The Next Generation Raising Project）」と命名した。愛知県日進市の次世代育成支援行動計画作成の中で、10代の意見を計画作りに反映するための事業として始まった。

■活動内容

年1回3月に実施する「お祭り」がメイン活動。それ以外に、今年は小学校高学年を対象に、キャンプ活動を企画した。また、日進市こどもの権利条例についての話し合いも行っている。

定期的な活動としては、定例会を月1回実施している。また、イベントの準備活動など、その他の活動状況によりミーティングを増やすなど、ゆるかに活動をめざしている。

■活動の魅力

「失敗を通して、その反省を活かし次の活動に活かせること」「自分たちが考えた意見を具体的に実現できたこと（中高生のためのティーンズルーム）」「自分とは違う人のふれあいを通じて、幅広い人間関係ができること。それらを通して、自分自身の人間性が広がる」「中高生にとっての居場所とは何かを、中高生自身が主体的に考えて運営できること、その意味で自由にやらせてもらえること。また、活動経験が豊富な大人のサポーターが、中高生を理解しながら、余計な口出しでなく、足りたいところをサポートしてくれること」など、活動での様々な人とのふれあいから、信頼関係がひろがる充実感を得ていると感じた。

■大人との関係

じぇねぷろが始まった当初は、メンバーも多く、様々な学年の人が話し合いを進めていたので、失敗もあったが充実感もあった。しかし、このところメンバーの不足、特に同世代が多く、そのメンバーも来年大学生や高3になってしまい、次の世代が少ないこと。じぇねぷろ自体の存続の危機を感じている。メンバーとしては、中学生にもっと参加をしてもらいたいと考えているが、実際、中学になってすぐに入ってもらうためには、小学生のころから、じぇねぷろの活動を知ってもらう啓発活動をしなければと考えている。しかし、じぇねぷろの活動の知名度、広報の難しさ、そして、中高生を対象にした活動のため、小学生やその親に伝える手段がないことを課題ととらえている。

そして、初年度は市役所担当者が会議に必ず参加をしていたが、2年目以降、担当者もかわり、直接話をすることが少なくなった。そのことで意思の疎通が少なくなり、行政が考える中高生の居場所作りと、じぇねぷろのメンバーの思いのコンセンサスが、とれにくくなっていることも、課題として感じている。

中高生聞き取り 1

人との関わりの深さが活動の魅力

●期日　平成19年12月16日（土）
●場所　市川子ども文化ステーション
行徳地区事務所

■団体概要

市川子ども文化ステーションは年代別に活動をしていて、中高生に対しての活動は子どもの体験活動事業を中心にして、自主的に自分たちの活動をつくり上げていく活動を行っている。企画提案～準備～実施～反省をとおして、学年に応じてそれぞれが役割を持ちながら参加している。

■活動内容

市川子ども文化ステーションでの中高生の活動は、地域に密着し、その活動は多岐にわたる。地域の仲間たちと共に、メンバーとして子どもたちのキャンプや子どもたちの街づくり「ミニいちかわ」の企画・準備などさまざまな活動を自分たちの手で行っている。それぞれの活動には自主的に参加する実行委員会があり、話し合いを重ね、実際に準備も自分たちで行う。

■活動の魅力

魅力として多くのメンバーが「人との関わりの深さ」「異年齢の仲間」「互いがよくわかる」「話し合い一つのことをつくる」などの意見が共通していた。学校との比較も多く、「学校とは違って…」「学校にはない…」などの声も多く、仲間としても、ここで培った関係は深く、話ができる・互いを理解し合える関係であることがうかがわれた。加えて「最初はいろいろなことを教えてもらった」「先輩がえばっていない。同じ立場で伝えてくれる」など縦割りの仲間を認める声も多く、身近な先輩として青年メンバーを感じ、人生のモデルとして感じている姿がとらえられた。「さまざまな体験」という魅力を語るメンバーもあったが、そこには「一緒にできる仲間」の存在が大きな要因になっているようだ。また、「活動以外の時間も楽しい」との声もあり、これは互いの人間関係の深さを示すもので、思春期特有の仲間同士のつながりを求める欲求を満たすことにつながっている。同様の発言に「（一緒に）泊まるのがおもしろい」という発言にも多くが共感していた。これも同じ時間を共有するという欲求を満たすものだと考えられる。

■大人との関係

「自分を受け止めてくれる人」などの発言から大人との間に大きな信頼関係があり、認めてくれる存在として大人がいることを感じた。子どもから大人までが場を共有し認め合い、一緒に活動を展開し共に育っている姿を感じた。「（冗談めかし）大人って何かしてたっけ？」という程、オープンに語れる関係がある。大人の役割は、庶務の取扱いや安全確保、対外的な責任の担保など。自主的に進める活動を見守ることは、信頼関係が深くなければできない。中高生から「もっと自分たちが（大人の手を借りずに）できれば」という発言があり、互いに気遣い、一体となっていることを感じた。

いいけど集まらない。」

司会「見てもらう、知ってもらうきっかけがいないのが問題。」

★「ぶっちゃけていうと、面倒くさい活動じゃないですか？自分から進んですごいやりたい、超充実してるっていう感じの活動の場ではないわけで。イベントをみても裏の活動はわからないから、やりたくないよっていう子もいるけど。いろいろな人がいるわけで、雑用好きだよとかいう子がいれば入ってくれるんじゃないかなと。やっぱ見てもらうことから始めないと。今のイベントの人数を見ていると次にはつながっていかないかなと。ジュニアリーダーみたいに、誰々さんが来てねってというのは、じぇねぷろではできないから。依頼されて、参加者も集まって、材料もそろえて、ちゃんと人も集まるとやりがいが出るから、参加者もジュニアリーダーもけっこう楽しさを感じやすいかな？」

司会「ここには自由性があって制約がない魅力もあるでしょ。だから自分たちで考えられる面白さもあるよね。」

★「1年目はすごく充実していた気がする。成功的には少なかったけれど、人との関わりとか会議の流れとかは1年目がよかった。今は集まってもねぇ…。」

★「今はいつも来るメンバーが固定されちゃって。一応名前は入っているんですけれど、いつもの会議はこなくて、お祭りに人手が足りないって言うとちょびっと来る人もいますし。1年目はお祭りは成功しなかったけど、会議は成り立っていた。」

司会「もっと中1・中2の世代がいてくれることが、今後の発展には大事っていうことかな？」

★「大事っていうか、じぇねぷろ存続の危機みたいな、ちょっとそろそろ危ないんじゃないのって感じ。」

司会「二人も来年高3だしね。」

これからの夢や目標

司会「二人は、これからの夢や目標はある？。」

★「とりあえず最初の目的である10代の居場所を作っていきたいし…、やっぱ一番取り組んでいるのは、次にある祭り。今ちょっとそれにむけてやっているから。」

司会「一年間通じてやっぱりこれがメインな感じ？」

★「そうですね！そういっても過言じゃない。」

司会「ちなみに去年は成功したの？失敗したの？」

★「どっちかって言うと成功！」

司会「どのくらいの人が参加するの？」

★「チラシに来た人数がわかる細工をして、それをカウントすると100人いたんだっけな」

司会「後輩は育っていますか？さっきいった中3が。」

★「やっぱり夏休みから受験対策で塾に行ったりしているので、結構出てきていない、去年から入試制度も変わったし、入りにくくなったのも原因。」

★「やっぱりメンバーを増やし、とりあえず参加している人も増やしたい。自分たちが成長していないのに、イベントのレベルを上げるよりは、自分たちがまず成長したいよねっていうのが。今は、会議の方を深めたい。会議がマンネリ化している。私も忙しくなって来れてないから、結構大変。」

司会「グループの中でリーダーとかはいないの？」

★「いません。ジュニアリーダーとかは会長があるけど。人がたりないのもあるけど、司会はこの人って決まっているより、その時集まった人で司会決めて、書記やって、みんなが体験するのがいい。」

司会「みんながいろんな体験できるのがいいよね。」

★「そういう意味では（責任が）重くないと思う。」

司会「これまで出会った高校生も、自分がこういう活動で成長できるのがいいって、いろんな人と出会えて、なんかわからないけど、なんかが広がった感じがするって言っていたね。」

★「それはわかるけど、やらないとわからないんじゃないのかな？知らない人にしってほしい。本当に充実してるんだよっていうのを。今はじぇねぷろがうまくいってないけど、うまくいってる活動はやりがいがあるなって感じて。じぇねぷろもそういう場になっていければいいなと思う。」

司会「メンバー足りない感じ？」
★「今の現状でいえば、受験生が過半数を占め、メンバー不足っていうのもあります。」
★「まあ満足ですけど…、メンバーは少ないです。お祭りも人数がなかなか人とか集めるのが大変。お祭りをやる理由が、居場所を作りたいって言うのもあるけど、メンバーを集める目的もあって、こういうのやっているんだよって知ってもらって。」
司会「それで、メンバーゲットできた？」
★「講座を開いたんですよ、料理講座と理科のワーク実験講座、それで入ってくれた子がいた。」
★「アンケートをとったんですよ。」
★「国からこういうお金がでるからやってくださいって。中学生を対象に。」
★「アンケートを作って配って集計して、中学校に全部配って…。」
★「大変だったよね。集計してもスポーツが多くで、じぇねぷろではやりきれない。」
★「お金の面でやりくりできなかった。テニスを教えてくれる人を雇わなきゃ、1回じゃうまくいかないし、継続しないと。一番二番はテニス、サッカー、ダンス…で、だめで…。」
★「ダンスはやればよかったね。」
★「で、理科の実験コースは中学校の先生のお願いして、料理はほぼ自分たちで。サポーターの人にも料理が上手な方がいて。ガトーショコラとシフォンケーキ、バレンタイン用にこんなの練習してみて作ったらどうですか、みたいな。」
★「その年は4回も作った。ガトーショコラ！」

★「参加人数が少なかったので優遇できた。ケーキ箱も買ってラッピングもして。」
司会「何人位参加したの？」
★「多くはないけど、3人位。」
司会「それからメンバーに入ってくれたんでしょ。それは大きいんじゃない？一緒にこんな事を楽しんでやれる人、もっと来てほしい？。」

★「続けたい感がないっていうか、それが問題。1・2年は続くだろうけれど、ぜんぜん後の方まで考えていないってか、それが問題。10年とか20年とかたっても、じぇねぷろが存在してるかっていえば、なんかちょっと難しいかなっていうのが。」
司会「人数が少ないっていうこと？」
★「高3が一番多いことに問題があって、大学生になったらみんなメンバーを抜けなきゃいけないんで。」
★「サポーターになるんですよ。」
★「でもサポーターになるにしても、サポートするメンバーがいないみたいな、そこがちょっと。」
★「名前だけ入っている人もいるんですけどね。」
★「来年高3も多くて、一番育っていく年齢が少ない。」
司会「育っていく年齢って？」
★「中1・中2、高1かな？やっぱ中1とかがいれば、その子が育ていく過程、高3までの期間が長いから、メンバーも広がるって思うから…やっぱ、大事な中1がいないっていうか…。」
司会「なんで中1が入らないんだろう？」
★「やっぱそれは、じぇねぷろの活動があまり広まっていないから。どういう活動をしているのか、あまりみえてこないっていうか、他の人達からは見えない。やっぱり私たちが話している活動は他にはみえてこない。イベントをやったとしても中高生の活動だから、大人とか、これから中学生になる小学生には伝わらなくて入る人がいない。」
司会「でもすごいね、そうやって原因を自分たちで分析してるじゃない。」
★「分析するまではいいけど、実行する力がない。」
司会「例えば小学生にどうアプローチしようかって考えているんじゃない？」
★「どうにかしなきゃっていうのは、ただ私の中にはあるんだけど…。」
★「あれ？でも今年の秋のキャンプはさ、小学校高学年に呼びかけよう！って。それでその子達がじぇねぷろをしって、中学になって育ってくれたらというもくろみはあったけれど、海も予定が変わり、忙しくなって呼びかけが遅くなり人が集まらなかった。」
★「ジュニアリーダーは、子ども会の中で何人参加して下さいっていうのかあるから、いやでも参加する感があり、今までの歴史もあるし、多分これからも続いていくんだろうなあっていう感じ。じぇねぷろは強制感がないから、それが

わってくる大人の人が…。」

★「何人位だろう、5人位か、市役所の人は?。」

★「最初は市役所の人もいつも関わって、最近はめっきり来なくなっちゃって。いつもいるというよりは…、なんかね、時々来る。」

司会「市役所の人って異動があるからかわるでしょ?」

★「かわる!」

★「さっきのサポートしてくれる人って、市役所の人とかも入るですよね。」

★「あはは…。」

★「それだったら不満があるかも…。市役所の人は説明がちょっと…。」

★「あんまり大きな声ではいえないけどね。」

★「あの、やりたいことがあったんですよ、キャンプがやりたいって…。それで行こうみたいな。それが危険だからだめだとか、そういう…。」

★「それをまた最初に言ってくれればいいんですけれど、…いろいろあって。」

★「後の方になって、『チラシ配ろう』って時にひょっこっと出てきて『あ、無理だから』っていわれて。」

★「早く最初からいってよ!って、言ってくれないと困る。そっから急に予定を変えて、ここならいいんだろみたいな。」

司会「キャンプをやめたの?」

★「規模を小さくして、遠出をやめて。」

★「日進市内でやったんですよ。」

司会「どこに行きたかったの?」

★「海!です」

★「やっぱり危険だっていうことと、市内で居場所を作ってほしいから、出てってやるなって。やっぱキャンプがやりたかったので、キャンプは日常性を求めてないじゃないですか。非日常の活動を求めていたのに、みたいな…。」

★「私たちの活動は、十代の居場所を作るって事で、なんか私たちと同じ世代の人が何をしたいかを追求しているのに、日進市を広めるみたいな感がある。」

★「だから、サポーターの人に文句はないけど、行政の人には文句がある。」

司会「役所の人はこうだっていうことは、最初にちゃんといってほしいってことだね、ちがう大人の視点として。」

★「まあ、言いたいなら会議にこいって感じ。」

★「毎回来てくれてたんで。でも、毎回会議に来なきゃいけないっていう決まりがあるのか、わからないけど私たちには。それは普通なのかもしれないけれど。」

司会「そういう会議はどの位あるの?」

★「けっこうまばらで、月1回は決まってるんですけど定例会が。あとは…1週間に1回とかある日もあれば…。」

★「定期にするか不定期か、もめて、最初。結局話しあったわりには一応定期になった。増やす時は増やそうね、みたいな話になった。普通こういう活動は定例会は主流で、もう一人ジュニアリーダーをやっているメンバーが、『定期的にきちんとやりたい』ってジュニアリーダーみたいに。私はそういうきちっとした活動よりは、『じぇねぷろはゆるい活動をしたい』って思っていて、高校生のための場だから。やっぱ、ジュニアリーダーは小学生の育成を学びにいく場であって、強制感があるわけでないけど、リーダーの育成の場であって、私たちの意見は聞いてないって感じで。そういう活動はきちっとしないといけないと思うけど、じぇねぷろはゆるい活動したい。私たちのための会議であって。だから不定期でいいんじゃないかなって私は思っていたけど。結局妥協する感じで。」

★「なんか多数決だっけ?」

★「そう、でもその多数決もちゃんととる感じでもなく、気づいたら定期になってた。」

司会「そういう連絡はメールでやるの?」

★「多数決をとったときは会議でとったけれど、集まれないときはメールを使ったりとか。」

★「メーリングリストで。」

★「市役所の人は会議にくると言うよりは、メーリングリストで意見をいうみたいな。あと、会議の内容を原さんがまとめて添付ファイルでおくってくれたり、メンバーが送ってくれたり。」

活動での苦労や課題

司会「活動の大変なところは?」

★「何かを一からやるっていること。試行錯誤したり、反省したり、考えてその意見はこうじゃないのかとのくりかえし。(祭りの)宣伝もしないと…。やることがいっぱいあるんですよ。」

したら何で失敗したかを考えて、次に生かしたいという気持ちが強かったから。みんなでフィードバックする機会があったんです。」

★「あの失敗はすごかったんで…」

★「知名度から始まって、こう…。」

★「宣伝とか…。」

活動の魅力は？

司会「この活動の魅力は何？」

★「自分とは違う人とふれあって、人との関わりを持てたり、関係が広がるのが魅力。自分とは違う感じだなーって人といると人間性が広がるっていうか…。」

★「たまに失敗する時があるんですが、失敗の反省を生かしてやる気が出るところ。さっき違う人の話がでたけど、それはそれでいい。やっぱすごい嫌いで自分とは性格あわない人がいても、なんかやっぱり自分と違う所があると楽しいし、そういう意見もあるんだなと思うし、自分の中のなんかが広がる。逆に違えば違うほどいい。」

★「お祭りみたいな活動は楽しいじゃないですか！失敗しても成功してもいいし。最初居場所作りをしている時、何か実現したいことを言ってといわれて、そこで、中学生が集まれる家があったらいいなあって私言って。それを市長に提言して、今度できた北部福祉会館に、ティーンズルームができたんですよ。やりがいがある。」

司会「じぇねぷろっていう名前もメンバーで決めたの？」

★「最初は『十代の居場所作りプロジェクト』だったけれど、友達に『なんかそれってひきこもりの人が集まる場所みたいな』居場所ってそういうイメージが大きいらしく、名前を考えようって。」

★「でも今は『じぇねぷろって何ですか？』って言う感じもある。小学生にはわかりにくいですね。」

大人の役割は？サポーター（行政）一言いいたい！

司会「大人の役割ってどうなんだろうね？」

★「生きてきた年数が違うっていうか、子ども視点ではここが壁だなって言う所も、大人の一言で実は越えられるっていうか、いてくれると安心する。」

★「やっぱりいろいろな活動に関わって人が来てくれるので、他の大人よりも子どものことを理解してくれる、余計な口出しとかがないので。じぇねぷろは、こうしたら？という大人の強めの意見が出ない。子どもたちが主で、足りないところを大人がサポートしてくれる感じです。」

★「小学校の時出会ったから、最初から、原さんってこういう人かなって知ってた。たしか『環境子どもプロジェクト』の時、原さんが全体のファシリテーターで中心にいてくれて、原さんの人物像もすごく理解したから、今も信頼関係にあるっていうのが強い。」

司会「二人は？ここで初めて出会った人だよね。」

★「学校の先生とは違う感じ、私は自分の親とも違う感じ。でも原さんすばらしいと思う。よく聞いたらうちの親と家庭的には同じ。やっぱり、うちの親のＮＰＯ活動も見ていないから、親の所は居づらいし、そこにいったら、うちの親も原さんみたいなのかなと思った。」

★「うーん、子どもがちょっと困った時に助けてくれるような、うるさく言ってこないっていうか。」

司会「原さんと活動以外の話するの？」

★「しますよ、しやすいですね、なんか親近感がわくよね。」

★「第2のお母さんみたいな。」

★「うーん、わかる～！」

★「うちのお母さんよりお母さんって言う感じ。うちはこういう活動に理解が深くないから、まだじぇねぷろいくの？とか。」

司会「大人にもうちょっとこうしてもらいたいっていうのある？」

★「やっぱ僕としては、サポーターというのは、僕たち子どもが行き詰まったときに、こうしたらっていうのを言ってくれる感じ。ちょっとこうした方がいいんじゃないっていいすぎて大人主流になるより、こども主流になる方がいい。」

★「結構現状に満足してる。」

司会「原さん以外にはどんな方が関わっているの？」

★「いつもいるのが原さんで、なんかある毎に関

対談2

じぇねぷろ

失敗が、活動の継続につながった！

●日時　平成20年1月19日（土）10時～12時
●場所　日進市にぎわい交流館
●参加者
テツヤ（高2年　小5からボランティア活動を始めた）
サキ（高2年　社会参加活動は初めて）
マイコ（高2年　子ども会のジュニアリーダー）
クマザワ　ケイコ（こどもの城企画研修部・司会）

活動に対する熱い思いが伝わってきた

土曜日の午前、おりしも大学入試センター試験の当日。「1年後は受験当日だね」と言う高校2年の3人が、活動ベースである「にぎわい交流館」に集まってくれた。この3人は、じぇねぷろが始まった最初（中2）から活動に参加をしているメンバー。「インタビューはいいけど、写真はちょっと…」と初めは静かな印象だったが、話を進めるうちに活動に対する熱い思いや、現在の課題について、とても誠実に答えてくれた。

こどもの城　熊澤　桂子

活動の動機は？

司会「なんでこの活動に入ろうと思ったの？」

★「興味本位で。原さん（こどもNPOの事務局長）とは小学校の頃から関係があり、『やってみたら』と言われて、それがきっかけなんです。」

★「私は学童保育所の先生に誘われて、ちょっと強制ぽいんですけど、いってみてそのままずるずると。」

★「最初は親に入ってよって。ジュニアリーダーもしてて、違う活動もしてみたかった。」

司会「大人の人に誘われたから、まあやってみようかっていう感じ？」

★「ボランティア活動に抵抗がなかった。小5の時も市の活動をやり、それからずっと続けていて。ボランティア活動って大変とは思わない。」

★「これが初めて。ボランティア活動をやったこともなかったし、これが日常生活に入っていっちゃたんで、あまり苦しいと思わなかった。」

初めての活動は、失敗だった

司会「最初にやった活動って何？」

★「『あれは忘れもしない中2の夏休み』に始まり、次の3月に10代の子が集まれるお祭りをやったんですけれど…、それが1年目で成功しなくって、全然人が集まらなくて、それが最初じゃないかな。」

司会「一生懸命準備してうまくいかなかったのに、やめなかったのはなぜ？」

★「なんでやめなかったんでしょうねぇ？ 私もわかんない。」

★「なんていうか、負けず嫌いって言うか、失敗

われた時も、普段からなんでもない会話があるから、距離も近いし、それで信頼してやれてると思う。」

司会「なるほどな、普段の信頼感があるからね。なんか、君たちとどう関係を築いたらいいか少しわかった気がする。」

やってみたい活動は？

司会「最後の質問。この活動でこんなことしてみたいって。夢はありますか」

★「フレミラでお泊りがしたい」

★「ははは」

★「いいなあ、やってみたい」

★「してみたいなあ」

★「もう、絶対おもろいと思うねん」

★「夜、館内鬼ごっことか…なあ！」

★「かくれんぼとかしたら絶対見つからへんよ…！」

★「中高生だけでやりたいなあ」

★「キャンプとかやったことがあるけど、フレミラで頑張っている人たちと一緒にお泊りをしたい」

司会「茶室もあるからなあ…。合宿言うてやったらええねん」

★「でもセコムがあるから、警備が厳しいからなあ」

★「9時になったら、中から外には出れるけど、外から中には入られへん。一方通行や、忘れ物したら大変や…」

★「自分はみんないろいろやっているのに、「赤ちゃん」しかやってないから。高3から始めたから、もっと早く知ったらなあと思う。」

★「新しくはないけど、まだ参加しことない行事に参加したい。高2やけど、来年はそんなにこれそうもない…」

★「ライブの企画とかやってるし、でも今が結構充実している。結構いろんなことやっているから特にない。」

★「もう一回東京に行きたい」

★「児童館の高校生交流がやりたい！」

★「うちもやりたいなあ、高校生の交流。」

★「やりたいなあ」

★「東京行きたいなあ」

司会「宝塚と東京はあんまり変わらへんよ」

★「でも違うんやあ、東京は…」

★「ほんまにやりたいなあ…」

★「やりたいなあ…」

★「友達ふやしたいなあ」

★「全国規模で…」

★「ほんまにやりたいなぁ…」

対談を終えて…

フレミラを後にして、梅田に向かう電車の中で、もう一度みんなのディスカッションをふりかえっていました。一番印象に残ったのは、「みんな、本当にフレミラが好きなんだなぁ」ということです。

フレミラで出会う人が、温かさが、それぞれの活動が本当に好きなんですね。この想いをずっと続けていって欲しいですね。高校を卒業して、大人になってもずっと、ずっと…、君たちと同じようにフレミラが好きな子どもたちのために。（佐野真一）

（一同大笑い）

★「部活、バレー部を小学校からずーっとやっていたから…忙しいです。『赤ちゃん』も途中抜けで、すごい申し訳ない。バレーボールも好きやから。どうしたらいいか分からない。やっぱりでも、どっちかに行ったら、どっちかに御免なさいと思ってしまう。でも両方とも、今のうちにとったら大切やから…」

★「今、青少年リーダー始まって以来のピンチ。高3が3人いるんですけど、高3のこの3人は受験が終わっているけれど、ほんまやったら高3はいない…。活動したいけれど、活動範囲が人数でせばまってしまう。それだけが今の悩み。」

活動を支える大人が気をつけてほしいことは？

司会「自分たちがこれから活動していく上で、また後輩が活動していく上で、僕たちみたいな大人が、考えへんとあかんこと、こうしてほしいとか、大人はもうちょっとこうやったほうがええんとちゃうかとか、そういうことあるかな？」

★「ここの職員さんは私らの話を聞いてくれる。いい人や。」

★「そんな頭の固い人おらへん。」

★「そうそう、みんな近い目線で話を聞いてくれる。」

★「だから困ったことないんかなぁ、そんな話しあんまり聞いたことない。ほんまにそう思います、フレミラは、職員にも人にも恵まれてます…」

司会「フレミラの職員さんは、『話を聞いてくれる』『同じ目線で』って言ったよな、そういう要素が、君たちとつきあうときには必要や言うことか。」

★「話は聞いてもらいたいなぁ、」

★「聞いてもらいたいなぁ」

★「そういう目的で来ている子もいるわけやから。そういうコミュニケーションは大事。」

司会「話を聞いてもらえるのは、友達でもええんや」

★「職員さんやから言える」

★「学校にも関わりなくて、フレミラしか関わりがないから、そこだけの目線で、適切なアドバイスをくれる。」

★「友達やったら、それまでの事情知ってたりするから、そこだけのアドバイス。」

★「そこだけ切り取った、フレミラに来ている自分だけで…」

★「そうそう！」

司会「でもアドバイスは欲しい？職員でもアドバイスは大変やで…」

★「聞いてくれるだけでいい…。やっぱり最後に決めなあかんのは自分やと思ってるから。」

★「でもやっぱり何かを求めたくなるから、経験の差とか…」

★「そうそう」

★「友達にも話すけど、職員の話も聞きたい、いろんな目線の話を聞いて、結局自分みたいな…」

★「いろいろ聞いて、最後は自分で決める。」

★「なんか、上から言ったりしない。」

★「そうそう！」

★「でも注意する時は注意してくれる」

★「そうそう！」

★「おなじ目線にもなってくれる」

★「そうそう」

司会「同じ目線にもなってくれるし、怒られる時もあるの」

★「あります。」

★「『それ間違ってるやろ！』って言ってくれるから。」

司会「なるほどな。話を聞いて、同じ目線でも、怒るときは怒ることが大切ということか。」

★「なんやかんや言うて、職員さんがサポートしてくれる」

★「うちらが活動しやすい形に…。サポートがないとできない」

★「でも全部やるんじゃなくて、うちらのペースで…」

★「そういうのは職員さんたちに感謝しなアカンと思う。」

★「準備の時に、『これやって、これやって』という感じで指示する時もあるし、逆に、自分らと職員の人たちが集まって、『何、準備しようか』って、一緒に考えるときもある。『準備して』言

職員さんとか、フレミラに来ている人に話聞いてもらえると、なんかすっきりして。次の日は学校に行けたりするんです。なんか、うちにとって、もうひとつの学校と言うか、家と言うか…。いろんな意味でそう、すごく温かいところやから。ほんで音楽とかやってなかったら、絶対会えない人ばっかり、ここに来ていないと会えない人ばっかり。」

★「そうや、ハルもここで友達になったもんな。」

★「ましてや、バンドとかしていないんですよ。」

★「みんな高校も違うし、学年も違うし…。」

★「普通やったら、そうや、絶対出会えへんもんなあ…」

★「フレミラしか接点がない…」

★「絶対会えへんよ…」

★「絶対会えへんなぁ…」

★「だから、うちはそれをメチャ感謝している、だからすごい好きここが…」

司会「学校で嫌なことがあってもな、関係ないからね、ここはね」

★「そう、学校の仲間とはまた違う仲間のつながりがある。」

司会「学校の自分と、ここの自分は違う?」

★「なんかね、違いますね。自分でもそう思います。なんか発散している時あるなぁと思う。こんなに言っても、いいのかなぁと思うときもあるけれど。それを聞いてくれる人がいるから。すごい安心すると言うか…。」

★「赤ちゃんと触れ合っている時間がすごい短くて、そのために時間かけてこんなん作ったりして、すごいめんどくさいときもあるけれど、なんか頑張っている新しい自分を見つけられるというか…、一番の魅力やと思います。」

司会「でも頑張っている自分は学校生活でもがんばっているだろ」

★「学校は、ひとりひとりの役割がすごいうすいというか、わたしにしかできないことを、ここやったら見つけられるというか…自分を活かせる場所ということか、それがあたらしい自分というか… 学校とはまた違うことに気が付きます。」

★「フレミラには赤ちゃんの企画しか参加していなかったのですが、なんかすごい、人と接することが多くなって、やっぱり、自分が大人になるのに、いろんな人の意見が聞けたり、いろんな人と会えることで自分が成長できるのがいいのかなと思う。」

★「今まで何にも考えてなかったなあ。みんないろんなことを考えているんですね。そうですね、生活の一部、習慣ですね。週1回バンド来て…」

★「僕も生活の一部ですね。ここにいるとみんなに会えるしね。バンドが生活の一部やから必然的にここも…。」

親は活動のことをどう思っている?

司会「ここにくることが自分の中に定着しているんだね。みんな親はどうや、ここにくること賛成してんの。『あんたぁ行きすぎやぁ』とか言われへんの」

★「そんな質問、初めて言われました。今までないなあ」

★「基本、放任主義なんで…」

★「なんも言われへんけどなぁ。あっ、フレミラやから『いい』って言うのはあるかな。大人もいるし、終わる時間も決まっているし、どこにいるか分かっているから。」

★「家帰ったら、すごい笑顔で帰ってくるから、『すごい楽しかったんやなぁ』と思っているみたい」

活動を邪魔する要素は?

司会「みんなが、こうやって熱心に活動していくのに、またやろうとする時に、それを邪魔する要素はあるかな?」

★「勉強ですね!」

対談1

フレミラ宝塚

みんながいるからフレミラが好きやねん

●日時　平成19年12月12日（水）19時～20時
●場所　宝塚市大型児童センター　フレミラ宝塚
●参加者
タニノ　シンヤ（高3・男）青少年リーダー・バンド
ナカシタ　アユミ（高1・女）青少年リーダー・ダンス
ハギワラ　ハルミ（高1・女）あかちゃんとハッピータイム・バンド
ヒラタ　レイア（高3・女）あかちゃんとハッピータイム
ドウモト　シオリ（高3・女）あかちゃんとハッピータイム
ナガシマ　ケイタ（高2・男）音楽イベント、バンド
ウエジマ　リュウタロウ（高2・男）音楽イベント、バンド
サノ　シンイチ（こどもの城企画研修部・司会）

大阪弁の応酬で賑やかな対談に

雨がシトシトと降る、寒い夜にフレミラ宝塚を訪ねて行きました。暗い夜に浮かび上がる施設の暖かそうな光りを見つけた時なんだかホッとしました。そして中に入ると、スタッフのやさしい笑顔と、いろんな活動に取り組む中高生のいきいきとした姿。「うん、なかなか居心地がいいぞ！」と感じたことを今でも覚えています。ここを利用する中高生のみなさんも、訪ねてくるたびにそんな気持ちになるのではないかなと思います。

忙しい活動の合間に駆けつけてくれた7人のメンバーとのディスカッションは、関西出身の僕にとっては、久し振りの大阪弁の応酬で、賑やかで楽しい時間となりました。内容もとても深い話ができて、真剣に取り組んでくれたみなさんに本当に感謝です。最後は東京での児童館高校生ボランティア交流会を実現しよう、という話になりました。やりましょう、絶対に…

こどもの城　佐野真一

活動の魅力は何？

司会「みんなとっても忙しいのに、こんなに遅くまで、フレミラで活動するのはどうして、魅力は何」

★「夜は中高生しかいないけれど、おまつりとかやったら、おじちゃんおばあちゃんや小さい子もいっぱい来たり、いろんな幅の世代の子とからめるから。あたしも児童館スタッフとか保育士みたいな仕事につきたいので。普段やったらおじいちゃんおばあちゃんは、自分のおじいちゃんおばあちゃんとしか話す機会がない。だけどそういうのも含めて、全部いろんなひとの話しを聞いたり、いろんなひととしゃべったりする、そういうところが魅力です。」

★「楽しいから。ただ、ただ、楽しい」

司会「楽しいと言って、苦労するやろ。チームまとめたりするのが」

★「確かにちょっとあるけれど、それなりに形できるのが、自分たちで企画したのが、みんなに楽しんでもらえて、こっちも楽しめて、そういう達成感がいいかなあ」

★「なんか、学校でしんどいことがあったとき、どうしても、ここに来ちゃうんですよ。なんか、

事例紹介 9

佐世保市社会福祉協議会
佐世保市ボランティアセンター

商店街をフィールドに探検やインタビュー

■施設概要

佐世保市ボランティアセンターは、JR佐世保駅から徒歩15分のさせぼ市民活動交流プラザ内にある。このプラザは、旧戸尾小学校跡地の校舎を活用し、NPOやボランティア活動など市民活動の拠点として、平成17年4月に開設され、ボランティアセンターもそのときに移転した。センターには近隣の高校に通う学生や大学生も出入りしている。また、すぐ近くには防空壕を活用した戸尾商店街がある。

■活動事例

19年度より、こども地域交流体験学習事業「ひらけゴマ～世のな科スクール～」を実施。この事業は、普段からボランティアセンターに出入りしている高校生・大学生を中心としたスタッフが実行委員となり、小学生が戸尾商店街で活動するさまざまなプログラムを計画し、実施するものである。小学生の募集から内容の計画・準備・運営まで全てを実行委員会で行っている。

「世のな科スクール」は商店街をフィールドに、商店街の探検やインタビュー、地図づくりなど月に1回程度で1年間の活動を予定している。スタッフは毎月の開催日に向けて、週1回集まり会議を重ね、小学生の意見も取り入れながらスクールの内容を決定し、準備を進めていく。スタッフの中には、人間関係や学校に関する「問題」を抱えている者もいる。だからこそ居場所を求めてボランティアセンターに出入りしているわけだが、それだけでは「問題」は解決しなかった。しかし、この事業で、他のスタッフや小学生、商店街の人たちと継続的に関わることで、彼ら自身に少しずつ変化が見られてきた。会議の場では、最初は全く発言できなかったのが、自分の気持ちや考えを言えるようになっていった。また、自分が考えていたことを人に伝え、それに対してその人が言ったことを受け止める、という双方向のやりとりから物事を決定していくというプロセスを体験し、「問題」解決のための一歩を踏み出した人もいる。

この事業は、小学生が地域の人たちに見守られながら、高校生・大学生などと共に過ごし、様々な出会いと経験を積み重ねていく活動である。一方、高校生・大学生にとっても小学生や地域の人たちとの出会いが、社会性を高めるきっかけとなっている。この事業に参加する小学生たちがやがて高校生・大学生になり、今度はスタッフとして活動に戻ってくるように、地域に根ざして循環する活動となるよう、今後も事業を継続していきたい。

■活動の特徴

「学校ではできないような活動」
「みんなで考え活動する機会」
「様々な出会いと経験を積み重ねる」
「たくさんの経験や知識を持った大人との出会い」
「子どもとの関わりを通して自分自身と向き合う」
「商店街の活用」
「双方向のやりとりから物事を決定していくプロセスの体験」

事例紹介 8

足立区 西保木間児童館

中高生プロジェクト Time Try

■施設概要

足立区の西保木間児童館は、現在区内で唯一の直営児童館であり、地域の拠点児童館として、学童の受入以外にも、乳幼児と親のための広場や「ティーンズタイム」などの中高生のためのプログラムも積極的に行っている。

■活動事例「中高生プロジェクト Time TRy」

西保木間児童館の中高生への事業は、数年前から障がい児と健常児の交流事業「みんなであそぼう」に、ボランティアとして参加してもらうことから始まった。引き続き、18年度より、「中高生の居場所」「子どもの参画」「子どもの自主企画」をテーマに、「ティーンズタイム」という事業を月1回行っている。今年が児童館の開館30周年にあたることもあり、これまでの経験をいかし、足立区全体に普及できるようなモデル事業を確立したいと、「児童育成事業推進等対策事業」として申請し、事業を実施した。

事業の内容については、町会、自治会、子ども会、PTA等で組織された児童館運営委員会、児童館で読み聞かせのボランティアなどをしている「おはなし会」などと検討し、「中高生と地域とを結びつける」「街に中高生が出る機会をつくる」ことを目的に、地域でのインタビューをもとに、絵本をまとめるというプログラムを設定した。

講師は、地域にゆかりのある新聞記者、絵本作家、郷土博物館学芸員の方たちにお願いし、ワークショップを繰り返しながら、取材を進めた。西保木間児童館は、昔ながらの地域密着型の施設で、運営委員会の人たちとの関係性も強く、その特徴を事業に発揮できた。

■活動の特徴

最初は10人でスタートしたが、口コミで最終的には20人にまで広がった。仲間といっしょにいることが本当に楽しそうで、この活動をしていると「夜遅くまで児童館にいられる」と話していた。スタッフとの関係性についても、小さい頃から面識があったが、今回の事業を通じて、より親密な関係になれた。最近では、よりプライベートな相談事をしてきたり、甘えてきたりと、より心打ち解けた関係性になっている。

今回の事業では、中高生の主体的な活動を大事にしたいと思ったので、なるべく（最初から、大人の都合で）ルールや規制を作らないようにした。例え、制作途中でトラブルがあったとしても、トラブルがあってから話し合いを持つように心がけた。

スタッフとしては、中学生の様子をできるだけ「見守り」、安易に口を出さないように「待つ」という姿勢を大切にした。

12月1日に発表会があり、できあがった絵本を（当日は、紙芝居のような形式で）披露した。「ここまでやれたのか」と、地域の方々から賞賛の声をいただき、中高生にとっても自信になったと思う。

事例紹介 7

宝塚市立 大型児童センター フレミラ宝塚

多様でつながりのある活動

■施設概要

宝塚市立大型児童センター「フレミラ宝塚」は、兵庫県宝塚市のやや東よりに位置し、駅から徒歩約7～8分の交通の便がよいところにある。老人福祉センターとの複合施設で、建物の前には、広いガーデン広場やボランティア活動センターもある。「フレミラ」とは、「ふれあい」と「みらい」を築く世代間交流の拠点として、高齢者と児童に【学習・文化活動】、【仲間づくり】、【交流】の場を提供している。

■活動事例

フレミラ宝塚の中高生事業は、「自由な場の提供」・「仲間づくり、交流の場」・「文化活動、学習、運動の場」をキーワードに様々な事業が運営されている。

中高生は夜の9時（平日のみ）まで利用できるので、運動室でのバスケット、バトミントン、のスポーツ活動、情報図書室等での学習活動、フリースペースでのんびりお茶を飲みながら自由に語らうことができる。また、音楽室やダンス室、運動室を団体で利用することも可能で、バンドのメンバーがここを利用し練習をしている。

こうした自由利用以外に様々な、中高生向きのプログラム活動も実施されている。ボランティアの協力で実施される「ミュージックスクール」、フレミラビューティ講座と称して、「ゆうゆうリフレクソロジー」、フリースペースを利用して行われるカラオケ大会「ゆうカラ広場」など、中高生世代の心をくすぐる様々なプログラムが実施されている。

また、中高生自身が主体的に活動する場も用意されている、毎月実施されるバンドライブの日「フレミラ茶房」の日は、音楽室を利用しているバンドメンバーによって運営される。クリスマスパーティーもフレミラで様々な自主的活動を行う青少年リーダーたちの手によって。高校生のための次世代育成事業「ゆったり・ほっこり赤ちゃんとハッピータイム！」は、高校に呼びかけて集まった高校生たちがスタッフと共に企画、運営している。

■活動の特徴

この調査で一番印象に残ったのは、この施設の持つ多様性だ。夜7時施設に訪問したときも、多くの中高生で賑わっていた。しかも、そのメンバーが別々の活動を展開している。前述した「赤ちゃん事業」や「クリスマスパーティー」の準備をしているメンバー、バンド練習、スポーツ、勉強等に励むメンバー、なんとなく職員と話をしているメンバー、その多様性には目を見張るものがあった。もちろん「充実した設備」も要素ではあるが、私はそれ以上に、多様なプログラムが、中高生の意欲や主体性、準備性に合わせて用意されている点に着目した。個人個人のニーズに合わせた、自由利用の形態。そこから、施設やスタッフ、同じプログラムに参加したメンバーとの相互作用と学校ではできないような体験を重視したプログラム活動、そして、個人のニーズをより広い視野で、地域の人たちや、子ども、高齢者に結び付けていける自主的な企画運営活動。このように、メンバーの社会参加へ向けてのプロセスが、個人個人のニーズに合わせながら、楽しくゆったりと組まれているのが特筆すべき点である。職員とのインタビューでも、「ここにはいろんな子が来ます。だからいろんなプログラムがあって、それがつながっていくようにしています」と述べていた。フレミラが多くの中高生でにぎわっている最大の要因は、充実した施設があるからではなく、中高生の多様性を理解、尊重し、それを最大限活かしていけるよう、様々な取り組みを行う施設スタッフの努力姿勢だろうと考える。

係を地域の中に作っていこうと動き始めた。今までは高齢者のことばかりだったコミュニティセンターの講座を若者の地域参画をテーマとし、夏祭りへの中高生ボランティア募集からスタートした。集まった中高生は15名を超え、祭り当日は熱心にブース運営に取り組んだ。祭りのあとの反省会に残ったのは6名であったが、私たちが願っていたのは、祭りの後、残った彼らがいかに主体的な活動を地域に起こしていけるかであった。

誰かに当てはめられる活動ではなく、彼らが感じたことや考えたことを地域に生かしていけるような活動、彼らがやってみたいと思えるような活動を彼ら自身が考え生み出していけることを期待した。自治会は集会所を中高生が集まれるようにと月に1～2回提供。中高生が文書を作りたい時には歓待してパソコンのスイッチをオンに。応援してるよという大人からのメッセージは子どもの主体性を大いに育む。このような地域の大人の姿勢が中高生の心を動かし、地域の人の絆を深めようと中学生の絆実行委員会による卓球大会の実現につながっていった。

地域の大人たちがキーになる

自律性を高め、より豊かな市民性と道徳性を養う機会をつくるには、すぐれた子どもサポーターや児童厚生員がいれば実現するわけではない。むしろ、地域にいるいろいろな人、企画書をもって説明に行った時に、「わかった。費用はなんとかしよう」と言ってくれる自治会長の存在や子どもたちが作業しているとお茶菓子を差し入れてくれる民生委員のおばさん、やり方がまずい時にちゃんと教えてくれる先輩高校生などがいてこそ養われるものと思っている。そうした地域の人と人との関係があってはじめて、わたしたちＮＰＯはその専門性を生かして子どもたちのやりたい気持ちを引き出し、地域に中高生の力を生かせる活動が実現できると思っている。

地域の中で育てよう

社会の出来事には関心がもてるけれど、自分の住んでいる地域には関心があまりなく、地域に暮らしているという実感もあまりないというのが中高生だといっても過言ではない。

しかし、地域から切り離されたところで中高生が育つのは寂しい。これからの児童館はぜひ、もっと地域とつながってほしいと思う。児童館の中高生の活動が館内のものに終始してしまうのではなく、地域で力を発揮できる機会をぜひ作って欲しいと思う。

PROFILE

原　京子
(Kyoko Hara)

特定非営利活動法人こどもNPOの事務局長および理事。1987年、幼児期にこそ自然とかかわって遊ぶことが大切と考え仲間5人と自主保育を発足。以来、子どもの遊びと遊び場に関する活動を続ける。2年間の準備期間の後、2001年「こどもNPO」発足。いろいろな場面に子どもも参画していこうと子どもの社会参画を推進。2003年、子どもの居場所「ピンポンハウス」を開設、他に日進市の１０代の居場所づくり事業などあわせて４つの居場所づくりに関わる。

提言 3

やりたいことを見つけ、それを実現していく機会をつくる

やりたいことを見つける

人はだれでも、やりたい事を見つけ、それを実現してみようと思った時、心が躍り、自然に体が動く。その時のみんなを巻き込む力、みんなに与える力はとても大きい。

しかし、やりたいことがなかなか見つけられないというのが多くの中高生の現実でもある。「どうせ無理」「できっこない」「そんなことをやっても意味ない」最初からあきらめている子どもたちがいかに多いことか。

もちろん、部活動などでやりたいことを見つけそれに夢中になっている中高生も多い。部活動に熱心に取り組んでいる子が子ども会ジュニアリーダーなどの地域活動でもリーダーシップを発揮し活発に動いているというケースにも良く出くわす。しかし、そういった積極的な子どもはやはり少数派である。

やりたいことを実現するには？

「やってみたいことない？」「やりたいことがあったら挑戦してみようよ」私たちこどもＮＰＯが取り組む中高生の居場所事業は、そんな投げかけからはじまる。「わからない」「そんなこと考えたこともなかった」という子どもたちが、「そういえば、こんなことをやりたいと思っていた」と気付いたら、チャンスを逃さず、実現するための具体的なプランを描いてみる。もちろん、描くのはやりたいと思った子どもたち自身。

こどもＮＰＯには、常に白紙の企画書が用意されている。子どもも大人も、何かをやりたいと思ったらその企画書に「なぜそれをやりたいのか」「どのようにやるのか」などを書き込んでいく。実現のためにはいくら費用がかかるのか予算を書く欄もある。費用を捻出するためにどうやって資金を調達するのかも頭を悩ますところだ。

企画書で一番こだわっているところは、「それをやることによりなにがどう変わるか」という部分。ただ何かをやりたいだけでなく、自分自身がそれを実現するために動くと「何かが変わる」「変えていこうよ」というメッセージが企画書には込められている。

今の中高生と地域

現在の中高生はあまり地域を意識していないことに特徴があると感じている。親世代までは、地域のつながりが希薄になったとはいえ地域の行事や青年団など、地域とつながる仕組みが残っていた。季節の祭事などの場で将来の地域を担う次世代を育てる仕組みがかろうじて残っていたけれど、今ではそういったものはほとんど地域から姿を消している。地域の祭りに協力するのも子ども会などの小学生まで、中学生になるとほとんど地域から姿が消えていく。学校が終われば家か塾、塾帰りにコンビニで姿を見るぐらいだ。中高生が部活や塾の合間を縫って公園やコンビニで集まっておしゃべりしていると「何をしているんだ」と地域の人が学校や警察に通報し、先生や警察が駆けつけるという具合だ。これでは、中高生が、「自分たちは地域にとって迷惑な存在」「地域から排除されている」と思ってしまうのも無理からぬことで、彼らにとって地域はますます遠い存在になる。

中高生とチャレンジ

最近、中高生を地域に戻そうという流れがある。こどもＮＰＯが関わったある地域では、夜遅くまでたむろする青少年を、排除するのではなく、地域に巻き込んでいこう、「頼りにしているよ！」という関

事例紹介 6

中高生の居場所 バコハ

■活動概要

バコハ（バンド・コンピューター・ハウス）は、中高生が考えた居場所の名称。愛知県高浜市の中・高校生の居場所作りとして、平成16年度に検討委員会を設置。勤労青少年ホーム（ふらっとホーム）を一部改修して、平成17年4月「バコハ」が生まれた。初代の活動を築いた当時の高校生は、平成14年度に地域福祉計画策定に関する「168（ひろば）委員会の子どもグループ」に小・中学生の時から参加をしている。居場所運営委員会や行政、地域で活動する大人たちの様々な支援の中で、自分たちがやりたいことを考え、生み出し、形にしていった「バコハ」の活動は、まさに「堅苦しさのない、自分たちがやりたいことがやれる場所」として、彼らの居場所になってきた経緯がある。

■活動事例

サポーターなど大人との信頼関係

まず、毎週金曜日に行われる「スタッフ会議」へ行政職員が担当者として絶えず、出席していることはこの活動を支える要因として重要といえる。現在の担当者は、初期のころから関わった人を含め、3人目である。調査の時にも、スタッフの話の中から随所に行政職員の関わりが語られた。それは、①初期の頃、初めて行う「バコハ祭りで何をどう準備していいかわからない時、助けられた」ということ、②2代目の人は、年齢も若く、気さくで話がしやすかった、③バンドのことをよく知っている行政職員の人がいて、会議の話し合いを進めやすい、などがあげられる。「市長さんは、祭りに全出席してくれた」といったことからも、彼ら自身が、行政を近い存在と認識している感じがある。

そして、地域の大人のサポーターや、運営委員会での話し合いでも「自分たちのやりたいことをわかってくれる、聞いてくれる」その上で、「大人の人もいろいろ意見を言ってくるから、自分たちも意見がいいやすい、そして最終的には自分たちで決められる」「中高生ではできないことなどを、大人の人に頼むとやってくれる」「バコハの近所の人が祭りや、会議に興味を持って話を聞きに来てくれる」など、自分たちの活動を様々な大人たちが支えてくれる感謝を表していた。「やっぱり経験が深いから」と関わる大人への信頼感をしめす言葉からもそのことが伺える。

また、大学生の存在も大きい。現在の高校生は、この大学生と共に活動してきた仲間でもあり、大学生たちは、初期の頃から活動を築いたメンバーでもあった。そのことで、現在、高2がほとんどで、高1が3人というスタッフ構成は、人員的にも不足をする事態ではあるが、大学生が一緒になって、会議にも参加し、対等に活動に関わっていることで、活動を推進する力になっていることは、高校生には心強い存在である。大学生はその関わり方について「そばから見ていて、助けてっていう時に助ける感じが理想だけど、どうしても自分もやりたいって感じになる」と語るが、高校生は「僕らは、道筋ができていて楽だった。先輩たちが切り開いてくれて」という尊敬の念や、「場を明るくしてくれる」「見守ってくれている」と話し、よい関係であることが伺える。

■活動の課題

スタッフの人員不足、特に中学生がいないことである。中学生のバコハ利用は3割程度で（防音室の利用など）、スタッフ会議は夜遅いため、中学生の参加が難しいと話す。人数不足により「会議に人が集まらず、意見があまりでない」「バコハを受け継ぐ人がいない」「月1回の説明会も1名で運営していて大変」などの具体的な悩みもある。「バコハはアットホームでいい、でもそれが、外部からは入りにくい要因になっているかも」と現状を分析する見方もある。だからこそ、「やっぱり知り合いを呼んで、会議にきてもらうようにする」など、口コミがいいとの声。こうして会議を進行する高2もまもなく、受験体制に入るため「自分たちが関われる夏前までの、2～3ヶ月の間に新しい人に入ってもらって、やり方を伝えていきたい」というのが緊急の課題でもある。

事例紹介 5

松山市 中央児童センター

自分たちの愛着をもった児童館での活動

■施設概要

松山市中央児童センターは市内中央の市街地の中に位置し、市内の児童館のセンター的機能を有し、他の児童館と連携して活動を展開している大型児童センター。地域施設として地元の子どもたちの利用だけでなく、広く全域から受け入れを行っており、中高生の居場所づくりの一つとして専用コーナーを設置するなど、活発な活動を行っている。

■活動事例

中央児童センターで実施している中高生の活動は、同センターのイメージキャラクターであるライオンにちなんで「Sunらいおん's クラブ」という名称で施設が募集し、子どもの参加するボランティア活動である。小学生から参加できる「Sunらいおん's クラブ Jr（ジュニア）」と中高生を対象とする同クラブがあり、一緒に児童センターで行うさまざまな事業のボランティアを行う。具体的な事業の内容としては、四季折々の館内のイベントの運営を手伝う他に、同センターの実施している市内各所での移動児童館の手伝いや高齢者施設へ訪問し各種行事を実施することなど、幅広い活動を行っている。移動児童館については、年間80回程度行っており、本市が瀬戸内海に面しているため、船で島に渡り活動することもある。同クラブに参加しているメンバーには地域の児童館らしく、昔から遊びに来ている子たちが年を重ねて大きくなり、そのままクラブに入りボランティアの活動を行っているメンバーも多い。また活動は、遊びへ一緒に参加してリードするのだが、小学生からの参加ということもあり、自分もメンバーとして楽しみながら、自然に周りの子どもたちを身近にリードしている姿がみられる。指導にあたっているのは、施設スタッフの他、児童館で活動してきたクラブのOB・OGが大学生・社会人となり一緒に活動をしている。

■活動の特徴

松山市中央児童センターは、そこで育った子どもたちが年齢を重ね大きくなって、同じように児童館を利用している子どもたちの面倒をみるというのが活動の仕組みになっている。中高生の取り組みも自然で、上下関係もゆるやかで参加しているメンバーも、互いに年齢を越えて言いたいことを言い合えることが、とても居場所として心地よいという感想を持っている。活動の手伝いというボランティア的な面とグループに属していることが楽しいという居場所的な面を、バランスよく感じている活動である。その内容としては、定番となっている児童館の事業は参加のメンバーにはとても馴染みやすく、またスタッフとの連携をしていく活動の仕方についても慣れていて、その中でそれぞれが活動に関わり自分の活動の意義を感じ、充実感を得ているようである。

事例紹介 4

徳島県 TIC運動

10代の視点で地域の課題に取り組む

「ティーンズボランティア『ポケット』」の調査を終え、TIC運動について、さらに理解を深めるために、創設に関われた木谷宣弘氏（ボランティア研究所主宰）に話を伺った。

■活動概要

「徳島県TIC運動」は、Teens In Community の略で、10代の『ティーンズボランティア』が主役となり、自分たちの地域を活動基盤にグループを作り、自ら計画したボランティア活動を行うものである。募集は徳島県内各市町村の社会福祉協議会（以下、社協）が行い、社協コーディネーターのもと、ティーンズボランティアを支援するために研修を受けた地域の大人（ボランティア）が「サポーター」として、TIC活動に協力している。

■活動の経緯

「子供民生委員制度」

徳島県は、昭和21年に西祖谷山村西岡小学校で「子供民生活動」が始まり、たちまち全小・中学校に広がる。子供民生活動は、小地域の小・中学生によって「子供民生会」を組織し、小・中学生の各男女2人の子供民生委員を選出する。そして、地域の課題の解決に取り組んだ。しかし、1960年代以降、経済成長と共に始まった受験競争の影響を受けて次第に衰退。現在、石井町藍畑小学校が唯一活動を続けている。

「藍・あい・愛」運動から「TIC運動」へ

平成12年徳島県で「全国ボランティアフェスティバル」が開催、（テーマ「藍・あい・愛　渦になれ　輪になれ　ボランティア」から名称をとる）この時、全県をあげて活動に対する情熱が醸成され、平成13年「藍・あい・愛」運動が始まった。（これがTIC運動の前身となる運動）平成14年度には県下15市町村で実施された「10代の少年少女たちによるボランティア活動」である。この活動は、①地域を基盤として、②10代の少年少女たちが主体となって、③ボランティアや市民がサポーターとして、④学校と地域が支援する、という特徴がある。かつての「地域子供民生会」の実践によく似ていたもので、活動の主役は「10代の少年少女たち」。具体的な活動は、「大野わくわく子ども会」をベースに、国際交流活動を行った阿南市社会福祉協議会、「地域の人と交流したい」という土成小学校、「自分たちができる活動」を通して、地域貢献しようと取り組む阿波農業高校など、いくつかの先駆的な事例が生まれた。その後、平成15年、徳島県下20市町村に補助金を受けて、TIC活動が広がった。

時代の流れと、地域活動の歴史が、徳島県にてTIC運動を生み出す。

現在もこの活動の中心的な役割を担う木谷氏は、この活動の意義を「10代の多感な時期に、地域の社会の中で少年少女たちがのびのびと、自分の意志でさまざまな実践を行うこと」と語った。自分の住む地域の課題を10代の視点でとらえ、その解決にむけてのプロセスを、サポーターと主に考え、一緒に活動することである。

そのためには、地域の大人であるサポーターの育成が重要だ。サポーターは指導者というよりは、ボランティア活動へ導き、少年少女のよき相談役であり、理解者であることが大切で、こうしたサポーターがつながって、「10代世代が育つ地域ネットワーク作り」をめざしてほしいという願いも語られた。

そして、この事業の推進をする社協職員のコーディネートも重要であり、そのために、木谷氏は、職員を対象としたボランティアコーディネーター研修にも力を注がれている。また木谷氏は、TIC運動が、全国へ広がる事を期待して、平成20年3月に、徳島県内で、富山県、広島県の少年少女たちも招き、ボランティアサミットの計画・実施を準備している。

事例紹介③

ティーンズボランティアグループ「ポケット」

『参加』から、『参画』の活動へ

■活動が生まれたいきさつ

「ポケット」は「徳島県TIC活動」の1つで、阿波市社会福祉協議会土成支所を活動基盤にする中高生グループ。この地区は、以前より学校や地域でのボランティア教育・活動が活発。「小学生の時、花を栽培して高齢者にプレゼントした」「地域の人と一緒にゴミ拾いをした」など、友達や家族と活動をした経験が子どもたちにはある。まさに受け身の『参加』ではあるが、ごく自然に活動するきっかけがあった。

「ポケット」会長のマサト君は、中3の夏、母親の死により絶望感、孤独感を感じていた時、友人の母親に「ぽこぽこあん（世代間交流施設）」に誘われ、子育て支援活動に参加。その時の「子どもに癒された」ことが、本格的にボランティアを始める契機になった。この経験から、仲間と共に10代のボランティア活動グループ「ポケット」を結成することになる。活動で知った「地域で子ども同士が遊べない」現状を、自分たちの手で何かできることはないか？そう考えて企画されたのが「子どもフェスタ」。こうした経緯で、様々な人との出会いと喜び、活動からの問題意識は、中高生自身が活動を生みだし、プロセスから関わる『参画』への動きとなった。

■活動活性化のポイント

「こどもフェスタ」は、実行委員を中心に企画準備する年1回のメイン活動。この活動は単に子どもだけを対象とせず、「世代間交流」がテーマとなっている。地域住民のサポーターや各種団体など、約90名の大人が関わり、中高生の活動を支援する。これら中高生とサポーターのコーディネーションは、社会福祉協議会の職員が行っている。初期の段階から関わる黒田さんは、徳島県TIC活動の推進者である木谷宜弘氏と出会い、社協のボランティアコーディネーター学会での研修を重ね、その実践を土成地区で行っている。学校でのボランティア活動紹介の講演、社協主催のスキルアップセミナー、また、各種活動や、イベントなどに参加した中高生への個別の呼びかけなどが、中高生の心に響き、活動へ誘っている。参加の動機にも、「黒田さんに誘われて」「黒田さんの講演を聴いて」の声からもそのことが伺える。そして、ポケットのメンバーが仲間を誘って活動に加わる「人から人へネットワークの広がり」があることも、人との出会いをつくる要素となる。こうして彼らは、様々な世代とのふれあいが、自分たちの成長や、活動の推進につながっていることを実感している。

また活動内容の「子どもとのふれあい」は、活性化の重要なポイントといえる。子育て支援の継続的な活動は、「お兄ちゃんと遊ぶのを楽しみにしてます」など母親の声はうれしい瞬間。純粋な乳幼児と、遊びを通してふれあう楽しさ、その子達から「ありがとう」といわれるうれしさは、活動を継続する原動力となる。その子達のおかれている現状（少子化で子ども同士が遊べない）を鑑み、企画をする「子どもフェスタ」は、普段のつきあいの中で子どもの顔がイメージできるからこそ、やりがいもある。そんな課題を仲間と共に話し合い、地域のサポーターに協力を依頼し、自ら活動をすすめていく彼ら。「人の優しさにふれる」ことで、「これからも続けていきたい」「もっとやりたいことがある」「他の中高生にもこの活動を知ってもらいたい」という前向きな姿勢が語られるほど、彼らはこの活動を楽しんでいる。

うに見つめていた。

2つの事業から見えることは、中高生は、社会の役に立ちたい、自分を高めたいという気持ちをしっかり持っているということである。それには時間と心の余裕が必要で、一歩踏み出したいときに、一緒にやれる友だちがいるかどうか。継続の鍵は、その活動に魅力があるかどうか。そして、そこにいるのがどんな大人かということが要になると思う。

中高生と寄り添うということ

多くの中高生たちは、やさしくて、意見を強く主張したり、対立をしない。相手を傷つけないようにとても気を使う子が多い。それは自分も傷つきたくないという裏返しでもあるのかもしれない。そして、大人を見つめている。どんな大人なのか知ろうとするし、また、自分を知ってほしいというシグナルを出している。時々、彼らは、思っていることと逆の表現をすることがある。後ろ向きの発言をする時に多いのだが、単純な私は、その言葉の裏にある子どもの気持ちに思いをはせる事ができずに、ついそのまま受けとめて失敗することがある。子どもたちは私のような大人を見抜き、平気な顔をしながら心の中でがっかりしている。（時には私の捉え方の間違いを指摘してくれる子もいて、とても有りがたい。）

中高生と共に活動をつくっていくことは、信頼関係をつくっていくことでもある。親や学校の先生以外の多くの大人と出会うことは、様々な価値観と出会い視野が広がるという点でとても大事なことである。活動の中にはいろんな大人がいていいし、その方が面白い。が、すべての活動において大人が共有し、大事にしていかなければならない事は、子どもたち、一人ひとりを大切な存在として関わっていくということだと思っている。大切にするということは、一人ひとりをちゃんと見る、認めること。そして、子どもたちの育ちを支援する活動をめざすなら、お膳立て事業はしないということ。大人と子どもたちの役割を決めるときも話し合って決めていくことがとても大切だ。

また、彼らの活動には「子どもの時間」ならぬ「中高生の時間」が存在する。もちろん、大人の都合もあるから変に遠慮せず、対等にきちんと申し入れをすることは必要だが、あくまでも優先は中高生の都合。彼らにとことん付き合う気持ちでいることが信頼関係に結びついていく。

子どもたちの気持ちに沿い、気持ちを受けとめる。とても難しいことだが、臆病にならずに訓練する事で大人も成長していくことができる。継続している活動でも、そこにいるのは一人ひとり違う子どもたち。活動が終わったあとの達成感は彼らのものであり、大人は、彼らと一緒に、楽しみ悩み、相談相手になり、居ても邪魔にならない、困ったときは頼りにもされる、そんな存在だと認識し、今後も自分らしく関わっていきたいと思っている。

PROFILE

勝部　久美子
(Kumiko Katsube)

特定非営利活動法人市川子ども文化ステーション事務局長。岩手県岩手郡岩手町出身。小学生までは野山を遊び場にし、中学ではバレー、高校では速記に取り組む。1975年4月太陽神戸銀行に入社（現在の三井住友銀行）8年半勤務。1996年3月から、市川子ども文化ステーション事務局長就任。趣味は山登り、バレーボール（ママさんバレー歴19年）、読書。好きな事は、子どもとあそぶ事、スポーツ番組鑑賞、舞台鑑賞、映画鑑賞。

提言 2

大人は雑草になって向き合おう

はじめに

私は、中高生の活動に関わる機会を得てから約11年間、彼等の成長の瞬間にたくさん出合い、得難い時間を過ごしてきた。子どもたちは小学生から、中学生、さらに高校生へと、本来持っている力とそれまでの体験を重ねあわせ、しなやかに成長していく。彼等の集団に、そして一人ひとりに、大人としてどう向き合っていくか、戸惑い悩みながらの日々であるが、そのことを面白がり、共に作りあう仲間でありたいと思いながらつきあってきた。

年間を通じていろいろな活動を行っているがその中でも、ボランティアとしての比重が大きい2つの活動から、まずは中高生の様子を紹介したい。

活動事例の紹介 ～市川の中高生は…～

2003年から毎年開催してきた「子どもがつくるまち　ミニいちかわ」は、市内2箇所の公園で各2日間、子どもたちが自由に参加できる模擬社会を作り、子どもが市民としてそこで生活するというイベントである。まちには、市役所をはじめ、職安、銀行、警察などの公共ブースと飲食店や工房系など約40店舗のブースが並ぶ。このまちの特徴は、主導権と決定権は子どもたちにあり、「徹底的に遊びのまち」であるということだ。（ドイツの「ミニミュンヘン」をモデルにしたこの取り組みは全国各地に広がり、現在15箇所で開催されている）昨年（2007年）は4日間で、4歳から18歳までの子どもたち延べ5000人が市民となり、働き、遊んだ。

この活動をスタートする上で、まず、中高生と青年にスタッフをやらないかと声をかけた。彼らの関わりなくしては面白いものにならないというこだわりがあった。彼らはすぐ、飛びついてきてくれた。そして5年が経ち、中学生だった子が高校生、高校生だった子が青年となり、成長した関わりを続けている。彼等の、更によいものをめざそうという思いと責任感は大人以上に強く、また、やわらかな発想には驚かされることも多い。

会議への参加、事前作業と当日早朝からのテント等の設営、片付けまでと多くの時間と労力を使うこの事業に彼らは主体的に関わっている。小学生だった子が中学生になり、スタッフになりたいとボランティアに申し込んできたりもする。中高生に「ミニいちかわ」の魅力を聞くと、全員が、「参加してくれた子どもたちの笑顔」と答える。それがあるから、頑張れるし、自分たちも楽しいと言う。

昨年、市川市内の小学4年生以上の子を対象に「ミニいちかわの店長」を募集したところ多くの申込みがあり、51人が店長として関わった。まとめの会の中で小学4年の女の子は、「店長になろうと思った理由は？」の質問に「去年、ミニいちかわに参加して楽しかった。そのミニいちかわの店長になれるなんて幸せだなって思ったから」と答えた。中高生を慕い、事前の作業にも自主的に参加してくれた。

地域の中でミニいちかわという遊びのまちを通して、異年齢でつながり、人とのコミュニケーションの面白さが確実に受け継がれていっていることを大人はもちろん、中高生も感じている。

「10代と幼児のあそびあい講座」は、中高生が幼児とペアになって遊び、幼児に読み聞かせをするという企画である。市川市が行っている「夏休みボランティア募集」を活用して広報した。中高生たちは、日頃、触れ合う機会のない幼児に最初はとまどう様子もあったが、彼らを慕う幼児の熱い眼差しに、表情がどんどん柔らかくなっていく。「子どもたちがとてもかわいく思えた」とうれしそうに講座終了後に話していた。また、幼児にとって彼等はあこがれの存在となり、幼児の親たちにとっては中高生を身近に感じる機会になり、子どもたちの様子をうれしそ

て学べます」「ここにいると博物館で重要な人物になれます」と。そしてさらに、「1年間に100時間以上活動したらボランティア・ディナーに出席できます」というのである。年1回のボランティア・ディナーに招かれると、そこに集まった人々のなかで「一番笑顔があるボランティア」というような表彰をするという。

日本では、ボランティア活動が「内申書」に記載されて受験の際の「評価」に結びつけられたりしているが、学校や会社での成績や栄達や名誉に直結させずに、地域の住民生活に開かれたものとして、もっと多様で楽しい「評価」のあり方が工夫されるべきであろう。

「ボランティア」活動の用語と位置づけを問い直す

最後に、根本的な問題提起になるが、子どもにとって「ボランティア」が重要であるということが自明のように語られているけれども、そもそも「ボランティア」という言葉で取り組まれている内容を、「ボランティア」という言葉で表現した方がいいのかどうかを再検討する必要があるのではないだろうか。ちょっと、回りくどい言い方をしたけれども、次のようなことを問いかけたいのである。

子どもたちが成長・発達していく上での生活・活動の全体を考えた場合、年齢が幼い段階から次第に上に行くに従って、その生活・活動の内容は拡大・深化していく。睡眠・食事・排泄などの「基本的生活」活動を身につけることから出発して、「遊び」「学習」「仕事」「表現」活動などその内容が豊かになり、さらに「社会的生活」を営むための資質を身につけて行く。特に「社会的生活」を営むために必要な資質を考えると、その中に①「話し合う」、②「集い会う」、③「人の役に立つ」活動が含まれる。

「ボランティア」活動という用語で表現してきたことは、人間が「社会的生活」を営むために必要な資質としての③「人の役に立つ」活動のことである。「人の役に立つ」ための活動は、本来自らの自発的意思によって行われるものだが、たとえ外から求められた場合でも、つねに①「話し合う」、②「集い会う」という営みとセットで追求されるべき課題なのではないだろうか。

「人の役に立つ」側面だけが切り離されて強調されると、〈他人のための活動に参加する〉〈困った人のために奉仕する〉という他律的・慈善的意識に転化する可能性がある。したがって、中高生自らが自治的に「集い」「話し合い」を行いながら、「人の役に立つ」活動に取り組むというトータルな把握と、そのプロセスをじっくり保障する視点を見失わないようにすることが重要ではないだろうか。

PROFILE

増山　均

(*Hitoshi Mashiyama*)

1948年、栃木県宇都宮市生まれ。日本福祉大学社会福祉学部教授を経て、現在早稲田大学文学学術院教授。専門は、教育学、社会福祉学。特に教育福祉問題、子育て問題、子どもの人権と文化問題など。日本子どもを守る会の副会長、『子ども白書』（日本子どもを守る会編集）の編集委員長。文部科学省「全国家庭教育フォーラム」、「全国教育委員長研修会」の講師をはじめ、東京都新宿区など各自治体の子育て支援・家庭教育・社会教育関係の講座の講師、審議会の委員を務める。

提言 1

児童館における中高生のボランティア活動活性化にむけて

安心して取り組むために「学校との連携」を重視すること

児童館や地域での活動に、中高生が主体的に参加する上で一番大きな課題は、部活動を始めとする「学校」の教育活動との両立の問題であろう。中高生が、安心して児童館での取り組みや地域での活動に打ち込めるためには、「学校と連携」を強めることが不可欠であり、そうした連携の基盤づくりを進めるのは、取り組みに関係する大人の側の役割である。

中高生が地域での「ボランティア活動」に積極的に参加し、主体的に取り組んでいるところでは、①担任の教師の熱心な勧めや理解があること、②学校のサークルとして位置づけがしっかりしていること、③学校長を先頭に学校ぐるみで「ボランティア活動」を重視していることなど、学校側の理解が重要な要因となっている。

学校の理解があっても、地域活動に取り組む中高生たちは、学校での学習や部活動などとの両立の難しさや、様々な困難に直面している。学校の理解が無い場合には、なおのこと困難や矛盾を抱え込んでいる。そうした困難や悩みを抱えた中高生の声をていねいに聴き、彼らの声の中から課題を見出し、ともに考え、励まし、アドバイスが出来る体制をつくることが不可欠ではないか。「ボランティア活動」を通じての学び、悩み、疑問などそれらすべてが中高生の成長の糧となるように援助したいものである。

ボランティアの基盤としての「ゆとり」の確立を

中高生の生活は相変わらず忙しい。「学校五日制」になってからも、必ずしも「ゆとり」が生まれたわけではない。近年は「ゆとり」政策が「学力低下」を招いたというような論調に沿って、補習授業や授業時間が強化される方向に進んでいる。

実は、欧米諸国において「ボランティア活動」が活発なのは、その土台に「余暇の時間」が保障され「余暇教育」がなされていることによる。1年間に約1か月のバカンス、完全週休2日制、そして1日の中にも余暇の時間があって、その余暇を自由意思で社会貢献の時間として活用するからこそ、ボランティア活動が発展し、ボランタリズムの思想が根づくのである。大人も子どもも地域社会で生活する時間がもっと保障されなければ、市民活動としてのボランティアはできない。

いま日本社会では、子どもたちが市民・住民としての自治的役割を果たせるように育てられているであろうか。親や教師も、地域住民・市民としての生活を失って、職場や学校の中の生活に追われ、家庭と職場を走り回るだけで1日の時間が費やされ、ボランティアどころか地域住民としての生活をする時間もないのではないか。

「市民としての親・教師」と「小さな市民としての子ども」が、地域社会の中で出会い、語らい、遊び、楽しみ、ともに生きる共同と共感の世界がつくられなければ、ボランティア活動は根づかないだろう。ボランティア活動の基盤としての、「ゆとり」「余暇」の社会的保障の問題にも注目しておきたい。

ボランティア活動に対する「評価」のあり方を工夫する

かつて、テリー・スザーン（元・こどもの城スタッフ）さんがアメリカの子ども博物館で活躍している子どもたちのボランティア活動への「評価」について紹介していたことを思い出す。子ども博物館でのボランティアの申込書には、いくつかの特典が書かれているという。たとえば、「ここにいると、友だちがいっぱいできます」「ここにいると、博物館につい

事例紹介 2

塔南の園児童館

サンタクロース☆プロジェクト

■施設概要

京都市南区にある塔南の園児童館は、社会福祉法人京都福祉サービス協会が運営する小型児童館。特養など高齢者施設との複合施設でもある。

■活動事例

「サンタクロース★プロジェクト（以下サンタプロジェクト）」

それまでの「赤ちゃん講座」や公園での遊びの企画等でふれあった乳幼児家庭に対し、クリスマスイブの夜、高校生がサンタやトナカイに扮し、訪問する事業である。事前に訪問する家庭と打ち合わせを行い、母親の希望を高校生が聞き取り、親と共に当日の内容を決定する。高校生は数名のチーム（職員がグループ分けを行う）を結成し、チーム毎に活動を行う（平成19年12月は3グループで実施）。役割分担や、各家庭にあったプログラムを企画準備など、全てを高校生にまかせ、本番も高校生のみで活動を行う。

当日の夜、活動を終えて戻ってくる高校生を、児童館で職員や大学生のボランティアが軽食などを用意して歓待する。達成感のある活動のため、帰館後すぐ、その感想を話しあう「ふりかえり」を行い、メンバーの気持ちをわかちあう時間を必ずつくる。

■活動の特徴

事前準備の段階では、職員がその練習に関わり、ぎりぎりまで助言・指導をする。それは「中途半端なサンタだったら、子どもの夢をこわすから、やらんほうかいい」といった厳しい言葉であるが、その裏には「子どもたちのもっている力を信じたい」という職員の願いもある。「高校生は、自分たちが考える以上の活動をすることがある。難しい問題にあたったら、一緒になって彼らと調べ、考えたりもした。」と、共に活動をする職員の姿勢が、高校生との信頼を育んでいる。インタビューでも「任せてもらえて、できた喜びにつながる体験」と高校生が発言していることからも信頼感が伺える。ただそうした駄目だしも、高校生個人へではなく、活動するグループの責任として認識できるように配慮している。その分、イベントをおえて帰ってきた時は「みんなでめちゃめちゃほめます！」と話す。その後のフィードバックは、他の家庭でも違うことをやってきた仲間との共有体験をするため、感動を述べるフィードバックを重視している。

「サンタプロジェクトは、高校生にピッタリの活動」と語る職員の池田さんは、その良さを①企画・準備・運営をグループに任せることのやりがいと達成感、②訪問する母親の希望を取り込んで企画をする良さ、③子どもたちのナマの反応を受けとめることができる、とまとめてくれた。

高校生の感想に「予想以上に喜んでくれた」「楽しかったで。またやりたいって思った、チームの人、ありがとう！」「全体としては町の交流が深まり乳幼児さんに喜んでもらえていい企画だと思いました」など、充実感があることが伺える。

【児童館職員は『中高生の関わりに困っている！』】

グループ内で準備時、自分から何も発言しない高校生がいて、人間関係で悩んでいたチーフ格の高校生は、「当日彼も一緒に活動を楽しんいて笑顔でよかった、でもふりかえりの時はまた、何もしゃべらずいつものようになってた」と語った。

こうした活動を数年実施してきた職員は、「今、高校生の活動に対して、これでよいのか悩んでいる」と話した。その理由としては、サンタプロジェクトなどで、「ふりかえり」をしても、数年前と比べ、自分の気持ちを仲間の前で語ることに躊躇するなど「空気を読みすぎてお互いにいいたいことがいえない」状況からだ。中高生が明らかにかわってきており、どう対応したらいいか、困っているという。口コミで活動に参加し、仲間の和が広がるということも難しくなっている現状があるという。「全国の児童館職員が『困っている』ことを声にだして、何か問題なのか？語れる場があったらいい」と熱く語っていたのが印象的だった。

事例紹介 1

NPO法人市川子ども文化ステーション

わが街を感じながら育つ子どもたち

■団体概要

NPO市川子ども文化ステーションの前身は同市子ども劇場。子どもたちの活動を幅広く支えていくために法人化し、現在は乳幼児から中高生、青年層、保護者世代まで「子どもを街で育てること」をキーワードにさまざまな活動を展開している。ミニミュンヘンをもとに開催するミニいちかわの主催団体。

■活動事例

市川子ども文化ステーションでは「舞台鑑賞活動事業」「子どもの体験活動事業」「子育て支援事業」「文化事業」などの活動を行っている。各事業は活動対象を明確にし、子どもたちが関わる事業については、活動を計画してから実施するまでのプロセスを重視し、子どもの自主性を大切にしている。事業は対象となる年代に任され、メンバー（子どもたち）が主体的に関われるように工夫されている。中高生の世代のメンバーが主に関わるのは、夏のキャンプ、ミニいちかわ、春の「草笛交流会」（中学生から青年までが参加するキャンプ）などの事業があり、そのそれぞれに希望して実行委員となる。実行委員会はイベント当日に向けて（事業ごとに期間に差はあるが）数か月の間、回数を重ねて、内容についての話し合いや準備作業などを自分たちの手で進めていく。どの事業に関わるかは自由で、例えば春のキャンプには実行委員として深く準備から関わっても、夏のキャンプは参加者として当日だけ行き、ミニいちかわは実行委員として準備の最初から関わるなどといった具合で、自身の都合や興味関心に応じて参加の度合いを調整することができる。

■活動の特徴

取材にうかがった時には、決して広くない事務所にはメンバーがあふれるほどで、温かく活気に満ちあふれていた。訪問時は休日の夜にもかかわらず、大勢の青年が熱心に話し合いをしていた。

ここでは、就学前の子たちから青年・大人までが対象に合わせた様々な事業を展開し、それぞれ年齢に適した自主性を重んじた活動を行っている。そうした活動を通じて、中学生・高校生の社会性や主体性が自然と育っていくと感じた。活動歴を尋ねると「小さい頃から」という答えが返ってくる。大きな縦割りの子ども集団（年少者～中高生）が、大家族のように互いを気遣い、認め合い、関係を深めながら活動していくところがポイントだろう。子どもたちが街の中で自然に育ち、中高生になってもその活動が当たり前のように継続されている。

3. 先駆的な活動を対象とした調査

①中高生を対象とした質問紙による調査

先駆的に中高生の活動へ取り組んでいる児童館・社会教育施設などに依頼して、そこで活動をしている中高生を対象に、質問紙によるアンケート調査を実施した。併せて施設に対する調査も実施した。

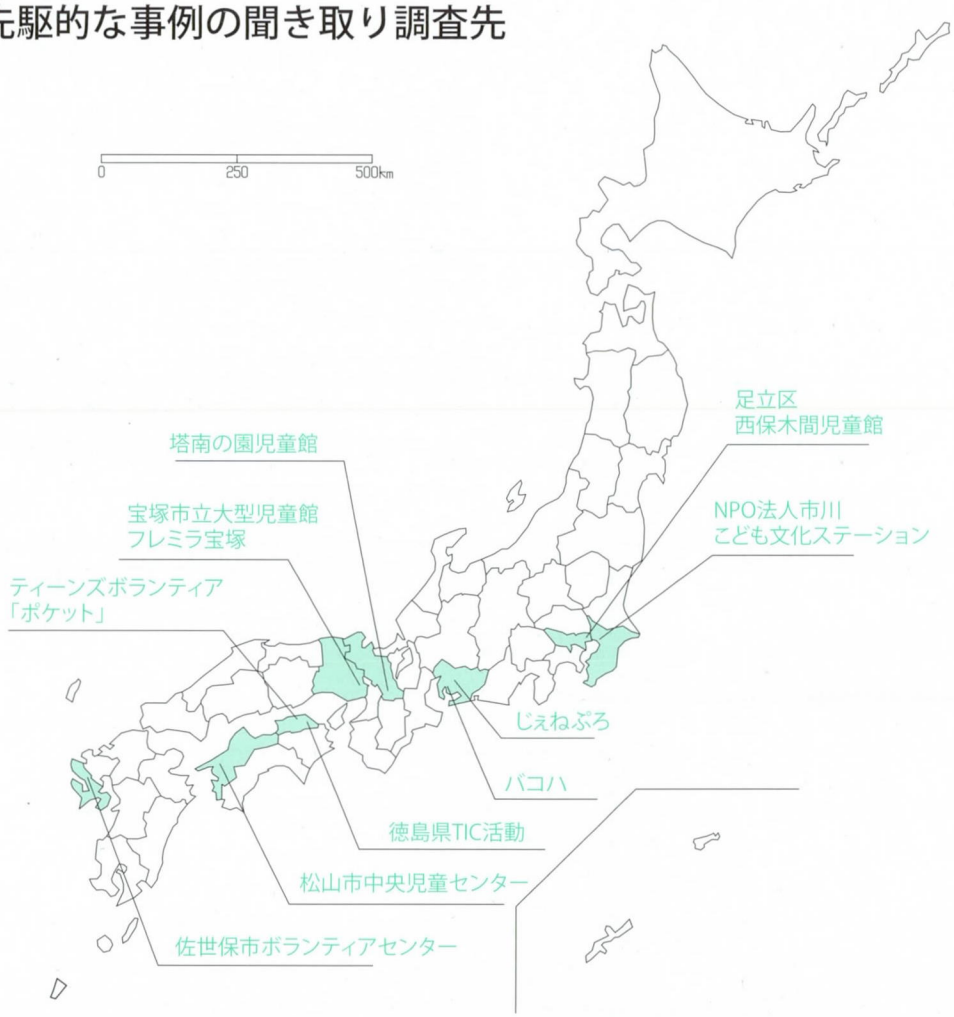
②中高生を対象とした聞き取り調査

中高生のより生の声を発信してもらうために、こどもの城スタッフによる聞き取り調査や、中高生を中心とした対談などを実施した。

4. 報告書「地域に発進!!ボランティア 1・2・3」を発行・配布

本誌の発行、配布。今年度実施したさまざまな調査の結果を報告書にまとめ、全国の児童館、各自治体の児童福祉主管課および教育委員会青少年育成担当など関係団体に配布する。

先駆的な事例の聞き取り調査先



「児童館における中高生のボランティア活動活性化事業」事業の概要

中高生の居場所づくりは、人間関係の希薄化が進む現代社会において青少年の自律性、社会性を養うための重要な課題であり、地域のさまざまな機関が取り組んでいる。また、青少年期のボランティア体験は、学校教育現場でのカリキュラムにも取り入れられ、生きる力を育み、その道徳心を養う機会として積極的に推進されている。ところが現時点で、児童館を含む地域組織は、この『居場所づくり』と『ボランティア体験』に取り組んではいるが、この2つを相互に関連づけ、効果的な健全育成事業に結びつけているところは少ない。青少年の育ちの過程として注目されている、居場所づくりとボランティア活動を有機的に結びつけ、ひとつのプログラムとして行うことは児童館における中高生健全育成事業を推進するうえで、極めて有効な方法論であり、その実践は急務であると考える。

そこで、児童館・ジュニアリーダーなどで行われている中高生の活動について、そのコーディネート、中高生の意識などについてのアンケート調査を実施し、こうした活動の効果や課題を明らかにし、ボランティア活動が個人の生活の充足にとどまらず、青少年の自立となる社会性の獲得につながることの重要性を訴える。

事業内容

1. 運営委員会の開催

調査研究の手法、内容の検討、調査データの分析、ボランティアのコーディネートのあり方を検討することを目的に運営委員会を開催した。委員については以下の通りである。

氏名（五十音順・敬称略）	所属
小澤　由紀夫	港区立赤坂子ども中高生プラザ館長
勝部　久美子	NPO法人市川子ども文化ステーション事務局長
田中　豊	独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立オリンピック記念青少年総合センター専門職員
原　京子	NPO法人こどもNPO事務局長
久田　邦明	神奈川大学講師
増山　均	早稲田大学第一文学部教授
水野　篤夫	財団法人京都ユースホステル協会
森田　洋喜	松山市中央児童センター

2. 児童館・自治体を対象とした調査

全国の児童館、各自治体の児童福祉主管課・教育委員会を対象に質問紙によるアンケート調査を実施した。

中高生聞き取り② じぇねぷろ …… 33
中高生聞き取り③ 塔南の園児童館 …… 34
中高生聞き取り④ バコハ …… 35
提言④「関わりやすい子だけ相手にしていていいの？」水野 篤夫 …… 36
提言⑤「中高生ボランティア活動活性化を青少年教育施設との連携で」田中 豊 …… 38
中高生聞き取り⑤ ティーンズボランティアグループ「ポケット」 …… 40
中高生聞き取り⑥ 松山市中央児童センター …… 41
提言⑥「児童館と居場所とボランティア…」森田 洋喜 …… 42
提言⑦「中高生を児童館に受け入れるために」久田 邦明 …… 44
提言⑧「中高生世代へのアプローチの基盤を考える」佐野 真一 …… 46
アルバム …… 48

地域に発進!!
ボランティア1・2・3

■発行者 こどもの城
（財団法人児童育成協会）
■発行日 2008年3月1日
■助 成 独立行政法人福祉医療機構
■編 集 こどもの城企画研修部
■デザイン 第一印刷所
■印 刷 第一印刷所

もくじ

目次 CONTENTS

事業の概要 …… 4
事例紹介① NPO法人市川子ども文化ステーション …… 6
事例紹介② 塔南の園児童館 …… 7
提言① 「児童館における中高生のボランティア活動活性化にむけて」増山 均 …… 8
提言② 「大人は雑草になって向き合おう」勝部 久美子 …… 10
事例紹介③ ティーンズボランティアグループ「ポケット」 …… 12
事例紹介④ 徳島県TIC運動 …… 13
事例紹介⑤ 松山市中央児童センター …… 14
事例紹介⑥ 中高生の居場所「バコハ」 …… 15
提言③ 「やりたいことを見つけ、それを実現していく機会をつくる」原 京子 …… 16
事例紹介⑦ 宝塚市立大型児童センター フレミラ宝塚 …… 18
事例紹介⑧ 足立区西保木間児童館 …… 19
事例紹介⑨ 佐世保市社会福祉協議会 佐世保市ボランティアセンター …… 20
アルバム …… 21
対談① 「みんながいるからフレミラが好きやねん」フレミラ宝塚 …… 22
対談② 「失敗が、活動の継続につながった！」じぇねぷろ …… 26
アルバム …… 31
中高生聞き取り① NPO法人市川子ども文化ステーション …… 32

［資料ページ目次］

目次 …… 1
アンケート概要 …… 2
児童館・自治体へのアンケートの総括 …… 3
児童館へのアンケートの結果と考察 …… 8
自治体へのアンケートの結果と考察 …… 14
中高生へのアンケートの総括 …… 20
中高生へのアンケートの結果と考察 …… 22
資料 …… 28

ごあいさつ

平成12年から14年度にかけて、財団法人児童育成協会では子育て支援基金の助成を受け、「小中学生ボランティア交流事業」を行いました。小中学生のボランティア活動に対する意識づけには、小中学生にとって魅力的な大人のボランティア像が重要になってくると考え、「遊び」を媒介して子どもたちと接する、児童館ボランティアの育成に取り組みました。そのとき作成した冊子「地域に発進!! ボランティア1・2・3」は多くの方々に目を通していただき、今まで私たちが交流する機会のあまりなかった方からもご意見やご連絡をいただく事になりました。

5年の月日が経過し、子どもたちや児童館を取り巻く環境も当時と変わってきています。再び、子育て支援基金の助成を受け、平成19～20年度と2年間にわたって、「児童館における中高生のボランティア活動活性化事業」を実施する機会をいただきました。この事業では、前段でお話した、前回の事業の課題をふまえて、直接的なアプローチが可能であろう中高校生を対象とし、アンケート調査の対象も児童館に限らず、社会教育系統の施設や行政の方たちにもその状況を広くお伺いしました。また、前回は大型児童館を中心に検討をしましたが、今回は積極的な活動の事例をより広範に集めたいと考え、聞き取り調査も取り入れています。今年度は2年計画の事業の前半にあたり、アンケートと聞き取り調査の報告が主な成果です。来年度はこの調査の分析をもとに、より具体的な提言をまとめていく予定です。たくさんの方に見ていただき、幅広いご意見、関連する情報などをいただければ幸いです。

最後になりましたが、事業の最初の段階から貴重な助言と情報を下さった運営委員の皆様、こうした事業の機会を再びくださった独立行政法人福祉医療機構の皆様に感謝申し上げます。

財団法人児童育成協会　こどもの城　企画研修部長　吉田治

独立行政法人福祉医療機構
「長寿・子育て・障害者基金」助成事業

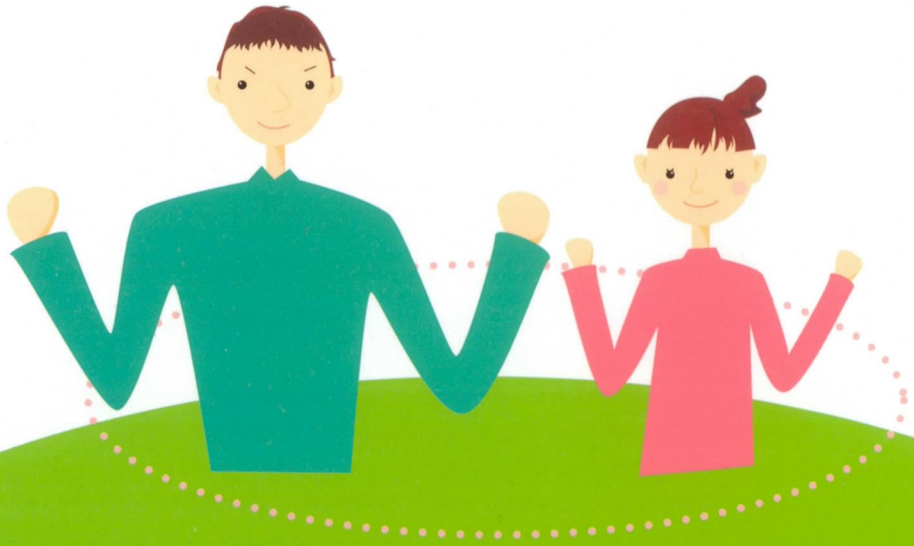
児童館における中高生のボランティア活動活性化事業

地域に発進!!

ボランティア 1・2・3

ワン
ツー
スリー

VOLUNTEER



こどもの城